
女鑑
第十八年
第十

女鑑第十八年第十號目次

近來の快事▽女優問題と家庭（一）……社説
育兒と家庭（四）……博士夫人 丹波貞子
家庭と音樂（一〇）……戸川殘花
目に見えぬ人の力（一二）……ミスハサウエー
女子頭髮の沿革（一三）……佐藤達也
女子に對する希望（一七）……村田勤
悲慘は隣にあり（二三）……山室きえ子
菊の花（二七）……中山幸子
裁縫の話（二八）……小出新次郎
輕便日用料理（三〇）……中島鎮子
無用なる學問の効用に就て（三三）……文學博士 元良勇次郎
造化の配劑（三八）……池谷登喜
婚資を利用せよ（四四）……木村堅爾
女子の戒愼すべき事（四九）……醫學博士 大澤謙二
女子の三面觀（五二）……山田光英
阿佛尼（九七）……谷紀三郎
秋のうた（五九）……菅惠子
電車の話（六二）……理學博士 田中正平

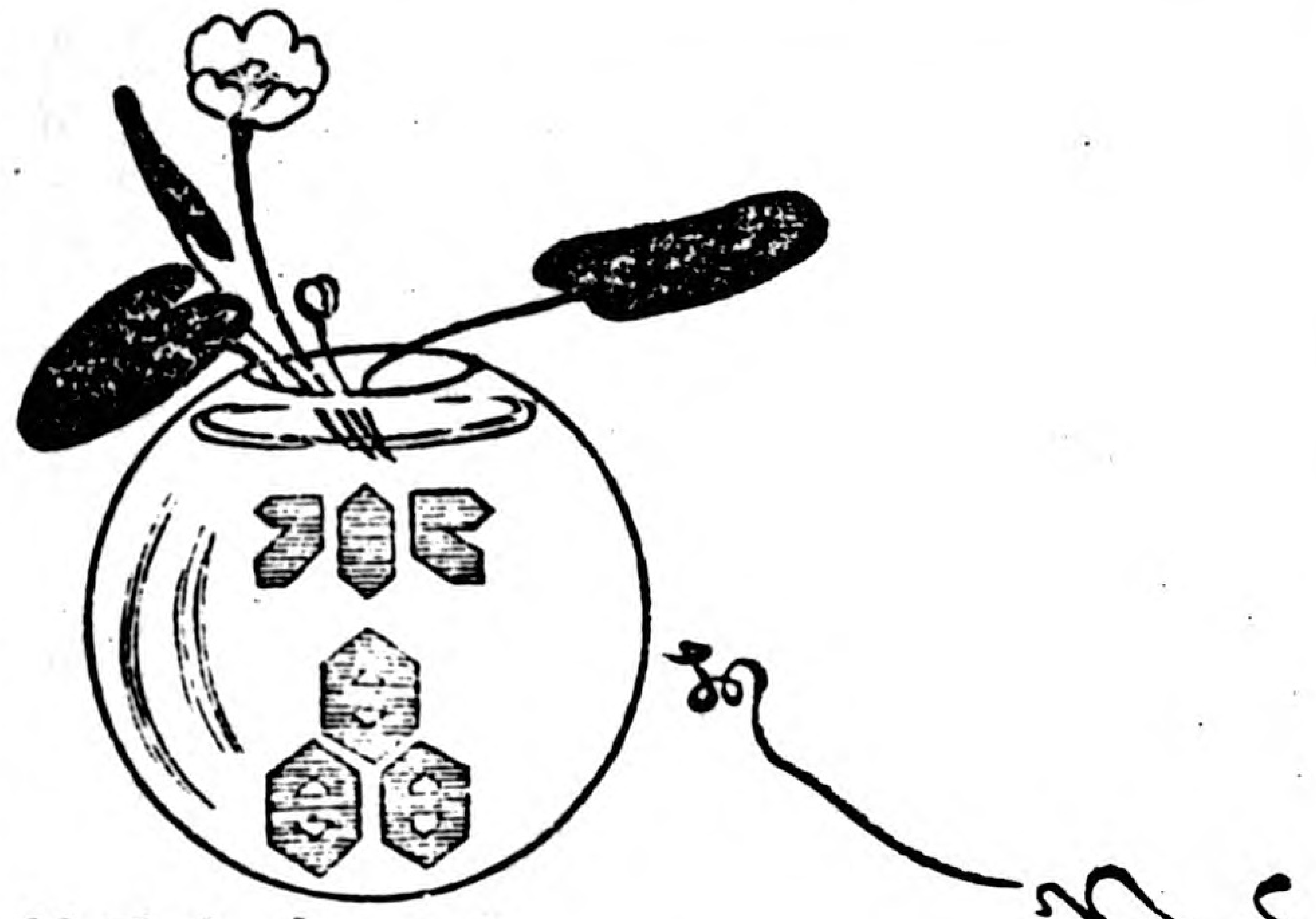
安東菊子刀自の許に遊びける時（六六）……小川直子
巴里の婦人（六九）……福地天香
障子張替の方法（七九）……生方襲
誤解されたる女子の三從（八四）……文學士 雜賀健
試驗の爲に勉强すべからず（八九）……文學士 村上龍英
夫婦觀（九一）……千勝義重
小說十月一日（九七）……淺岡朴堂
秋の服裝（一〇四）……飯野三一
國家的要求と婦人の發展（一一六）……成瀨仁藏
中山幸子刀自を訪ふ（一二二）……豫見道人
音樂雜話（一二五）……中川愛氷

讀者文藝 《附・新刊紹介》

▽彙題 野菊、雜題……佐々木信綱君選
△彙題萩……入江子爵選
▽短文新體詩……鹽井文學士選
▽俳句……内藤鳴雪君選

裝畫

◎表紙 口繪袖の香（山本昇雲）挿畫（池上蓮齋、山本昇雲）……
◎寫眞 濱田博士の家庭▽閨秀歌才▽德川柳原兩伯の繪葉書▽令孃かゝみ▽振分髮▽雨後▽グレイ▽卒業式の紀念……



東京大和屋製

賣捌は全國至る處にあり

定價

小瓶 十五錢

中瓶 廿五錢

大瓶 五十錢

獨逸國ロールメヂシンス會社製品

皮膚特効美白新劑

(一名にきび知らず)

濃厚なる◎◎◎

化粧液チプリ

○本品は濃厚なる原液なれば三倍程の水を加へ常に御用ひあれば自然白色艶麗の美顔たらしむる事を保證す

○本品は最る「ニキビ」「ハタル」一日ニヤケ」其他「顔のアー」に奇効あれば朝夕洗面後手の掌に四五滴たらして塗布せば重きも十日輕もは五日位にて効あり

本品の縮圖



小瓶 二十五錢

○本品の効能顯著なる爲め遂に政府印紙を貼用するに至れり本邦に於て化粧水に印紙を貼用せるは本品を以て嚆矢とす

○市内は勿論到る處の賣藥小間物化粧品店にあり品切れの節は送料八錢(四瓶迄)相添へ代理店御へ注文あれば直送す

日本一手販賣 東京日本橋區本石町四 松澤常吉

袖乃香



第五回內國勸業博覽會賞牌及褒狀受領

壽美禮おしろい

登錄商標

壽美禮おしろい

◎壽美禮白粉は歐米諸國に專ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成績體等を以て配劑しあるを以て常に用ひて御顔肌を艶麗ならしめ清々しく天然と色白きに至るべし殊に衣服半襟等のよごれざると汗の爲にムラを生ぜざるは本白粉の特色なり「菫れしろい」は芳香馥郁として長時間保續するが故宴會、祝席、雜踏の場所に臨むに衛生上又社交上有益無比の逸品なり「壽美禮白粉」は高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方東京横濱其他に於ても上流社會に益々好評を博しつゝ、流行せり

◎西洋皮膚艶麗劑

壽美禮あらひ粉の特性

◎壽美禮洗粉は近來歐米諸國に賞賛する香料及弊店が多年研究の上へ製せし獨特の新原料を用ひて製せし品なれば朝夕此の洗粉を御用ひ給はゞ常に御肌の艶深くきめを滑かにし色白く美しくなす◎壽美禮あらひ粉は御髪洗ひに御用ひ給へばねばりを取り油あか等を生ぜず又半襟ハンカチー フ絹布等に用ひて能く汚垢を落す總て物を漂白する特性あり◎御使用法は普通あらひ粉の半分にて宜ろし水又は温湯に溶し又ぬかに混ぜ御入浴の際用ふるをよしとす

綠、藍、紅彩蝶香ひ 罐詰 八錢

別製罐詰 五拾錢

大袋 二錢 小袋 一錢

登錄商標

四洋色白くなるあらひ粉

SUMIRE
WASHLNG POWDER

壽美禮あらひ粉



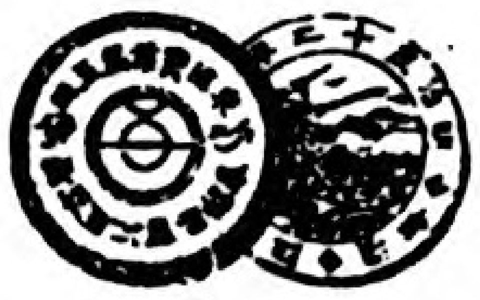
販賣所は全國到る處の小間物店化粧品店賣藥店等に有之候に付御近邊にて御求めを乞ふ

製造本舖

東京東兩國元町(兩國橋際)

壽美禮堂謹製

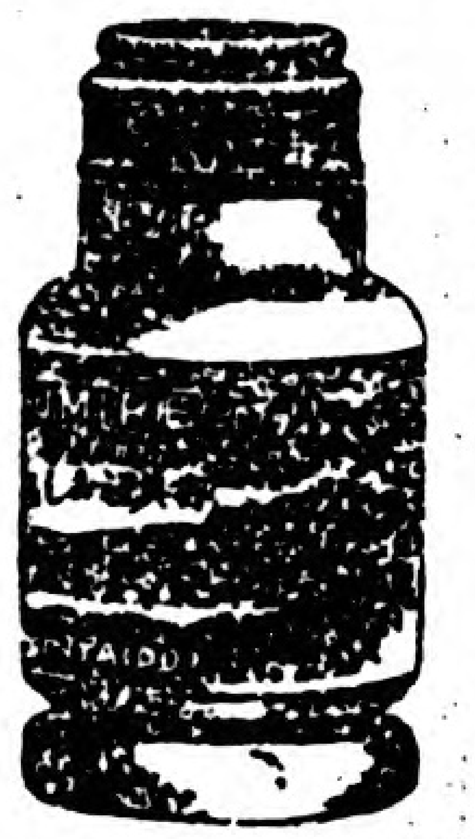
五二會品評會
功勞賞牌



THE BEST MAᗡE
SUMIRE
VIOLET PASTE

ヴワイオレツト煉製

錫蓋附乳白硝子器入



壽美禮れしろい

ヴワイオレツト水製

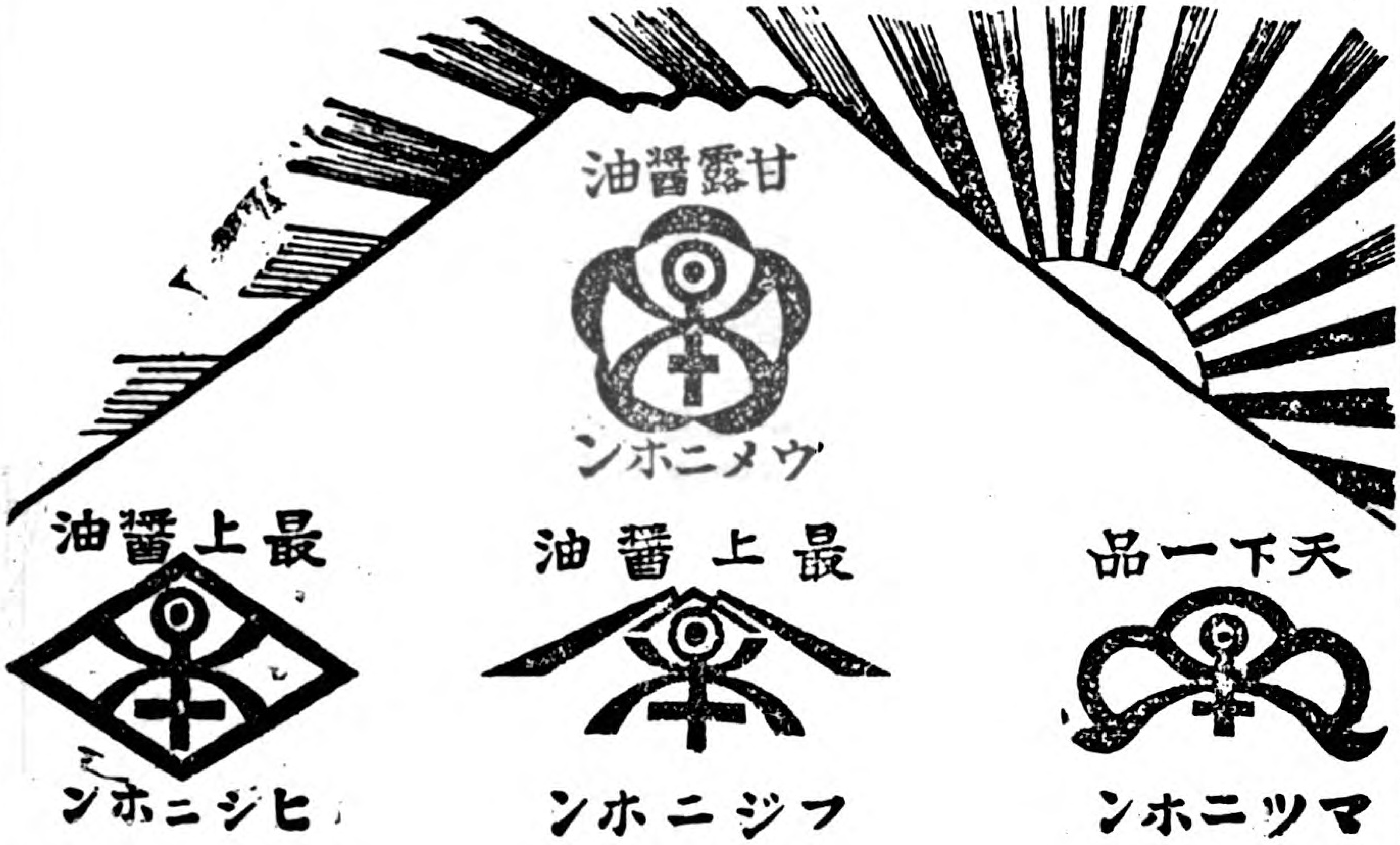
れり製 定價 大壜二十錢 小壜十二錢

水製 定價 大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢

錫栓附乳白硝子壜入

醬油釀造界の一大革新

最良醬油



●資本金＝壹千萬圓

釀造元 日本醬油釀造株式會社

東京深川區小名木川通

電話浪花（長）三七三番 一五九五番

特色

製造淸潔

品質佳良

黴を生ぜず

價格低廉

特色

弊社は前人未發の新發明にかゝる嶄新にして完全なる鈴木式釀造方法及機械的裝置により精良無比の醬油を釀造販賣す

特約販賣所

東京日本橋區北新堀町

合資會社 日本醬油東京販賣所

電話浪花（長）一四六番

其他 東京酒類問屋組合酒類仲買店及各地小賣店にて販賣致候間御用命願上候

濱田博士の家庭



右より　濱田玄達君　長男　捷彦君　令夫人　ステ子君　長女　榮子君　甥　實彦君

閨秀歌才



海野勝珉氏令孃　柳子君

日下部法學士夫人　靜子君

雁の音づれ





上は徳川達孝伯、下は柳原義光伯より、中川主筆に送られたる繪葉書

令嬢かゞみ



佐々木博士令嬢 順子君 貞子君

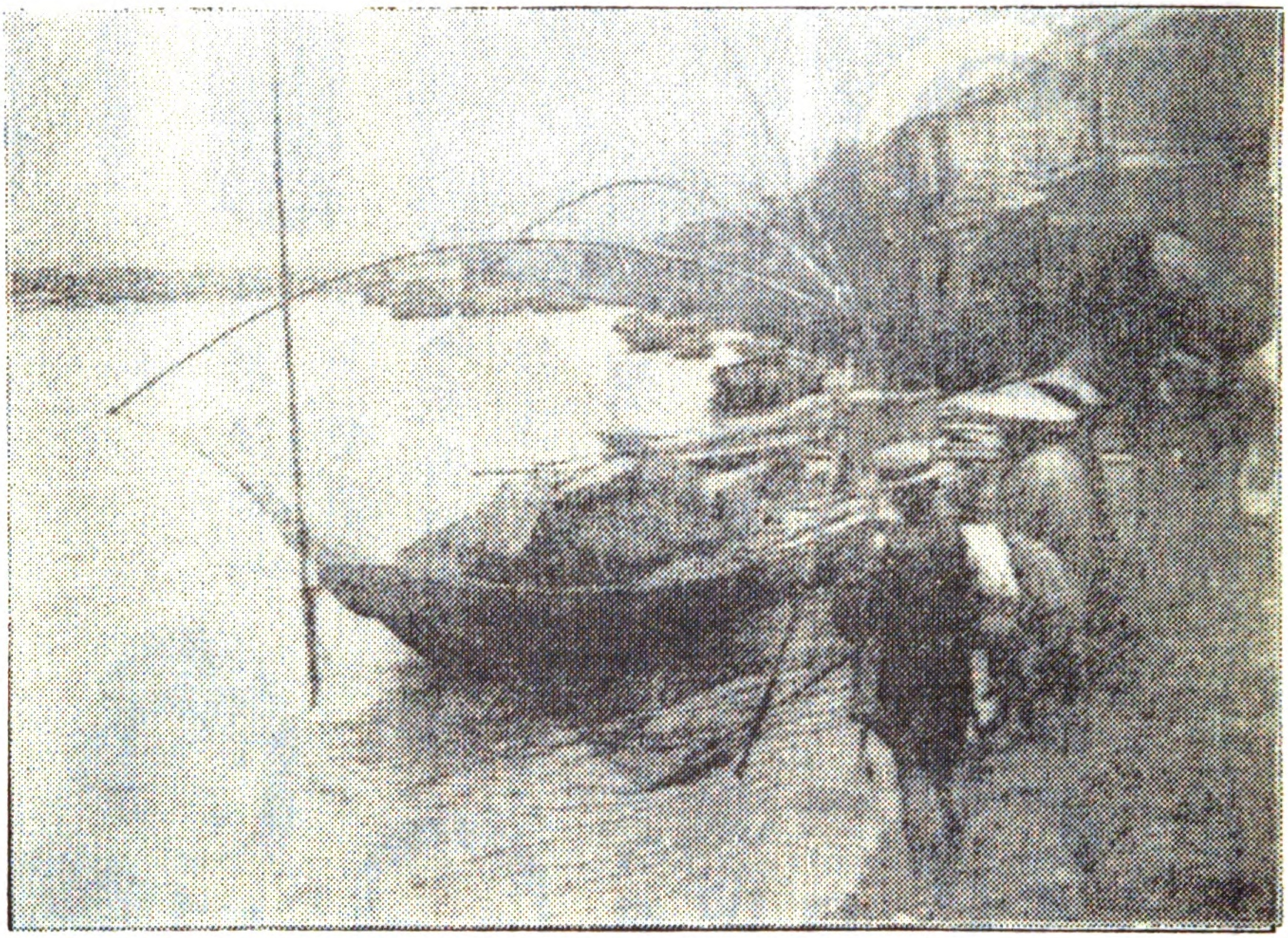


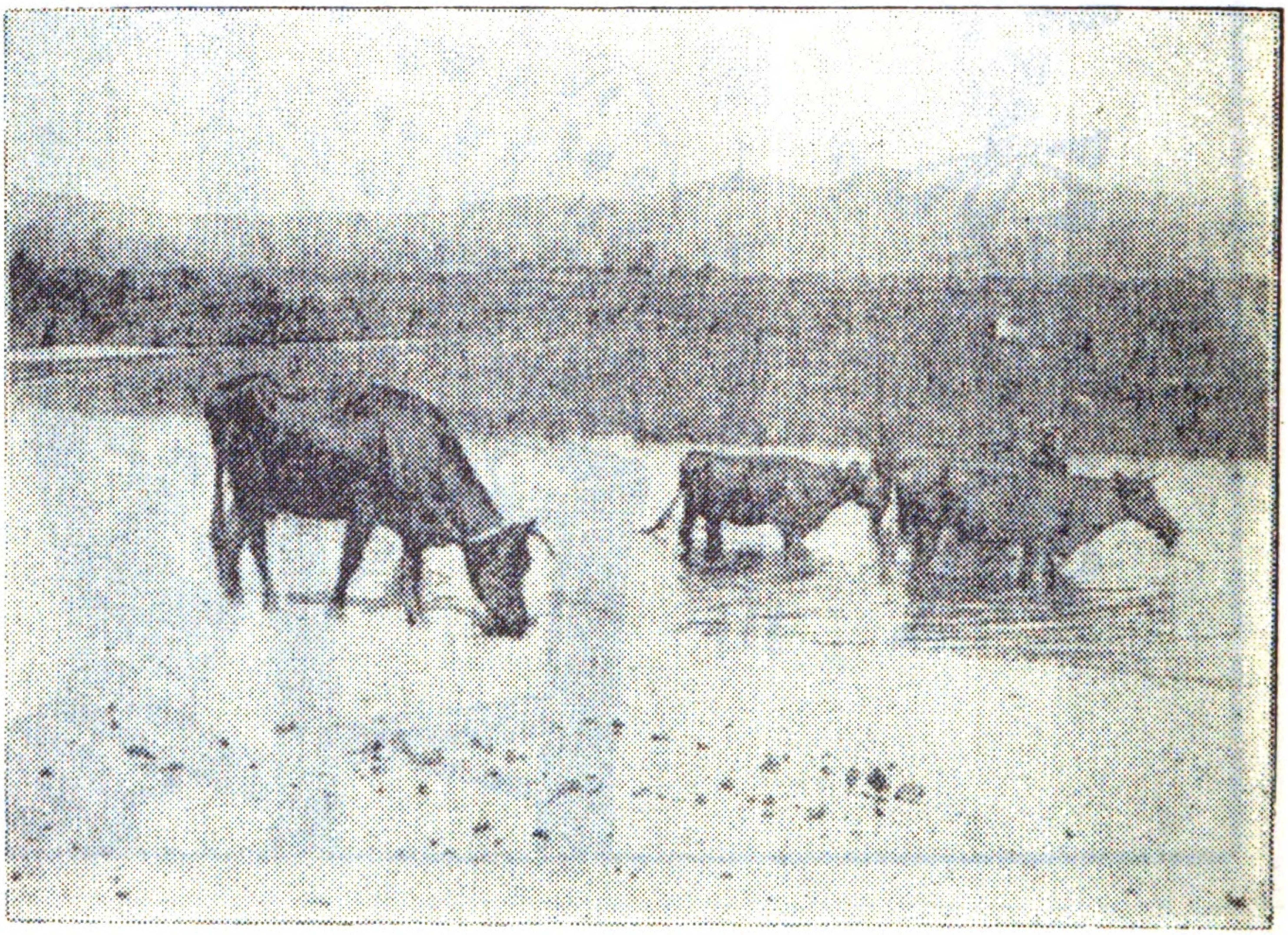
吉田鶴子君

振分髪



雨後





伯爵松平直之君撮影


大
大阪呉服店
十月一日より
大賣開き見切反物よせきれ澤山
懸賞裾模樣實物に染上
げたるもの幷に
圖案各種數千枚
其外季節物
珍柄取揃へ
陳列



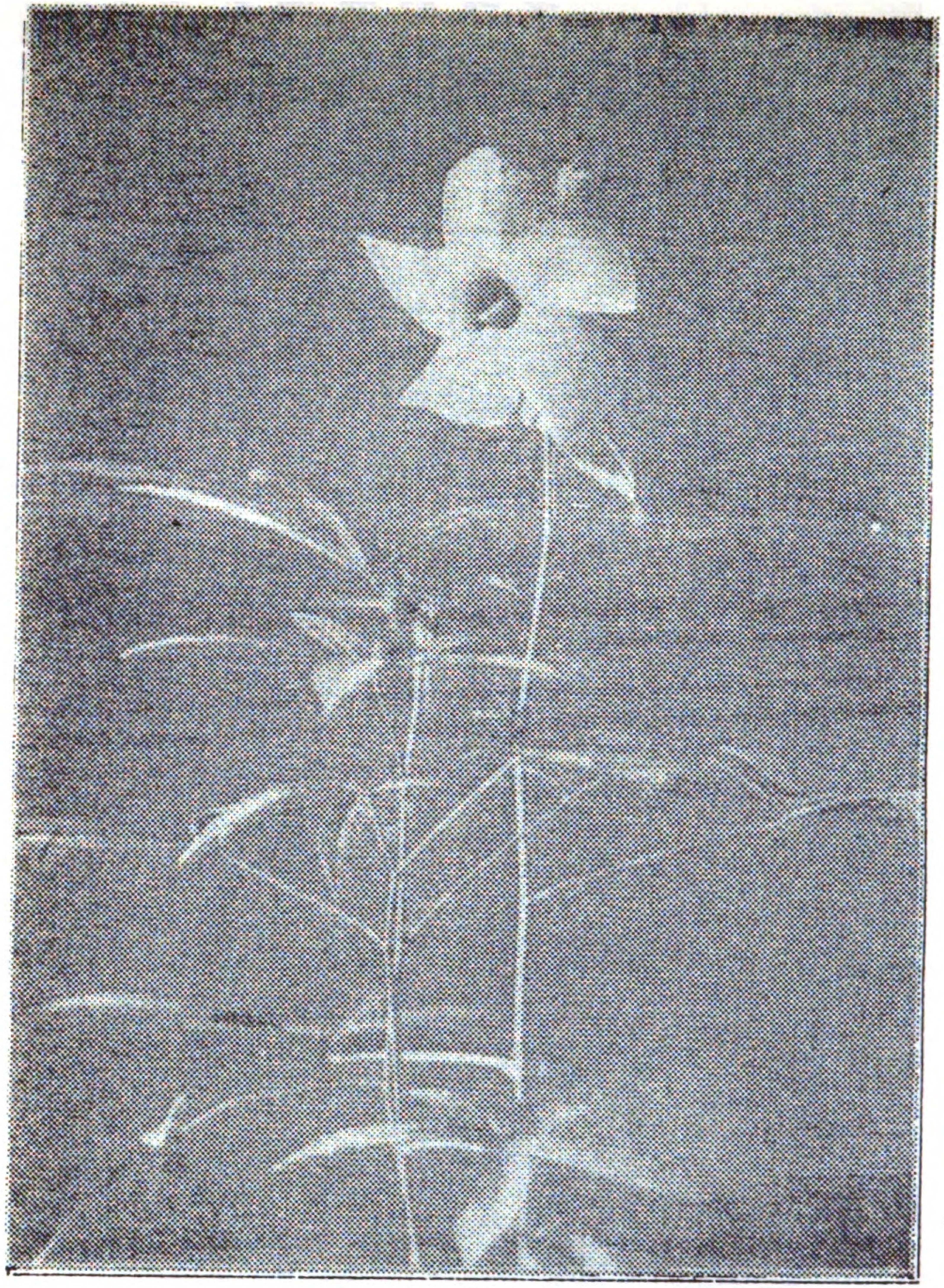
懐中要薬
清心丹
清心丹特有の効能は常に食後食後に服用すれば消化を速にし胃腸を健全ならしむるにあり
登録商標
髙木
東京市日本橋區元大坂町八番地
本舖　髙木與兵衞



妾事小供の時より薄毛にて種々の薬を試みしも効なかりし所洋行中なりし醫學博士令夫人より奇薬を得是迄の薄毛も濃くなり又毛の生へざりし所迄毛生へし嬉しさの餘り困る方に告たし三銭郵券を添へ御照會あれ
東京市京橋區越前堀　河村愛子
を教ゆ

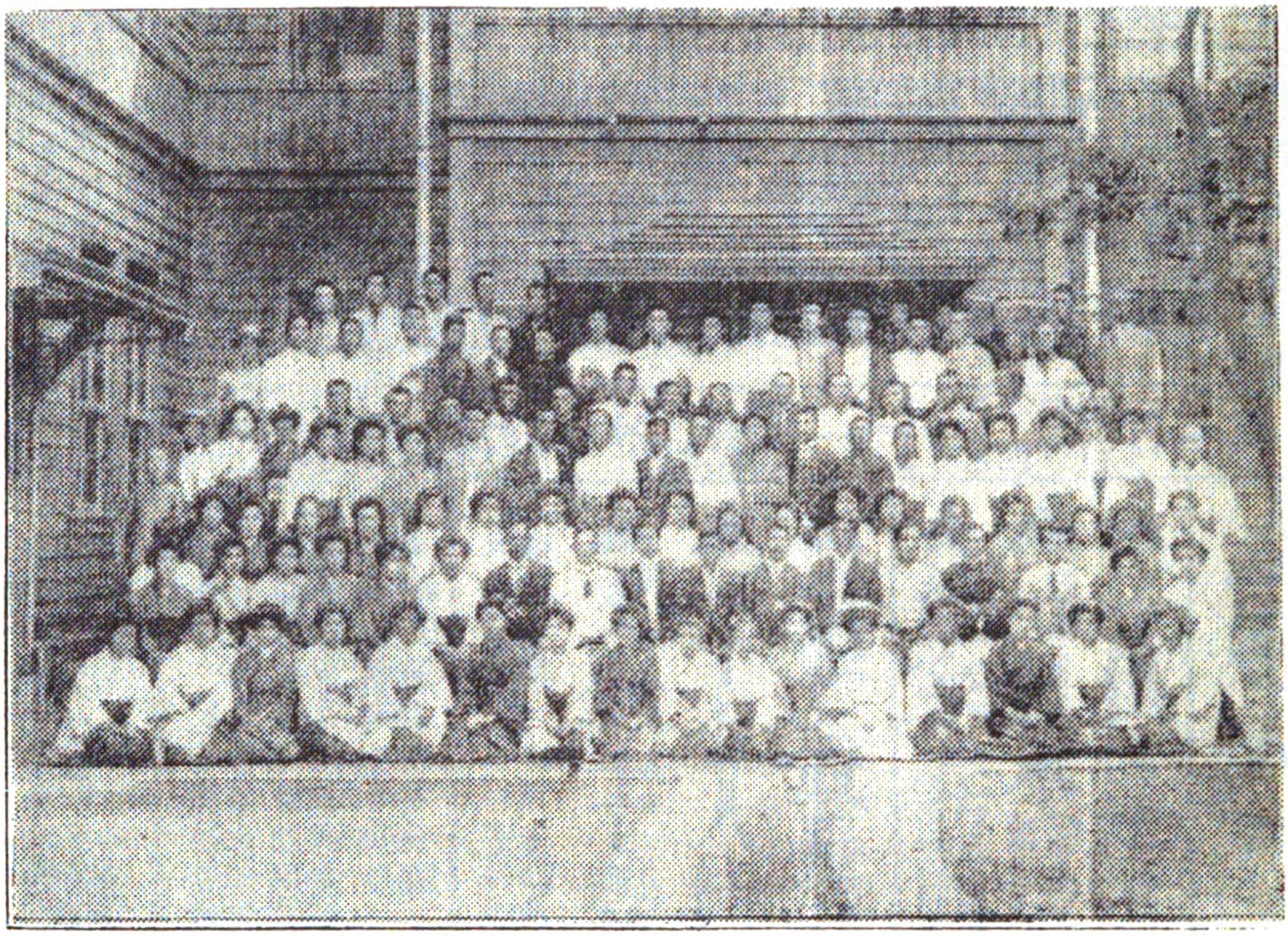
グレイ





井伊直方君撮影

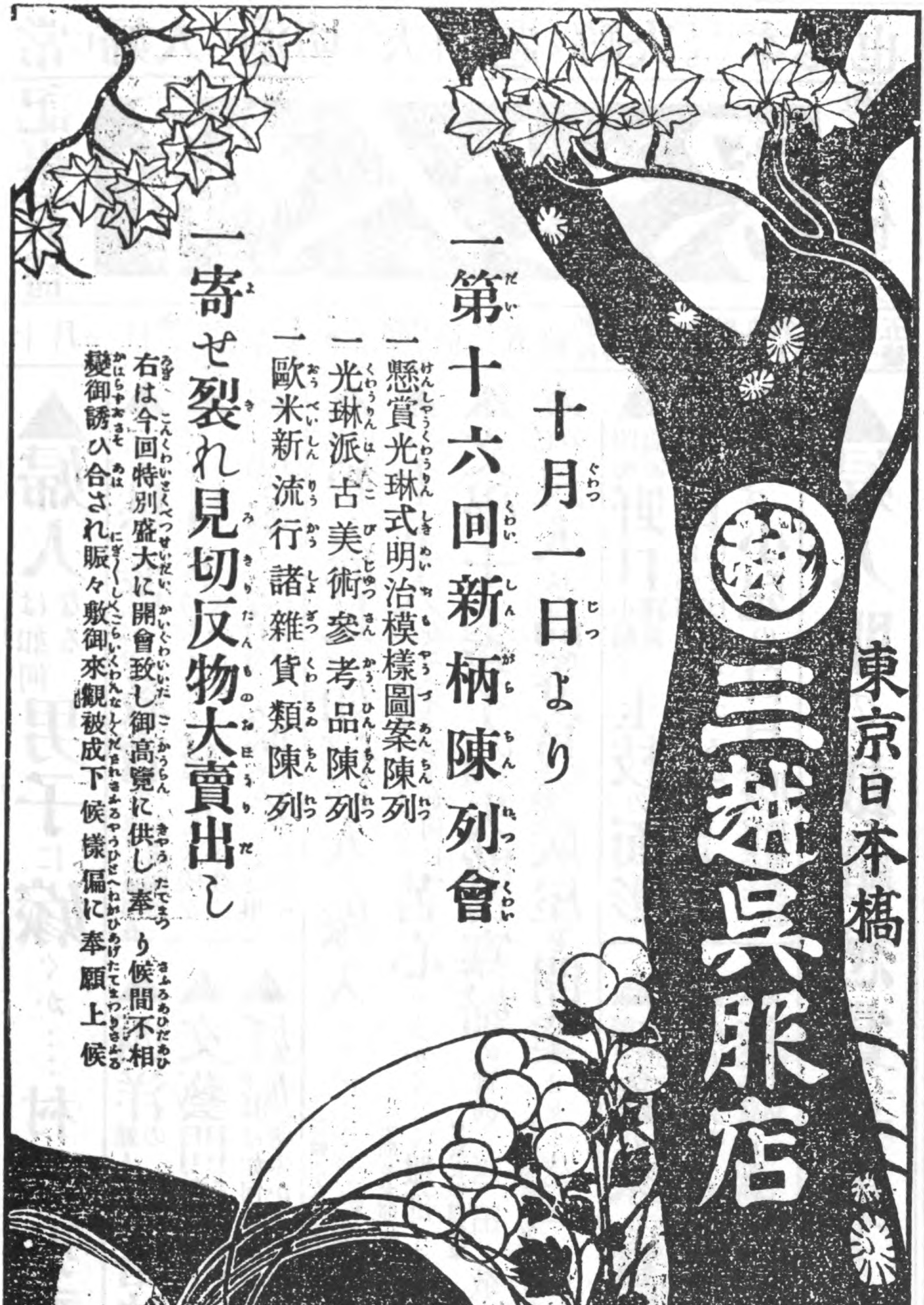
卒業式の紀念



東京音學院講習會



九重式編物講習會


東京日本橋
三越呉服店
十月一日より
一第十六回新柄陳列會
一懸賞光琳式明治模樣圖案陳列
一光琳派古美術參考品陳列
一歐米新流行諸雜貨類陳列
一寄せ裂れ見切反物大賣出し
右は今回特別盛大に開會致し御高覽に供し奉り候間不相變御誘ひ合され賑々敷御來觀被成下候樣偏に奉願上候

女鑑

第十八年第拾號

近來の快事

俚諺惡文字をカナ釘の折と稱す、不思議にもこのカナ釘の折を、小學校の教科書中に見るに至り、之を名けて棒引文字といふ、文字の墮落はそれのみに止らず、詞の墮落を導くべく、假名遣をも破壞せらるゝことゝなりたるが、泣く兒と地頭には勝れず、さりとては一部に限られたる訛を以て、全國の正しき詞を改惡せんとするは、寧ろ慘酷の沙汰といふべく、されば眞面目なる學者、憂國の志士によつて國語擁護會といふものさへ起り、この問題久しく世間を騷がしたるが、賢明なる文部大臣小松原氏は、就任匆々、直にこの難大問題を解决せられて、以後國語假名遣は吾人の望む所なる、正しきものによることゝなれり、水の低きに向つて流るゝ限りは、もとより當然のことなるべきも、邦字を羅馬字に改めんなど稱する變り者にも、少しは耳を貸す世の中なれば、文相が今回の壯擧も、三たび觴を擧げて舞ふべく、茲に謹んで小松原文相の德を讃美す。

女優問題と家庭

噂のみにても、某々男女の教授が、風紀刷新の爲に、音樂學校より免官されんとする快事を傳へらるゝ時に於て、女優問題といふ困つたものが起れり、俳優も一の職業なり、この俳優によつて、美的藝術は演せらる、俳優の必要なることは論を俟たず、去ながら俳優は俳優として必要なり、今日の所に於て、一般士女の俳優たるべきことは、大に考へねばならぬ問題なり、二十年の前に遡りて、俳優は一の醜業者として未だ士人に齢せられざる時、壯士劇なるもの起れり、藝は極めて拙なるも、其意氣に愛すべきものありたりき、爾來十餘年、その藝はやゝ上達して、兎にも角にも所謂舊劇と對峙するに至るや、何時の間にか其行動も舊俳優の如く軟化せり、この時に於てまた文士劇なるもの起る、未だ數年ならずして、その行動等しく芝居者となれり、今後は吳服屋劇、芋屋劇などいふものゝ起らんも知れず、その言ふ所、說く所、人格を云々し、品性を兎角するも、それは旗を上ぐる時の名なり、世の中に人格品性を度外して可なる場合あらんや、去ながら壯士といひ、文士といひ、其劇壇に立たんとする時に於て、藝術に於ける抱負のみに止め置かんには、寧ろ齒の浮くことあるまじく、既に劇を演す、吳服屋劇、芋屋劇といふものゝなき限りは、壯士劇も文士劇もあつたものにあらず、等しく俳優なり、演劇なり、而して今日まで品性高き人にしてこの俳優となれるもの幾何かある、吾人は古俳優中その一二を傳ふるを知るのみ、學校に通はせてさへ、滿足なる人物には仕上げ難きに、意思の未だ鞏固ならざる青年男女を、如上の如き劇界に樂屋入をさせること、いかにしても眞面目にては出來ぬ話なり、

然らば劇界は斯くて一貫すべきや、否改良すべく、また大に改良せらるべし、併ながら濟むは容易のこと

にあらずして、濁るは求めずともの事なれば、劇界改良も未だ一朝一夕の事業にあらず、この時に於て女優問題は起れり、女優は今更始まりたることにあらず、たゞ物珍らしげに聲を揚げたるにて、近時某女によつて組織せられたるもの、名士の賛助もありて頗る振ふ、その女優採用試驗は、一に顔の輪廓を撰ぶ、俳優に於ける第一の財産は顔なるべし、顔を賣物として之に應ず、左樣なる人もありてよかるべし、たゞ高等の學を修めたる、某狀師の令孃の之に加はりたるを以て、直に女優の價値の上りたる如く思ふは間違ひの骨頂なり、

某狀師の令孃も、芋屋の娘も、俳優となりては變る所なし、或は云はん、學問といひ、品性といひ、相當の敎育あるものを用うれば、自ら劇界の風紀を一新し、社會に及ぼす影響に於て相違する所あらんと、成程一應は道理千萬の事にて、吾人も爾くあらんことを希ふ、去ながらそは灰汁壷の上水を眺めたる話にて、事實はなまじい學問があり、品性を云々する丈が邪念ふかく、今の時代に於て、妙齢の子女が顔を賣物にして俳優を志願する如き、その心事既に墮落して、たゞ學問の力が、巧みに辭柄を作り得るに過ぎず、その心事の墮落は、惡家庭に育ち、虛榮心の增長したるより起る、

古來女子と小人は養ひ難しといふ、而して生學問したる女子の養ひ難き程困るものはあるまじ、家庭に於て子女を敎育する、少しの油斷もあるべからず、然るにその子女の模範たるべき家長その行を缺き、家庭まづ紊るゝに於て、この間に如何に立派なる子女を求めんとするも、到底出來得べき話にあらず、某狀師のその令孃が俳優とならんとするや、流石に萬斛の涙を流して、その淺ましき心事に泣き、然も遂に之を許すの止むなきに至れりと聞く、俳優となるの善惡は別問題とするも、そを希望せざることは事實にして、然も之を止むる能はざるに至らしめたるは、抑々誰の罪ぞや、まづ自ら其罪に泣け。

育兒と家庭

博士夫人　丹波貞子

折角の御訪ねで御座いますが、東京とは申しながら、御承知の通り田舍も同様な片寄つた處に住つて居りますのみならず、至つて出無精の方で御座いますから、自然皆様方のやうに見聞を致します事も狹いので御座います、それゆゑに是ぞと申し取立てゝ御話を致す材料も持ちませず、たとひ御話いたした所で皆様の御參考になるやうな事柄も申し上げる事は出來ないので御座います。

たゞホンの有の儘をお話して見ますれば、私は男子が五人、女子が一人の母として育てゝ見ましたが別段男の子だからとて餘計に手數が掛るの、女の子だから左程面倒は無いといふやうな事はなく、何れも一通りは同じやうに手數を要するものでありますが、何うしても女の子は男に比べますと何處か優しい所のあるもので御座います、この五男一女の中、五男は今も尙ほ健かで御座いますが、たゞ一粒の女子は、御茶の水の學校を卒業しましたばかりて、十九の蕾で昨年無常の風に誘はれましたが、是ばかりは自由に參りませぬ、依つて當夏は其分骨の爲に紀州の高野山、京都の大谷、四國等へ參拜いたし、久し振で故鄕へ歸省して、ツイ先頃歸京つたばかりで御座います。

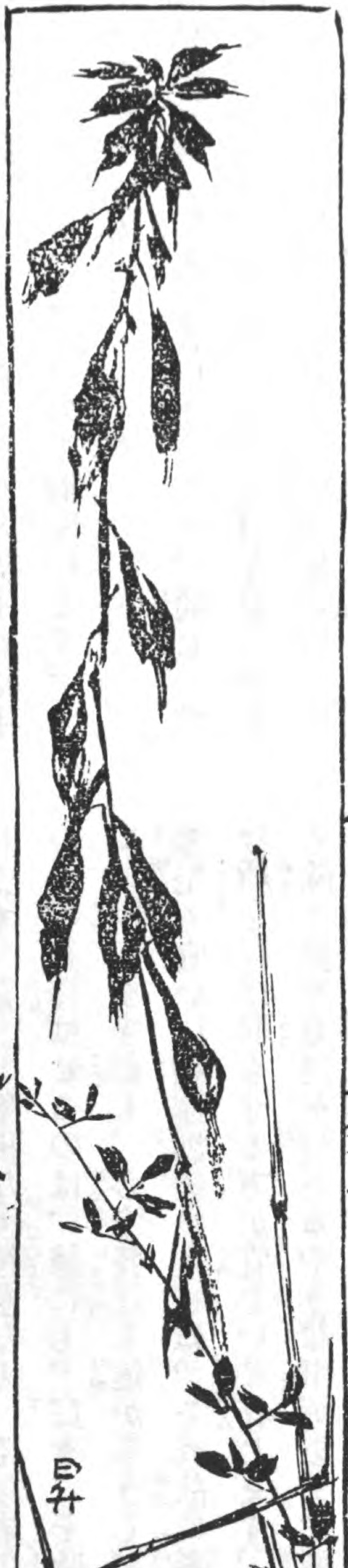
小兒の衞生

に就きましては、長男だけは四歲ぐらゐまで牛乳を服用ましたが、その他の小兒達は大抵生後一ケ年間ほどで止めまして、その後は小兒達の嗜好に應ずる事として決して强いは致しません、この用うると否とは今日も尙ほ爾う致して居りますが、幼ない頃即ち滿三歲、數へ歲四ツ位までは、牛乳に極めて少量の砂糖を混和して服用させて居りました、その所爲か孰れも强壯で御座います、一體この牛乳を用ゐると申すことは、まだ明治の初年、世間には牛乳といふ事が廣く知られない、丁度私が十四歲の頃から、

故郷の神戸邊では流行つて居りましたので、私も其頃より今日に至るまで引續き服用て居ります、その分量は最初の間は朝夕で四合程づゝを用ゐて居りましたが、最早當時は年を重りますので、僅に一合位に減じましたけれども、仕合せと其爲か今日に至るまで病氣といふものに罹つた事は御座いませぬ、して見ますれば幾分の効能のあるものかと存じます。

小兒と衣服

のことに就きましては、斯ういふ御笑ひ話があるので御座います、夏の暑い時分は別に申すことも御座いませんが、そろそろ秋口になりまして早い御家では袷、甚だしきは綿入などを小兒衆に御被せなさる時分に、女の子は別格で御座いますが、私の家の男の子は未だ大抵單物を着せて置きますものですから、近所の方が丹波さんの御家のお子さん方はアレデ寒くは無いのであらうか、風邪でも引きはすまいか、マサカ其邊の御注意を御忘れではあるまいが、兎に角アレデ風邪もお引きにならないとは餘程何か平生の御手當でも異うのであらうか抔と御





評判がある程、實は寒い時分でも他所樣のやうに厚着は爲せないやうに致して居ります、併し女の子は肌の弱いもので御座いますから、自づと男子とは手當を異へて遣なければならないので御座います。

小兒と學校時代

男女の兄弟姉妹が何人ございましても、同じ一つ腹から出ましたものでも、銘々に其性質を異にするもので、從つてその目指す方針も一樣で無いのみでは御座いませぬ、その交はる友達に依つて種々に變化するものでありまして、手近な例を申しますと、六番目の子は初め五男などが醫者になるといふ事を耳に致して、自分も專ら將來は醫者にならうといふ目的であつたので御座いますが、近頃御交際申す御友達の親御樣が、海軍で名ある伊集院と申さるゝ方なので、その御子息は固より其に爲らうといふ御精神で御勉强なさるゝ所から、何時しか其に感化されたとでも申しませうか、近頃は醫者の方は思切つて專ら其方針で勉强いたして居りますが、何うしても交はる友に依つて種々の感化を受けるやうで御座いますから、御友達を擇ばせるといふ事は大切かと存じます、素より學術なり技藝なり、その者の好む所のものを擇ばせるのは、諺にも、好きこそ物の上手とか申します如く、必ず發達も速からうし、また出來榮も宜いに相違御座いませぬ、それ故に各その好む所を擇び取らせる方が宜しいと存じます、けれども餘り度々方向を變へるやうな事があつた節には少しく親たる者が注意を與へなければならぬ事であらうと存じますが、その他は餘り干渉せずに、成るべく其者の自由に撰取らせる方が宜いやうに經驗いたして居ります。育兒の事は此位で切上げまして、次に少々

家庭に關する事柄

を申し上げて見ませう、是とても理論や何や彼といふやうに六ケしい事は存じませぬので、自分が是まで致して參りました實地の事柄を御話して見るに止まるので御座いますから、其積りで御覽を願ます。

私の口から爾う申すも如何で御座いますが、母は男優りと申され、親戚中で手本にせよと云はれた程で御座いますから、随分何につけ嚴しかつたのでありますが、併し私は夫が爲に今日まで身体を動かすことが苦にならない、之は全く母の賜物であらうと存じます、元來母から得ました感化は是等に止まらず、何から何まで其感化を得たのでありますが、その一を申し上げれば是で御座います、まだ私共が故國に居りました節、母は始終も小兒の世話をして吳れられて、御前は臺所や裁縫のことを爲るが宜いと申されたので、その時分から斯様に身体を使つて居りますから、身体を動かすといふ事は少しも太儀とは存じませぬ、それ故に御覽の通り、餘り邸宅は廣くは御座いませんが、それでも他所様の割合にしますれば、何うしても女中の三人乃至四人位を置かなければ間に合はぬ譯で御座いますけれども、私の家では僅か二人しか置きませぬ、それでも十分に用が充りて、女中だからとて朝から晩まで忙しいといふ事は無く、多少の餘裕があるので御座います、元來私は女中を置きますにも、單に召使ひといふ考ではなくして、迚も家中の事を一人で仕切れるものではない、それを片付けやうとするには如何しても助手が要る、平たく云へば

女中は自分の手傳者

と心得て居ります、それゆゑ日々の勝手許などの事は致して貰ひますけれども、前にも申せし如く、片田舎同然で御座いますから、十人や二十人の御客の時は、毎時も自分が先に立つて料理方を致します、決して店屋物を取つた事は御座いませぬ。また掃除を致しますにも、客間の天井や椽側の天井などを掃除するにも、塵掃を何本も柄の短いものや長いものを拵らへて置きまして、それを以て自分で塵掃をいたし、また座敷によつては天井裏を拭くのでありますが、その時は自分で足継を致し、女中は下に居て雜巾の絞り交へを仕て貰ふやうに致して居るので、これと申すも他人の大切な娘に若しも怪我でも爲せ

てはなるまいと存じますからで御座います、それ故に時としては、奥様が仰有る浮雲といふのは何方か分りませぬなどゝ申して笑はれるので御座います。

何うも私は靜坐して居ることが嫌で御座いますから、先程も申した如く女中は少ないので御座います、けれども、この人達は自分の手傳であると心得て、家族のものゝ衣服や何かの裁縫等は總て自分で手を下して遣つて居ります、併し其では忙しからうと思召しませうが、左程では御座いません、その代り買物などを致しますにも、市中へ出るといふ事は容易は御座いませんので、それは特別の場合も御座いますけれども、まづ平生は大抵一週間に一度と定めて置きます、斯うして置きますと、小兒達などでも、今度は彼れと此をといふ工合に一々帳面に書留めて置くといふ風にして、さうして一ト纏めに買調へて來るやうに致して居りますが、サテ斯う極つて居りますと、小兒達でも何でも、少しは間に不自由を感じましても、その日の來るのを樂しんで居るといふやうな有樣で、幾らか是も家政の整理上は申すまでも無く、育兒の上に於ても忍耐といふやうな事が養はれやうかと存じます。それから

舅姑と嫁

とは兎角仲の惡いものゝやうに伺ひますが、私宅では、長男の嫁と次男の嫁といふやうに二人御座いますが、孰れも貰ひます前より、貰つて見ますと如何にも善良なので、夫妻は非常に悅んで居ります、もと〳〵裁縫や割烹などは女子の嗜みで御座いますが爾う初めから上手に參るものでは御座いませぬ、私なども前申した如く、母の御蔭で段々と覺込みましたので、それでも始終一樣には參らぬので御座います、何うしても斯ういふ事は、日を積み月を重ねて一度より二度、二度より三度といふ風に手を掛けてさへ行けば自然に熟達するものであります、それでも時としては失策のあるものでありますから、若者だからとて決して爾う責むべきものではあるまいかと存じます。（文責在記者）


秋思

家庭と音樂

日本女子大學教授　戸川殘花

家の中に音樂の必要な事、少なくとも音樂趣味の無有といふ事は、いふ迄もなく家族相互ひの和樂の上に大切な事であります、音樂趣味などゝいふ事は言葉の上でどやかくといふ事は出來難い事ですが、しかしその効果、人が得もいへぬ妙境に陶然と浮世の外に遊ぶ心持ちは、社會が繁雜になればなる程、家庭が複雜になればなる程、必要になる事で、西洋の家庭等で夕ぐれ靜かに家族打集ひ、祈禱を捧げ、讃美を歌ふなどゝいふ事も、かゝることの經驗上適當な和樂の法と思ひます、しかし、日本の今日では未だ家庭にかゝる折を得る事も難く、かの適當な樂器の無いといふ事は、非常に不幸といはねばなりません、先づ日本が非常な勢で文明になるとは言ひ條、第一過度の浪が未だに靜まらないといふ事が、その大原因をなすことゝ思ひます。

家屋と樂器

追々西洋風の家屋が建つ樣になりましたが、まだまだ日本家屋の勢は茲々百年や二百年でなくなるものぢやありません、さうなると第一樂器です、ピアノやオルガンの樣な樂器はどうしても、天井も高く、間取りも廣いといふ樣な西洋室でなければその音なり調なりに丁度よい調和がとれますまい、もしこれを琴や三味線にとり換へると、どうも、少さいです、琴はどうしても四疊半式の日本趣味のものでなくてはなりませぬ、そうですから家屋の建築や、生活の狀態などで、これからどんな樂器が勢力をうくるかは疑問と思ひます、しかし、だん〳〵世の中が進んで來れば生活狀態なども東西相似寄つて參りましやう、從がつて音樂趣味も似寄つて參るでしやう。

俗曲

琴は別として日本音樂での俗曲は近頃非常に盛んに稱道さるゝ樣になりました、常磐津や、長唄は勿論河東節など迄廢れたものゝ恢復さるゝ樣になりまし

たのは結局、西洋音樂に眩惑して、自家の妙所を忘れて居つた事の眠りがさめたといふ譯です、成程この道の妙手ともいはるゝ人の技藝を聞きますと流石に神魂飛ぶの境に入ります、が惜しい事には廣い大勢な公衆の前でするど音が少さいです、その外義太夫でも時々この感じがします、しかし日本の家屋、日本の生活として最も適當にて寧ろその復興は喜ぶべきことゝ思ひます、この他

踊の如きことの恢復も漸々盛んになりましたが、未だ世間では俗曲は下品であるといふ事を極められて居りますから、或種の家庭では歡迎されません、けれども踊りといふものは、ギリシヤの表情体操が、上品なるものとして尊敬を拂はれます以上決して卑しむべき物ではありません、偶々歌謡の中に卑しいものがありますが、それがためその美風をも沒却するのは惜しい事と思ひます、これと全じく三味線が下品だといふが、これも音そのものよりは或連想がそれを生んだのであります、全じ四疊半式のものでも、琴と三味線とがよほど連想のちがふのは無理ならぬ話で、私は漸々歌謡が改良されて行く中これらのものも家庭の音樂として喜こばるゝことのある事を信じます、只今の所ではピヤノオルガンは家屋に適せず琴は大抵小供らしいものゝ樣に考へられ三味線は下品だといはれます、それでは一向よい音樂が日本の家庭にない事になります、しかし先に申します樣に、社會の要求とともにだん／＼音樂の必要になつて參りますから、三味線や俗曲は其の連想を離れ、ピアノオルガン等も日本的になり、遙に趣味に於て近づきます樣になることゝ思ひます。

目に見えぬ人の力

ミスハサウエー

日光へ參ります人が第一に日光は美しい所だと讃めますのは、かの壯大な、鬱然と天を摩するが如き

杉の並木を見た時にありと思ひます、實に日光から日光杉をとり去つたなら、いかに大谷川の水が美しくとも、二荒山が幽邃であつても、日光に壯嚴な面影をとゞめる事は出來ません、誠に杉こそ日光を飾る美しき緑であります、所が私はこの杉に就て曾て聞いた事があります、それに依つて私はその緑以上に更に美しき記憶を止めて居ります、昔時徳川氏の頃この山に徳川氏の廟を建てる樣に地がトせられました時、日光の市民は競うて種々なものを献上しました、土地或は金錢材木を捧げましたが、中にもお金のない人は勞力をもつて報ひましたさうであります、その中に一人お金もなければ材木もない、實に極々貧乏な人が御座いまして、その爲に力を藉すことが出來ませんでしたが、非常に殘念な事に思ひ、遂に山に入つて木の蔭、谷の間にあつた杉の苗木を運び來り、これを念入れて、せつせと毎日道の兩側に植ゑました、人々はその稚い、その戲談らしい事を笑ひましたが、その人は少しも倦まず、一本々々と心を籠めて植ゑました。實にその時、その人の力としては、これが最上の働でこれ以上のことは出來なかつたに相違ありません、其人は死にました、笑つた人も死にました、けれども杉も若木は漸々成長いたしまして、森々たる緑は唯一日光を飾るに至つたのであります、この話は何でもない樣でありますが、深く味ひますと、非常に深い意味があります、その意味を考へますと、日々の自分共のつとめが、決して愚かならぬものと考へられて參ります、

婦人は割合に種々な事情を自ら搆成して言譯の材料に使ふものであります、もし人が各自の定められた所で仕事を致します間に、自分の仕事が人の仕事に比べて非常につまらないものゝ樣に思はれる場合がありました時、例へば一日家政の雜務に追廻されたり、小供の世話に追はるゝ人は、花々しき社交界の花となり、人を羨むことも御座いましやう、小學校の教師は、大學の先生の職を羨むでありましやう、或時は自分の仕事の効果の見はれざるに失望

し、遂には自分の力の足らざる事や、運命の隨意ならぬに自棄する人もありましやう、どうせ益無き人といふが如き考へを起して自棄するならば、その人はその時を限りに亡びます、しかし、私は人は常にかゝる心の起る時、顧みて自分は與へられた場所と力を考へ、ありッたけの智惠や力を出して眞面目に事を成遂げたいと思ひます。

人が失望によつて自棄するは、自分のある丈の力を出すことを惜むことであります、生きて居る以上必ず人に力がない事はありません、力がないといふ人は自ら女子の弱點たる辭柄を造つて、辭柄の裏に身を隱さうとする弱い心でありますまいか。

若木を植ゑた人は、人の笑ふにもかゝはらず、生涯に於てその生長を見る事の出來ぬをも心にかけず、自分の植ゑた若木の、必ず何かの役に立つを信じて致しましたのであります、愚痴に陷り易き婦人は、常にこゝに留意して、假令つまらぬ仕事でありましても、心を籠めてした事は、終に自分の想像せざりし結果に力を藉すものとなるといふ事を信じて、日々を安らかに送りたいと思ひます。

女子頭髮の沿革

佐藤達也

わが國の上代には、男子は頭髮を中央より二つに分けて、左右耳の上に髻を作つたもので、今の兒髷は其遺風であらうと思はれる、すべて女子は垂髮で、後に至つて下げたもので、それは天武天皇の白鳳十一年三月の詔に、自今以後男女悉結髮と仰せあり、後二年、男女四十以上髮之結不結任意とあり、後また二年を經て、婦女垂髮于背猶如故とあるの見れば、一たびは結ばせられたが、後に故の風に反された事が分かる、然るに二代の後、文武天皇の慶雲二年十二月、令天下婦女月神部齋宮々人及老嫗皆髻髮と詔らせて、女子は一般に結髮する事となつたのであるけれども、實は世間の嗜好に適はなかつたものか、

結髪は僅に貴族間に行はれたので、それさへ間もなく衰へて、平安の朝には宮中なども復垂髪となり、それから近頃まで引續き行はれたのであるが、何故に此く女子に垂髪が好かれたのであるか、それは今以て不明である。

偖當今のやうに結髪する事は何時の頃より流行出したかといふに、その説は一定しないが、大凡慶長の頃からのやうで、唐髷から一變して兵庫となり、殆んど六十年間ほどは盛んに行はれたものであるが、それが元祿の頃よりは島田、勝山などいふ風のものが流行つたので、乃ち島田、笄髷、大島田、やつし島田、しめつけ島田、なげ島田、玉結、吹あげ、つり船等が主なるものであつたのである。

然るに世の中が段々進むと共に、人の好みにもそれ〲變遷が生じて來たのみならず、維新以來は盛んに歐米の風俗が進入りこみもし、又行つて見て來たものもある所より、頭髪にも種々の形を生ずるやうになつた事は諸嬢の知らるゝ如くである、そこで

我邦の風と歐米のものとを比較すれば、歐米のものは至極簡單で無造作であるに引換へ、吾邦のものに非常に複雑であるが、併し雅致には富んで居る、尤も歐米だからとて流行も趣向もあらうが、併し此方に比べると誠に手輕で、殆んど千篇一律で、先づ束髪の一流のみに限るやうに思はるゝばかりでなく、まづ一体に頭髪の飾りといふものは無い、それ故に極言すれば、非美術的であると云つても差支なからうと考へる、それと云ふも歐米では婦女子までも帽子を頂くからで、其所で飾りは一切帽子に讓つて了つて、頭髪はホンの帽子を戴くに都合の宜い程度に束ねて置くものであらうと思ふ。

右に反して吾國では、女子が毎に帽子を戴くといふ風習はないので、冬の御高祖頭巾だけは例外として、勢ひ頭髪を主とする所から、從つて之が飾りといふものに種々新意匠を凝らすのであらうと考へるが、歐米人から見たならば奇異の感を懐くかも知れないが、それは彼國と吾邦とでは、自然に風俗習慣

等を異にして居るのであるから致し方が無い、又一概に彼に模倣するでもあるまい、そこで當今吾邦で流行して居る婦人の結髪の種類は何の位あるかと云へば、文金高髷、高髷、中高島田、ゆひ綿、藝子髷、つぶし島田、丸髷、唐人髷、流行髷、美人形、新橋形、異美形、粂三形、島田崩、月花髷、勝山髷、特別形、松葉返し、思附形、銀杏返し、糸巻銀杏、千島結、天神髷、輪なし天神、花よめ形、貴婦人形、おばこ、桃われ、蝶々髷等、その他幾種あるか知れない、このやうに澤山な頭髪の結形のあるのは、即ち



日本風の美術的大進歩をしたので、殊に銀杏返、蝶々髷の如く、頭髪で物の形を作るなど丶いふ事は殊に興味の多いことであつて、隣りの支那でも昔瓢の花を見て頭髪を結ひ出したといふ事を聞いて居るが、東洋婦人といふ中にも、吾邦の婦人は實に世界中に優れた、天然の美術を有つて居るので、服裝とよく相應したものと言はねばならぬ。

併し人間といふものは、兎角新希を好むもので、鹽瀬や風月のやうな上等な御菓子に慣れたお方になると、稀には横丁の鹽せんべいとか、又は近所の燒芋でも食べて見たいと思召す事のあるもので、それと同じく、尤も一時は大

流行であつたが、當今は夫程でもないが多少束髪を戴かるゝ向も尠くないやうに見受ける、云ふまでも無く御婦人でも、洋裝の時は束髪に限るやうであるが、何うも和服に束髪は少々調和が取れないかと思はれる節がある、一例を云へば、束髪なれば先づ何も飾氣の無いのが本家本元の歐米の風のやうで、爾うすると帽子も戴かない和服に束髪は如何ものであらうか、何うも物足りない氣がすまいか、それかあらぬか近頃は大部造花などを挿さるゝやうである、現時は全く廂髪の世の中となつた。

　チヨツト話が側へ外れたが、結髪の始原に就いて思ひ出した事は、彼の近世女風俗考の著者として名高い生川春明翁が、その書中に義經記の靜御前が鶴岡八幡宮に舞を舞ふた條の、前畧、たけなる髪を、たからかに結びなし、薄化粧まゆ細やかに作りなし云々とあるを拔きて、

　舞など舞ふには、下髪にては便利ならざれば、高かに結びあげたるものか、また加茂眞淵の萬葉考別記の說の如く、晴の時は髪上せしが、いづれとも定がたし、但し足利中頃より後の物を按ずれば、下髪のかたこそ、晴とはきこゆれ。

　と云はれてあるが、元來靜御前といふのは普通の女子では無くして、白拍子と云つて今日で言へば尋常の藝妓と俗にいふお酌といふ少い雛妓のする事とを兼て居つたもので、平たく云へば舞子である、それにかの條は、男舞を舞ふ時の姿態を寫したもので、その男舞と云ふのは烏帽子を戴き、水干を着し、袴を穿ち、太刀さへ佩いて男裝をして居るからの名で、靜がたけなる髪をたからかに結び上げたのは、男の舞を舞はんが爲に男裝をしたのであるから、是を以て直ちに當時の女子が結髪したものと憶斷することは出來まいと思ふ、何うしても其根源は前に引證した如く古いものであつて、それより一盛一衰して、まづ慶長の頃より下つて寛永、それより元祿といふ風に移り、而して今日に至つたものに相違ない。

女子に對する希望

日本女子大學教授　村田　勤

男女仝權と男女仝等

男女仝權といふ事は隨分天下の喧かましい問題でありましたが、私は男女仝權といふ事は當然爾かある事と思ひます、しかし、現今亞米利加や英國等のサキソン民族に於て叫ばれまする男女仝等說、即ち女子に參政權を與へよとか、大學を開放せよとかといふ風に、女子も男子と等しき知力能力のあるものだらう、仝等にしやうといふ說は大きに間違ひぢやないかと思ひます、これは女子の抱ける或る迷信であります、さなくば女の空威張であつて、即ち決して女子の天賦はかゝる所にあるものではないのだといふ事を云ひ得るのであります、一体男女が社會にあつて、進んで行くのに、その性のちがふ樣に、又その天賦のちがふ事を考へねばなりません、婦人の婦人らしく男子の男子らしきは必ずかくあらねばならぬ事で、從つて又女が男と等しきものたるは難き業であります、男女が相助け合ふといふ事は、昔から考へられた事でありますが、仝じ性のものが互に相寄つて相助けるといふ事は、先づ出來難いことゝ見て差支はなからうと思ひます、即ち互がひに自分に無い所を求め合ふからであります。

　婦人にある所は男子になく、男子にある所は女にない、それ故に相尊敬し相慕ひ、相助けられて始めて圓滿な社會が成立つのであります、性質に於て、知識に於て、腕を扼して男子を壓倒してかゝらう、否、男子と仝等にならんなどゝ意氣まくのは、却つて圓滿なる婦人の德を傷けて、却つて婦人の位置を失墜するのものであります、即ち社會は事實上かゝる婦人は要求さるゝものではありません、要求されないものが、早晩亡ぶはこれ見易き道理であります、實際男子が女子の助をからんとし、女子に賴らんとするのは、その男子になき、美しく優しき得もいはれぬ性情に賴

み便らんとするのであります、高等なる敎育が決してかゝる女子を造るといふのではありませんが、かの英米が今日に於ける女子の要求の當を得ざることに反對するのであります、ことに仔細にこれを檢せば、女權擴張論者の中にて、彼國の所謂ハイカラであつて、決して淑女貴婦人といふ樣な人は居ないのであります、因みに申しますが、西洋で曰ふ女子の高等敎育を日本で現今いふ高等敎育とは、中學校と大學校ほどの差のある事をお含みを願ひます、私は願くば婦人は智德を圓滿に、その美しき天賦によつて進められた方が、いくら社會の要求にかなふかといふ事を極言するのであります、これを

歷史上各國の婦人

に於て觀察しましても、現代婦人の位置は、漸次に上つたのです、なれども埃及に於ても、バビロン、ギリシヤ、ローマ等の國々にても決して婦人が卑められなかつた事は明らかな事實で、かのローマ共和政治時代などは、賢母貞婦相つぎて出で、グラックス兄弟の母、コルチリヤの如き、ルークレチヤの如きが萬代不朽の名をのこされた程、世は婦人に對しては無頓着でなかつたと思ひます、現代でもアングロサキソン民族(英米)の民は、婦人が權利を張らんとする傾きがありますが、ローマンスたる獨乙婦人は、極地味な賢忍な風が見えます、或は非常な反動の餘映かもしれません、翻つて日本に於る今日に於る婦人の位置を見ますと、四十年の間に甚しき變化を現はしまして、婦人の權利は與へられ、敎育は授けられ、婦人の位置は尤も適當な位置におかれたものとなりました事と信じます、人或は日本婦人の位置のしかよろしからざる事をいふかもしれませんが、これ歐米婦人を誤解した事の甚しい所から來た結果と思ひます。

弱を助くる習慣

靴の紐を夫に結ばせる西洋婦人は、決してかれが位置の高いからでもなければ、夫に赤坊の世話までさせる亞米利加婦人それ自身が、高い尊い位があるの

ではありません、却つて夫が自ら强者たるを自覺して居るので、婦人は弱者なりといふ所から只助けられて居るといふに過ぎません、强者が弱者を助けるといふ事は、歐米では非常に古い慣習で中世の騎士時代に騎士が婦人を弱者として保護したといふことの習慣が今日に及び、從つて婦人を保護するといふことになつたのであります、英國人などが喧嘩をする時などは、一人と四人などいふ事はしません、必ず一人宛爭ふので、これは弱いもの苛めをしないといふ習慣なのであります、それを取違へて、婦人がえらいからだなんぞと思ふのは間違であります



その保護に對してそれ丈けの禮讓があるこそ床しい婦人らしい婦人とも見えます、本國の歐米でも此邊の間違を度々やりますので先年も紐育で妙な流行があつて、電車でも滊車でも決して婦

人に席を讓らないといふ事がありました、其理由とする所は一つは女が男子に席を讓らせるのを當然の事の樣に思つて居る事は間違である、二つには勞働者が体力に餘る樣な活動に疲れて通ふ朝夕僅かな時を遊山の散歩のと樂なことにブラ〳〵して居る婦人に席を與へるのは、決してその必要がない、亂暴な樣な言分ではありますが、これその保護に甘へる婦人の爲には頂門の一針でありませう、且又亞米利加で婦人が重寶がられるのは、歷史的の事實で、既に人の知つた事ですが、歐洲が亞米利加に殖民した當時、男が多くつて女が少なかつた、即ち需用供給の理で非常に女が尊ばれ、人々が競うて女を得樣としました、ですから女は心が高ぶつてしまつたので、氣に入らねば行つてしまふといふ樣でしたから男子はなる丈女子を大事にしたのであります、この事は男女相求めるといふ說明にもなりますが、實際男が男にはない女子の美しい、何ともいへない愛を要求するといふ力は非常なもので、留學生が異鄕にあつてビールを仰ぎ、舞姫と戯れたり、或は懷鄕病となつて身の危きに至る事のあるのは、畢竟ずるに母や妻、姉や妹の如き優しき女の情を慕ふあまりにやる事で、僞の樣ですが某博士の如きは獨乙にあり、懷鄕病の爲に發狂された事があります、こんな有樣ですから、亞米利加の殖民時代に女の要求された事は、丁度今日布哇にある日本人が婦人を尊び、拜み祭つて大事にするのと似た話なんで、これが習慣となり、俗となり、今日の樣な有樣になつたので、歐米人の弱を助ける習慣と、この時代の要求とが相合して今日に至つたのであります、それから漸次敎育を授けらるゝ樣になりまして、その女子のいふにいへぬ美しい情愛はだん〳〵と練磨されまして、更に今度は尊敬するに足る品性を供へて來ましたので今日でも亞米利加の上流秩序ある家庭では、淑女紳士の妻と夫はいかにも美しい從順な禮讓のあるものであります、重ねて申しますが男子は非常に女子にある特點を要求して居ります、この特點ある故に女

子は社會上尊いので、もし男女全等のものとならば、恐らく秩序は破られ、殺風景なものとなり、女子の位置は却つて失墜します、日本の女子は今や十分に發展すべき機關を與へられてありますけれども未だよく發展の所に達して居りませんから、日夜心を碎て、その優しく美しき女子の特點を更に進めて發展する事につとめねばなりませぬ、女子の特點の進む程社會の要求もまた繁くなりましやう、而して女子を發展させる力は、一つは教育であり、一つは正しき宗教の力であります。

母儀の德

男子に出來ない所を女子に求める、これで漸々女子が必要とされるといふ事はすでに縷々述べましたが然らば男子になく女子にある特點とは何でありませう、第一は兒を生むといふ事であります、あまり平凡な事で人々の注意しない事でありますが男子が父となる勢を負ふ事に、無上の尊敬が拂はれます、ことに母が子を教育いたしますのは、はや本能的の使命による樣で、その感化力の大きな事は、到底男子の及ぶ所ではありません、これその母の善良ならん事を望むや切なる所以なんであります、幼時母を失ひし人の不幸は、父を失ひし人の不幸に數倍しますこの母儀の德―子を育てるに身命を惜まない愛は、移されて慈悲慈善となり、博愛となるので有ます。

柔よく剛を制す

諺にも男は頭なり、女は頭を動かす手なりと申しますが、良妻と呼ばれ、賢母と稱せられた婦人は、よく男子の頭を動かしました、しかしそれらの婦人は男子に對して至極柔和にして優しき愛情に富んで居つた事を記憶せねばなりません、特にお轉婆氣ある歐米にても、妻の優しさは思の外のことがあります、婦人が優く涙あるは、唯一の特點であつて、柔よく剛を制するは、これ夫に對する妻の秘訣であります、堅いもので堅いものを打たんとするは難事でありますけれども、柔いものをもて動かすは、反つて容易い事であります、この故に私は婦人は日々女子の天

性を高等なる所に發揮するを忘れてはなりませんと思ひます。

興味を廣くせよ

私は段々女子の特點につき話しましたが、今度は何故從來の女子が小供視せられ、玩弄視せらるゝかといふ事につきて話します、これ婦人に興味の範圍が狹いからであります、例へば一葉の新聞を讀むにも、婦人の讀むのは小說か三面記事の如き卑近なものに限られ、社會全般に起つた出來事の報告に對しては、至極冷淡であります、これでは婦人の知識はかゝる卑近な事に限られます譯で、政治家の妻でありながら、政界の事情もわからず、商家の妻にして社會の商況を明かにすることが出來ませんければ眞實夫の助手となる事が出來ません、或は只慰勞する事は出來るかもしれませんが、仝情を寄せることは出來ません、かくの如くなれば、自然女は玩具になります、でありますから眞の助手となる事の出來る爲に、一葉の新聞、一冊の書、一社會の出來事で

も廣く興味を持つ事に勉められ度いと思ひます、左樣でなければ女の美しき特點は極めて淡きものとなり、光もなく骨もないものになります、彼のローラン夫人の如き、ビーコンスヒー伯の夫人の如きいづれも勉めて多忙な家事の暇に、廣い興味をもたれた人であります。

趣味を養へ

婦人はかゝる美しき性情あるにもかゝはらず、審美的の心が薄いのであります、文學の如き、美術の如き、自然を味ふことの如き、實に不思議な程乏しいのであります、即ちかゝる天才の男子に多つたのも甚だ矛盾の如く見えます、私は婦人特點の發揮として、深く趣味を養ひ行く事は必要と思ひます。

日本婦人の位置

要するに日本婦人の位置は、世界に稀な好位置であります、ことに中流社會の婦人はもつとも特點を伸ばす好位置にあります、いづれの國を問はず、上流社會は不道德であり、下層社會は無道德であります

が、今日本の中流に至つては教育といひ、道德といひ、もつとも美しく婦人の價値の多く認められ要求されるのであります、ことに日本の國は、今や少壯の元氣をもつて日々に新たに進歩して行きます、その歩合の急なる程、婦人もまたその特點の發揮に心を用ゐ、その求めに應じて行かれます、實に有望であります、眞に婦人の價値の自覺せられた人は婦人の弱點たる奢侈虛榮に流るゝことなく、婦人らしき德を發揮し、靜かに婦人の價値を高めて行く事が必要と思ひます。

悲慘は隣にあり

山室千代子

世の中は何時も春の樣に花が咲いたり、鳥が歌ふものではないと申します事は、百も二百も承知で居りましたが、數へますれば、十五六年も昔の事、學校の窓から眺めた其の時は、實際に當つた今日程深く社會の自由と幸福の少いものであるといふ事を感じませんでございました、もう十年余も經驗を致して參りますと事實の上にあり〳〵と、己が悲慘と隣りして居る事を感じて參るのでございます、其の都度、世の中は決して馬鹿には出來ないとしみ〴〵眞面目に考へます、私の舊い級は三十人ばかりございましたが、その內只今でも消息の別りますほどのお友達の中でも、この運命の手に弄ばれるといふ人が澤山ございます、或人などは級の中でも秀才として非常に尊敬されてあつた樣な人が考への合はない家庭に嫁して、今日では巳なく破鏡の悲慘を味はゝれてある人がございます、その他には破產に依つて夫婦母子が離散したのも御座いますれば、事業の失敗で夫の行衞が知れなくなつた方や、早くも寡婦となつて、空閨にうたゝ生活の困難を味はれつゝある人がございます、それを思ひましてたゞもう深く運命の奇な力に驚くのでございます、ことに十一人の御仝窓といはれた人の中に、僅に十年間にはや四人ま

でを彼世に送つた事を思ひ出しますと、此の世の悲慘や死は決して遠きに非らざる事を深く思ひます。

富貴は何、貧賤は何、又、私共が墮落者と呼び、罪人と名附けらるゝ人もまた決してわたくし共より遠きに居る人ではないのでございます、畢竟それらの人は生れながらに貧困に育だち、敎育なく宗敎なく、親の爲てふ單純に優しい心から自ら身を苦界に沈めたものも御座いましやう、或は貧故に親子の情にほだされた盜みも必ず少なくは御座いません、假令許すべからぬ墮落者、大罪人と申しましても元を尋ねますれば、皆その育ちと境遇によつて造られたもので私共がよく日々を清く送ることの出來ますのも、要はたゞかゝる好境遇におかれ、敎育を受け、宗敎を信じますことによつて別るゝ許りで御座います、有と無と、決して二百歩三百歩の差を隔つるものでは御座いません、もし私共がかゝる境遇におかれたならば必ず墮落し罪人となつたかもしれません、たゞこれも自然に與へられた恩惠とそう思ひますとかゝる人を見ます每にいひしらぬ惻隱の心が起りまして、どうかして助け度いといふ仝情心が心の底を燃しますので御座います、けれども私共はもし何時何時世の運命に弄ばるゝ樣な事に出遇はないものとも限りません、殆ど隣の火事の危くわが棟木にとゞかん有樣なんで御座います、そんな事を思ひますとゾッとする樣に思ますが、しかしどうせ免かれがたき運命で御座いますから、私くし共は朝に夕べにその運命に供へる用意をしておかねばなりません、先づ每日私が信じております事は第一

消えざる希望

で御座います、信仰とでも申しますか、常に何物にか達せんとして努力して居る心が必要で御座います、それと仝じく、一体希望とは未來を待ち望みます事で、世の中の面倒な事が起つて參つても、これを呪ふ事なく眞面目に打ち破つて新しき境に出でる希望なので困難に處して心を立ず折ることなく、自棄自暴に陷らず、眞實に眞面目に今日に勤勉するといふ

事が必要で御座います、消えない希望はどれ程人の生涯を美しく致すかも知れません、聖書の中にヨセフといふ人の御咄が御座いますが、私は讀む度にその美しい生涯と感じますので御座います、ヨセフは生れながらにして誠とに容姿の端麗な人で御座いましたが、これが爲め、却て兄弟の憎みを受けまして奴隷に賣られます樣な事になりましたが、彼そこの長に仕へて從順に忠實に事をいたしましたから、遂に擧げられまして侍從長となりましたが、その美しい姿の爲め、女主人の懸想する所となりました、元來潔癖な人でしたから斷然とその請を斥けました



說明は隣にあり

から、今度はそれが爲牢獄の恥辱を受ける樣になりました、その間十餘年、けれどもヨセフは聊かも自暴せず、しづかに埃及の法律を研究いたしまして、やがて出獄の暁には適ぱれ有用の材幹となつたと申します、その後かの大饑饉が御座いました時にヨセフは自ら救濟の位置に立ちて、効を建てましたがこの始めにヨセフを追ひ出した兄弟は哀れに落魄してその救を門に仰いだと申します、その話は決して遠い世の話ではなく、わたくし共が日々夜々に繰りたくります運命の緒は、一つの環の如く、かゝる世の運命をもさながらに今に止めて居るので御座いますから、何時いかなる運命をよび起すかもしれませんから、どうか私共も困難に處して自棄に陷り、悲歎の涙に沈滯する樣な事のない樣、常に消えない希望を有ち度いものと存じます、それを致しますに先づ必要なのは

　身体を平民的にする事

で御座います、昔の人が我れ富に居る道を知り、又貧しきに居る道を知ると申した事が御座いますが、人の貧富――その境遇に於て、その境遇の外に超然として道に叶ふ行ひをするといふ事は誠に出來難いことゝ思ひます、貧にあつては自暴し、富にあつては心を增長し、遂に一朝その境遇に變化が來ました時その異なつた境遇に順應することが出來ません、富にあるものは虛榮の妖魔に心を傷けられ、自ら働らきて富に居り事を忘れ、治らずして虛榮を張らんとする如き事多々益々多く御座います、現に私の知人の中にも月々遊んで居りても五十圓の收入を受ける人が、いつも不滿足だ〳〵と面白からぬ月日を送つて居るのを見ますが、それらは皆、あまりに豫算の高がすぎる一種の虛榮なんで御座います、私はまづ下を御覽なさい一人で五十圓で少ないと仰有いますが世の中には五十圓で數人の口を過して行く者が有と申した事でしたこれに反して或る陸軍大佐の夫人で或時私の所へ令孃(某女學校卒業生)をおつれになりまして、かゝる身分でありながらどうかこの

子の行末の爲め下女奉公がさせ度と仰有つた事が御座いましたが、實に私は其の時、この母御がお娘御の爲めにいかなる境遇にも堪え得る力を養ふ爲めに一切の虚榮の外にお立ちになつて居ることを深く感じました、いかに常ねに美しき信仰に消えざる希望を持つて居りましやうとも、心ばかりでは何にもなりません、富にあるも貧にあるもよく忠實に勤勉につくすことの出來る力恒ねに平氣でそれに順應することの出來る樣身体をならせる事が必要と思ます。

閑居不善をなす

この言はあながちに小人にはかぎりませず、あらゆる人の守つてよい言葉と思ひます、富貴に居て閑居する人も、貧困に所してなすなき人もともに相隣りするものであります、私共は常に一寸の閑をも作る事なく勤勉にして行かねばなりません、心が空虚になりますと、虚榮が來ます、不平が來ます、僞が來ます、罪が來遂には尊とき生涯を無爲に送り去る樣になるので御座います、常に自分は運命と死に隣なりすることを、心の底深く考へて、人として消えざる望に滿ち、信じて疑はず、身を修めて、貧富に居る方法を考へ心を練り身体を馴らし、眞摯に勤勉し、眞面目に勞働することがもつとも死と運命に供へてよい武具で御座います。

悲惨は隣にあり

菊の花

中山幸子

おきな草めでつゝとしをふる里の
　たよりもいかでかきかむとぞ思ふ

おく霜のしたにのこれるしら菊の
　こゝろに人もならはしものを

雨にうたれ風につよみて咲きしより
　のこれる菊の霜をいたゞく

山家菊

おく霜のしろきを見れば山里の
　しづが軒ばの菊にぞありける

裁縫の話（つゞき）

高等裁縫學院長　小出新次郎

三ツ身裁

前回に於て一ツ身に關する大躰のことを述べ了つたから、次は順序として三ツ身に關することを話さうと思ふ。

元來三ツ身の裁方は、之を大別すれば三通りあるので、その中の一つは普通何人も心得て居らるゝ所の裁方であるが、併しこれは兩面物の時にのみ限るのであつて、片面物などには應用することは出來ない、然らば片面物の時は如何なる方法に依るかと云ふに、以下說く所の如き二樣の外に出づることは出來ないのである、而して其一つは車裁と云つて、後前々々といふ風に裁つ方法であるが、併し是とても布巾が少くとも九寸巾以上の物でなければ不可ぬ、何故と云ふに、夫より幅の狹いものであると、餘りに身巾が狹くなるので羽織、被布などの時は差支もないが、長着としては實用に供することが出來ない、それ故に九寸巾以下といふ、即ち小巾の時には是非とも帶隱裁と云つて、腰に補綴を入れて、帶の下若くは揚の下に其を隱すといふ方法に依らなければならぬのである、依つて其方法の大畧を講說しやうと思うのであるが、これに先だちて

普通の三ツ身裁

としてすら、まだ歲のゆかぬ經驗に乏しい婦人方は往々裁損じをするのであるから、ホンの注意までに、斯うすれば裁損じなどは仕たくても出來得るものでは無いと云ふことを話して置かう、それは外でもない、元來裁損じを生ずると云ふものは何に基くかといふに、言ふまでも無く、物を裁つ上に於て秩序が整はぬからである、されば三ツ身を裁つ時は如何なる順序に依るべきかと云ふに、先づ最初全体より袖用布として四倍を取り、その殘布を一旦横に正しく三ツ折として、更に夫れを正しく竪に二ツ折となし、夫より孰れか一方の横の輪を竪の折まで切込み、そ

の儘手前へ折返すときは、今切りたる部分は下の向ふとなる、之に反して今まで下に在りし輪は轉じて上となるなり、依つて其上なる輪の手前なる方を、前と同じく竪の折まで切込み、それより開きて其中間を、左右の切込みより切込みまで切離すやうにすれば、斷じて裁損じなどを生ずる憂のあり得べきものでは無い、何うか此點は經驗に乏しい方々の常に記憶せらるゝやうに望むのである、これで普通の三ツ身裁のことは終つたとして、次は

車裁に關する方法

であるが、この車裁とても、初め全体から袖用布を取り、その殘布を横に三ツ折にするまでは普通のものと少しも變らないのであるが、それより後の左右の切込みをすることが異なるのである、乃ち夫は巾に由つて多少の相違を生ずるのであるから、その切込みを劃然何寸何分にするかと云ふ事は、次の算式に依つて割出すことが出來る、例へば、一尺巾の布として、

第一式　(100－15)÷2＋15＝575
（巾尺　衿肩　後巾即ち切込寸法）

第二式　(95－14)÷2＋14＝545
（九寸五分　衿肩　後巾即ち切込寸）

以上算式の如くにして其切込み寸法を知り、然る後左右の輪を互違ひに切込み、而して孰れか其一方の切込みを標準に、縞を平らに鋏を入れて中間を切離すときは一方は前身となり、一方は後身となる、依つて二枚を中表に重ねてそれ〳〵廣き部分を掻落して身頃とするのである、それから

帶隱裁の方法

は極めて單純なるものであるが、その代り此裁方は長着の時にのみ限るので、羽織や被布などの場合には迚も應用することは出來ないのであるが、兎に角一應その方法を話せば、最初袖用布の取方は總て前二者と同樣であるけれども、身頃の裁方になると全で相違のである、それは何故に其樣に相違かと云ふに、最初に袖用布を取りたる殘布、即ち身頃となるべき布をば横に眞二ツに折り、一旦その輪を切離し

て、更に之を普通三ッ身裁の如く中表と二枚重なり居るまゝ横に三つ折にして次は又竪に二ッ折となし、而して其一方の横の輪を竪の折まで切込み、それより縞を平らに一タケだけ切離し、然る後故の如く平らに擴げて、尙ほ巾の儘なる方をば衿肩を一寸四五分と見て其餘りを搔落す時は完全なる身頃を調へることが出來るのであるが、併し斯くするときは後身は相當の身丈だけあれども、前身は僅かに其半分に達するに過ぎないのであるから、そこで尙ほ一、、タケ半巾を搔落したものを補綴合せて前身の足とするのである、斯うさへすれば兩面物でも片面物でも、或は小巾でも並巾でも、必ず自由自在に裁得るのである。

輕便日常料理

中島鎭子

偖前回に續いて、何か面白く手輕な品物で美味の

物と存じましたけれども、何うも左樣都合よく參りません、併し同じ一ッ物でも調理の仕方が幾ッもあるものでありますから、夫等に就て御話いたす事と致しませう。

△初芋のうま煮　これは季節の物でありますが、普通家々で煮たものは、よく心まで煮汁の染込むやうに煮ると、切りたる角が崩れて、見場が惡きのみならず、食べても不味いものであります、依つて是を割烹家の煮たものゝやうに調理しやうといふには、先づ其儘にて洗ひ上げ、次で蒸籠にてよくフカシ、そのフケたるものを薄刄にて程よく切り、更に醬油に水を加減したる中へ砂糖と鰹節とを加へ、鍋にてよく煮立て、その煮汁殼を漉し、再び煮上げたる中へ前の芋を投れて煮るときは、その味の美なるのみならず、決して角の崩るゝが如き憂なきものなり、殊に中まで煮汁が染込むものとす、茲にチョツト一言して置きたいのは、最初に湯煮をすると、之を煮ても、心まで最初の水氣が浸入して居るので、煮汁

が中まで能く浸込まないのと、尙一つは其煮方が斑になるからである、併し惣菜には手數が掛るから、其時には平常通りとして、之は酒の肴などに出す時の煮方であると心得て貰いたい。

△とをごりの油いため　これも季節のもので、とをごりとは料理用のレイシで、九州の方はよく爲さる料理であります、是は生の儘で木口に薄く打ちて油いためにしたる後、醬油を少し入れ、次でよく水氣を去りたる豆腐を投れて、共によく掻交せて煮上るもので、是また酒の肴などには至極妙なり。

△松茸の酒むし　松茸を成るべく薄く切り、三十分間程鹽水に浸け置き、再び眞水にて洗上げ、目笊に取りてよく水氣を去り、少量の酒を鍋に入れて煮立ちたる所へ松茸を投れ、よく蓋をなして煮上るなり、汁は初め鰹節にて煮汁を取り、之に醬油と砂糖とを少し多量に加味して煮立てたるものにて、之に銘々の好みに應じて柚子または山葵の類を擦込み、此汁にて食するなり。

△燒松茸　鹽水に浸け、眞水にて洗うまでは前と同じく、水氣を去りたる後、その松茸を生の儘にて酒に浸し、鐵器にて燒くのでありますが、之は焦がさないやうに、兩三回その燒きたるものを汁に付けては燒上げるので、その汁の拵方は前の酒むしに用ゐるものと略同樣であるけれども、此方は少し前のものより煮詰めた方が宜いので、而して其吸口には柚子の擦つたものが良く適するなり。

△松茸の土瓶蒸　この土瓶蒸といふのは前の酒蒸と別段異つたことはないのであるが、たゞその趣向が差つて居るだけに面白味があるなり。

△松茸の椀盛　これまた松茸を成るべく薄く切り、鹽水に浸す等は同一で、椀種の魚にても、或は鳥の類にても、何れにても夫等をあしらつて作るのであるが、至極これも妙味のものなり。

△松茸のまる燒　これは松茸を全体のまゝ、鹽水に浸すことは前項の時間の如く、それより出して眞水にて能く洗ひ、之を目笊に移して水氣を取去り、一

旦鐵器の上にて燒きたるものを適宜に裂き、之をポン酢に醬油を極めて少量に落して味を持込みたるものを附けて食するのであるが、之に柚子を擦込めば一層美味となるなり。

△松茸めし　これは御飯を通常の如く仕掛け、水は平生より少し硬い加減に分量して炊き、松茸は成るべく肉の厚き、素性のよきものを撰び、之を前の如く鹽水に浸け、清水にて洗ひ上げたるものを、程よく薄く細かに切りたるものを、酒しほ或は味醂に鰹節醬油砂糖の類を適宜に加味したるものにて煮上げ置き、之を炊立ての御飯の中へ入れて交せるなり。

因に、松茸の料理の仕方はまだ〳〵此外にも澤山あつて、此に掲げたるものは其中の一部分にしか過ぎないのであるが、それらは折を見て出す事として今回は餘り少しであるけれども、之で止めて置く事と致しますが、こゝに一つ御注意までに申し上げて置きたいのは、前數項の中、鹽水に浸けるといふ事と、その斷りの無いものとありますが、これは全体に松茸といふものは最初鹽水に浸けべきものであると心得て頂きたい、といふのは、御承知の如く、たとへ人の手で作ると申しても、元來が松茸といふものは野生のものであるから、自然に種々の虫類が寄生して居らぬとも限らない、それも表面に附いて居るものなら、極々細微のものはイザ知らず、さうで無いものはチヨツト目で見えるから取去る事が出來るけれども、若しも其中へ喰込んで居るとすれば、容易に之を發見し取除くことは出來ません、けれども之を鹽水に浸すときは、御承知の如く水といふものゝ性質は、物を濕すは勿論、針の尖で突いたやうな間隙でも直ちに浸透する所の性質を有つて居るもので、且つ鹽の性分といふものが、よくあらゆる黴菌を撲滅する所の力を以て居るものであるから、古來さういふ智識の無い時分から、必ずこの松茸および茸類を食するには、最初に鹽水に浸けて殺虫するといふ事が行はれて居るので、實によく衛生の法に適つた事と云ふべきである。

無用なる學問の効用に就て（其の二）

文學博士　元良勇次郎

假りにプレトーの共和國等を以て、無用の學問とするならば、之を見さうも無いものだが、矢張り之を見る所を見れば、或は一種の好奇心としても、その好奇心を充たすだけの人世に効用がある、夫は言辭の上には矛盾して居るのである、して見れば、常識を以て無用とする事も、眼界を擴むれば有用となるのである、

第一無用なる學問の効用といふものは、或時代に於て無用とせられた所の學問が、人智の進歩と共に社會上に之が應用の途を發見せらるゝもので、昔時アレキサンドリアに於るユークリッドの幾何學や、ヒーローの蒸汽機關學などは、その當時に於ては必す無用視せられて居たに相違ない、それらの學者は、世間より迂濶なもの、妙なものであると云ふやうに考へて居られたに異ひない、けれども社會の進歩と共に其が顛倒して來た、

歐洲の思想の歴史上より云へば、希臘の文明が羅馬に移つた時分には、盛んに唯物論を詩文等に表はしたが、此は疑もなく近世物理學の進歩を促がした源泉である、ダーヴンの進化説も、その源は遠く羅馬に發したので、是等は今日でも同じ事である、所謂化學者などは、實驗室に閉ぢ籠つて、如何にも人世に縁の遠い事を研究して居るのであるが、之が爲に學問の進歩を促がした事は測り知られぬのである此く一時は無用と世間から見られて居た學問も、遂には直接實際に後世になつてから効用を顯はすものである、

第二に、無用なる事柄が、將來應用の道を見出さるゝと否とに關はらず、世人の

好奇心の爲に歡迎

せらるゝ事は決して尠なく無い、先頃世間に喧傳せられた所の彗星の出たとか、又は出ないとか云ふ說、之は多少運命論を含蓄して居る、何故なれば、彗星が地球と衝突する抔と云ふ說を含むので、ソコデ頻りに顯はれたとか或は現はれないとか云ふ事に氣を揉んだり、又は天文學の中に於て、惑星の運動が如何であるとか、尤も之は時間の推定上必用ではあるが、天河の中の一つの星は、太陽より何倍大きいとか、又はその距離は幾らあるとか談論して居るが、何も是等を應用して、直接吾人に利用厚生の益を與ふるものでは無いけれども、兎や角と世人が噪ぐのは何が爲かと云ふに、畢竟好奇心を滿足せしむるに過ぎないのである、けれども矢張此の點に於て効用がある、

第三に、無用なる學問が人の品性を高尙ならしむる點に於て効用がある、即ち品性と云ひ人格と唱ふるものも、時勢の變遷と共に變つて來るので、如何

も單に政治や經濟ばかりでは、國民の品性と云ふものゝ修養は出來ないのである、確實なる人格は形造られないのである、元來此の品性と云ひ人格と稱するものは、

形があつて、形がない

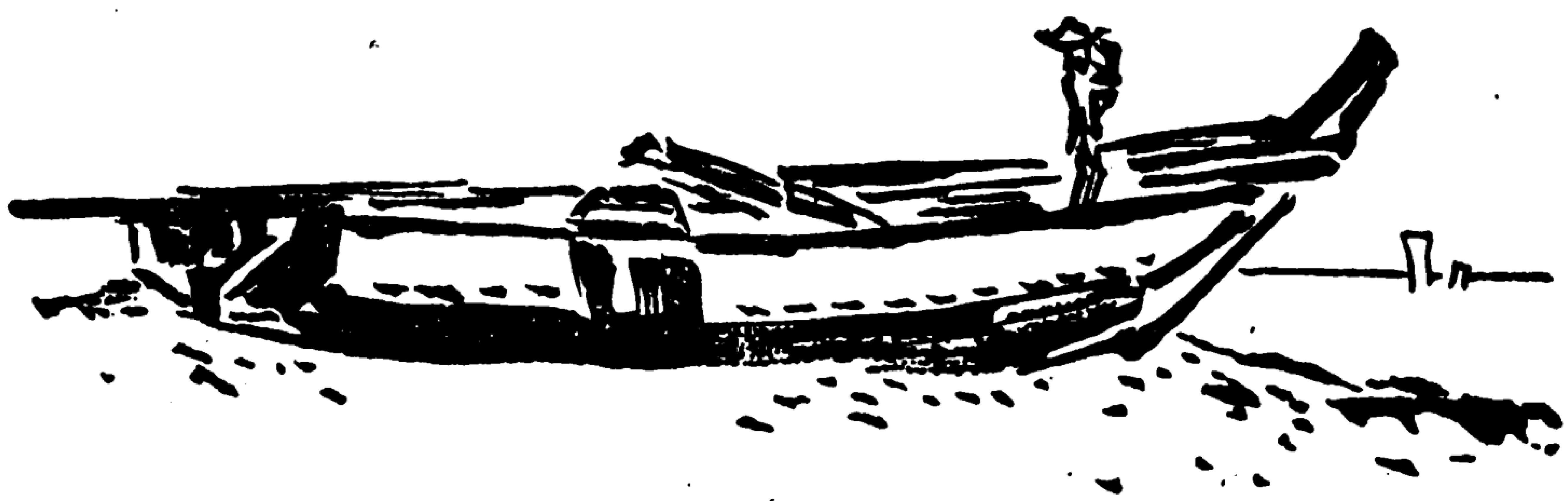
もので、從つて其所在を指定する事も出來ない、故に物質のやうに目に見る事も出來ないのである、けれども

活働的のもので聲に觸れる

ことがある、人の方面にも喜怒哀樂等があるけれども、活働する方面から考ふれば、エチルジーから組織せられたもので、之には經過的のものと循環的の二樣がある、例へば、風の吹くのは如何であるかと云ふに、宗敎上の說には種々あるが、今日の氣象學から云へば、地球の外面に於て順環運動を爲しつゝあるのである、之に依つて天氣の豫報を得るのである、

人の活働は循環的である

例へば、自分が手足を動かし、又は言ふのは、手足や口が自ら活動するのでは無い、心の中にそれだけの用意があつて、而して後に手を振り足を擧げ、又は口に物言ふのである、然らば口は物事を饒舌て仕舞ばそれで終りかと云ふに、中には通り一遍の經過的のものもあるが、それは偶然である、自分が目指す目的地に行かうとして、若しも途中で迷へば、復引返しては目的地に向ふが如く、心の中から手や足を働かせるが、その結果に就て、果して目的に合ふや否と省み、若し





も契はざる時は引返して目的地に達するやうにするので、その顯はるゝ法則は一つである、

例へば、習字の如きは、目と手を働かしめて書くのであるが、一たび之を書きたる後、よく手本と照し合せ、苟くも不味所があれば、幾回となく其結果に就て目と手とを活働せしむるのである、歌人が歌を詠むにも、幾回となく口と耳とで實行しては反覆する、而して始めて目的地に達するのである、此く

活働より成る者が人である

之を環に喩ふれば、地球が太陽の周圍を廻轉し、又は太陰が地球の周圍を廻轉するのとは、自から撰を異にして居るのである、地球が太陽を廻轉すると云ふても、別に彼等には中樞部も末梢部もないのである、けれども人間の活働には、中樞と末梢との關係がある、即ち何か頭腦の裏に動機が發る、例へば、辯舌家になりたい、書家になりたいと云ふやうに、なりたいと云ふ動機が起る、その動機即ち中樞に萠したる動機が、命令を末梢に傳達して、或は辯舌の稽古をしたり、或は習字を學んだりするのである、吾人の頭腦が孰れかに、無數の靜的の動機がある、その中の或物が動的となつて顯はるゝのである、此の動的となつて外部に顯はるゝものは、或一少部分であるが、兎に角その動的の部分は、内部に含まれたる靜的の結果を含んで居る事は爭ふべからざる事實である、

實の無い話は厭が來る

よく世間にある事ですが、誰でも其人が辯舌巧みに、所謂立板に水を流すやうに言語を並べても、若しもその辯士の思想に蘊蓄が無い時には、如何いふものか聞厭がする、之に反して、如何なる訥辯の人でもその人の語る一言一句に味がある時は、縱ひ言は僅かでも、思想が練つてあれば耳を傾くるものである、之は單に辯舌ばかりでは無い、文字を書くにも文章を作るにも同じ事である、最も手近い所で云へば、平常挨拶するにも、上の空でするのと、心の裡に親切氣と尊敬の觀念とがあつて爲るものとは、自から異なるのである、その動作に表はるゝ所は僅かでも、その大部分と云ふものは靜的の蘊蓄如何に基づくものである、此に於てか始めて無用の學問も効用を有するに至るのである、若しも人々が、日々己れが營業とする所の職務を勤め了りて、別に精神を磨く事をしなければ、その者の行爲は餘りに單純であつて

背馳が少ない

のであるが、萬一自己の好む所の事、例へば、その人の日々の職務は銀行家でありとするも、その人の好む所のものは、非ユークリッド說であるとか、又ヘーゲルの哲學であるとかすれば、何も平生七の力の者が殊更に八の働きをするのでは無くして、知らず〳〵品性の修養が出來て來るから、その人格の高尙になる事は意想外なものである、此の點から見ても、常識の者が呼んで無用の學問となすものが、品性を高潔にする所の効用が無いとは云はれない、

今日は或意味に於て我日本も、最早世界の列強と肩を比ぶる位置まで進んだのであるから、從來の如く、單に政治や經濟のみで滿足して居る事は出來ないから、如何かして曩に敬遠主義を取つた學問を取込んで、國民發達の上から云つても、品位を高めねばならぬのである、否、今日所謂無用の學問と稱せらるものは、之を高尙に導きて其効用の大なるにも關はらず、之を無用として顧み無い者のあるのは歎はしきの至りである、

彼の管絃の中には、初めより終りまで吹奏して居る物もあるが、中には只僅に間だ〳〵にチョット吹奏する物もある、その長くするものと短くするものとの差別は要りさうも無いのであるが、夫等が相依り相集りて始めて管絃の効を完うする事が出來るのである如く、又彼の演劇でも、普通の場合には、第一流の役者が出なくとも宜いやうなものであるが、矢張その場合にも勤める事がある、さうかと思ふと、またある場合には、ホンのチョット顏を見せる場合もある、併し之で場面が賑ふのである、

無用の學問もその如くで、飲食物の中に何れも之も胡椒が入つては叶はぬけれども、時としては之が入つた方が宜い、即ち調和を保つ上には是非とも缺くべからざるものである、故に政治や經濟の學も必要である、けれども國民の品位を高め、個人の品性を陶冶し發達せしむる上に於ては、此の無用の學問と稱するものゝ効用も多大なるものであるから、我國民は之をも研究せられん事を希望するのである。

造化の配劑

池谷登喜

天地の長久なるに比ぶれば、我等は蜉蝣のそれにも譬ふる事は出來ないといふ程であるが、偖もその我等人類には一種靈妙なる精神といふものが具はつて居る爲に、或は遠く千古に溯りて現在に鑑み、或は現在を推して既往を徴するといふやうな事をも遣るのであるが、造化の大に比べては何うしても其前に平伏しなければならぬ、といふものは、太陽は鮮かに輝き、萬物は靜かにして一塵も起らず、河には水も流れず、海には波も起たず、常に絶間なく白雪は降りしきり、寒風は肌を劈き、山には緑草なく、野には一花の見るべきなく、見渡す限りの銀世界なる極端に近き寒帶國にも、造化の配劑は不思議にも人類が生存して居て、部落を成して生活せしめつゝある、

抑も動物は植物や肉の類を食となし、植物は養料

よりは主に熱と水とによりて生長するものである、乃ち寒帶國は太陽の光線が斜めに射す所より、何うしても温度が低いから、水は固形体となつて了うので草木の生長には適しない、それ故、僅に石茸、地衣類のやうな、極めて矮小なる下等植物があるのみであるから、草葉や、木皮や、又は菓實の類で生命を維ぐ獸類や蟲類は生存することは出來ない、勿論我等の食料とする穀物および蔬菜の如きは、迚も栽培することは出來ない、然れば穀類が無くて如何して人類が生活し得るであらうか、それは心配するには及ばない、此地方の住民は常に獸類や魚肉の類を以て滋養を充たして居る、一体斯ういふ寒冷な土地になると、よしんば米麥等の穀類が充分に出來てからが、その地方の人民の食料には適しない、

もと〳〵我等人類が食物を要求するには二樣の方面があるので

即ち造成分と發温分

とで、實は是は人類ばかりでは無い、彼の牛馬豚羊

のやうな動物でも、運動して筋力を使用すれば、必ず結合して其筋肉を成せる細胞といふものを減消するから、そこで食物を取つて再び細胞を造成し、而して消耗を補ふのである、發温とは筋肉および体内諸機の運動をして敏活ならしむる要素である、動物は食物を取つて其中に含める炭水の兩素を燃燒せしめて温熱を發生することになる、であるからして、寒温の中庸を得たる地方では、造成分と發温分とを等分に食すれば可いのであるが、寒氣の烈しい北國に在りては、勢、造成分より發温分を多く用ゐなければならぬ、鳥獸類の体中には窒素質および脂肪質が多いのであるから、鳥獸の肉を食すれば、脂肪は直ちに發温分に變じ、窒素質は造成分と化するのである、造化は良くした物で、寒帶の地方には鯨、海豹、膃肭臍のやうな海獸や鳥類が夥しく蕃殖して居るから、毫も食物には差支を生ずるといふ事は無い、

寒國の人民は動物ばかりを食料として生理に適するとしても、牛馬のやうな荷物を負ふべき獸類は生存することは出來ないので、交通や貨物の運搬には甚だ不便に相違ない、況して汽車や汽船の便もない、否、通ずべき道路を造ることが出來ない、その代り造化は馴鹿や犬といふものを供給して置かれる、この馴鹿は寒帶地方に特有の家畜であつて、僅に雪の下などにある地衣などを食して生活するもので、飼養は頗る容易のである、それと云ふも性質が柔順であるからであるが、それに引換へ、力は惡まで强く、爾うして巧みに氷雪の上を奔馳するので、土人は之に橇を曳かしめて交通の用に供し、運搬の不便を償ひ得るのである、それから犬もまた克く主人の命令を守つて、數頭が一列に連なつて、縱橫無盡に橇を曳くべき勞働に伏するのである、而して是等の獸類は能く一日に四五十里の道程に達することが出來るから、その重寶さ加減は我等の想像以上である、

それに是等の動物は、單に交通の最好機關として彼等に貢獻するばかりでは無く、その肉は滋味なる食料となり、その乳は飲料として貴重せられ、毛皮

は衣服、敷物、靴、帽子、夜具等となり、その他骨、角、筋等に至るまで一も棄つべきものなく、實に北寒國には必要缺くべからざる重要の獸類である、彼のラプランド、シベリヤ、カムサツカ、カバフトのやうな寒地では盛んに之を畜養して居る、即ち是等は北寒國人の資産であつて、その飼養の多少に依つて貧富を別つの標準として居る程である、

それから寒帶國には棉や麻のやうな衣服用の植物はない、それも食物と同じく心配したものでは無い、米麥等の寒國人の食料に適合せざるが如く、棉や麻は縱んば殖えた所が温暖を保つには足りないのである、温帶の人でも、冬期になると綿布や麻布よりも、却つて毛布の方が身体に適するのであるが、その毛布よりも柔密なる毛皮の方が温暖を保つの點に於ては數等優つて居る、何故なれば、今四斤の綿を以て、一は紡ぎて織物となし、衣服に製し、一は綿のまゝにて衣服の間に入れ、孰れが温かなるやと問はゞ、後者は必ず前者より温暖なりと答へらるゝであらう、如何にもその如くである、故に寒國に植物性の織物が無くとも、美麗なる鳥や獸の毛や羽などで衣服を製する事を得るから、毫も衣服に事を缺くといふことは無い、

造化の巧妙なることは、自然暑い時分には獸類の躰毛を減じ、寒ければ体毛を增しつゝあるから、熱帶地方の猪や豚は毎時も裸体のやうに毛が薄いけれども、北方に至るに從つて体毛が漸次に濃密となつて居る、また現に印度に產する象は殆んど裸体であるが、古代シベリアに棲んで居た象の一種は、皆一樣に長き密毛で覆はれて居つた、畢竟これは寒氣を防ぐ爲である、

温國の獵師は、夏季は更に獸類を獵らないで、專ら冬期に於てのみ爲るが、是といふも、夏季には獸類の毛が薄くて、迚も捕つた所が防寒具とならないからに基くのである、斯く鳥や獸は寒氣に際しては己の身を保護せんが爲に、毛羽を增加するの性があるので、北方の寒國に產する禽獸は、何れも濃厚な

る羽毛を以て覆はれて居る、殊に海獸のやうな水中に潜行するものは、頗る濃密なるもので、そして北方寒國に比較的水棲の禽獸の多いのは、これ其土地の住民の爲に造化が配劑せられたものである、

それに寒帶國の人民は、寒氣が激しいために、若しも靜止して居る時は、体内の温熱が發散するのを避んが爲に、皮膚に存在する細孔即ち俗に毛孔が閉ぢられる、この毛孔が閉ぢらるゝに隨つて血液の循環といふものが鈍くなる、この血液の循環が鈍くなると、次で來るものは痲痺である、けれども是等の國人は鳥獸



を捕へんが爲に、始終茫漠たる氷雪の曠野に奔走し、斷えず体温を興奮せしめつゝあるから、血液の運行は盛んで、且つ脂肪質を多く用うるところの彼等の消化器までをも大に敏活ならしむるの利益がある、



前陳の如く北方の寒國には、食するには美味にして脂肪多き海獸や水禽があり、往來するには輕快なる馴鹿や犬があるし、身体を被ふには濃密美麗なる所の毛皮や羽毛があるので、寒暖計の水銀までが凍つて用を爲さないまでの酷烈なる寒地に安堵し、太陽の光を仰ぎ、恬々として樂み、敢て他國に移らうとも願はずして、朝夕家族が團欒して娛しく生活しつゝある、尤も此所の住民は概ね矮小である、是を以て氷板で築造した家屋に起臥して居るが、多

數の衣服を要する地に於ては、却つて便益あるものであらう、

寒帶國の住民は一体に体質が强壯で、しかも克く業務に勉勵するけれども、常に食物を捕獲することと、寒氣の防禦とに忙はしいので、自然深く腦力を他事に用うることは出來ない、從つて開明の域に進むの期が無いのは亦已むを得ないのである、

右は主に寒帶の方面のみに就て概說したのであるが、朝から晩まで太陽は赤く輝き、地上の萬物は炎々たる光線を反射し、吹來る熱風は蒸すが如く、殷雷轟き、白電閃き、氷雪の如きは一塲の話柄の外、曾て夢にだも見ることの出來ない塲處がある、これは熱帶國といふので、彼のアフリカ、南米、濠洲などは之に屬する國々である、

植物なるものは素熱と水とによりて成長するものであるから、前の寒帶地方とは異つて、この熱帶地方は非常に樹木や花卉の類は繁茂するので、椰子や芭蕉、蘭の類の如きものにも頗る巨大なるものがある、殊に仙人掌の如きに至りては、その高さ四丈にも達するといふ亭々たるものが林立して居るので、その多汁なる果物は到る處に豊富である、

我國のやうな、實は此所で我國の事を述べたく無いのであるが、比較上こゝに話して置く必要があると思ふので、チョット述べる事とするが、それは單に動植物の事を對照したい爲に援くのであるから、看客も其心して讀過して貰ひたい、是だけは特に斷つて置く、諸姉も知らるゝ通り、我國の如き氣候温和であるものゝ、猶ほ夏季に於ては梨、西瓜、葡萄のやうな清涼甘味なる果物は、頗る口に適し、牛豚等の脂肪性食物は、その肉の臭を嗅ぐだに不快を感ずるのである、それ故に、熱國の人民は專ら熱氣消散と滋養收得の爲に、

多汁清凉なる果實を常食として居る、そして呼吸するも、冱寒國人のやうに酸素が多くない、燃燒作用に於ては敢て脂肪質の効能を認めないのである、

人心に及ぼす影響を探求するに、暖國に於けるものは、寒國に於けるものよりは一般に倦惰と爲り易い傾がある、故に多くは勤勉力を失ふものである、左れば熱國に於ける人民は勤勉力に乏しい、けれども一歩閾を跨いで山野に出づれば、椰子、麵菓樹、橄欖、波羅、西瓜のやうな美果がある、別に勞働せなくとも、容易に天産物を獲て口腹の慾を充たすの利益がある、

次に衣服に就ては、氣候が酷熱であるが爲、別に身体に纒ふの必要を感じないから、概ね裸躰のまゝで、晝は樹蔭に横はり、或は河水に浴し、或は泥中に身を埋めて酷熱を防ぎつゝあるのである、凡て何事でも困難に際ると、必ずや種々の工夫を廻らして、而して事物の發明を爲るのは自然の數であるけれども、熱帶國人は前陳の如く、食物や衣服に就て毫も心配すべき點は無いが、たゞ恐るべきものは猛獸や毒蛇の害である、是等の危害を防禦するにも、それ〳〵の工風が無いでもないが、併し左まで智力を要する程の事もないので、今日に至るも依然として野蠻の狀態を脱するに至らぬのである、

右は主として野蠻人に就てのみ言つたのであるが、一たび開明國人が此地に移住したならば何うであらうか、言ふまでも無く大麻、亞麻、棉等の頗る繁茂して居るのを見たならば、謂ゆる垂涎三尺で、直ちに取つて以て夏服を製するであらう、又少しく耕作に向つて手を下したならば穀物は勿論、蔬菜、胡椒棗および多くの果物、或は珈琲、肉桂、鴉片、甘蔗、藍、蘇木のやうな製品に適するものを收獲するであらう、また家畜には象、駱駝、水牛のやうな有益なものがある、その中でも駱駝のやうなものは、亞細亞、亞非利加等の沙漠の地方では缺くべからざる動物である、即ち太陽が赫々として直射し、燒ける砂石は深くして其の熱を射反し、水絶え植物滅せる、數十乃至數百里の渺茫たる砂原に於ては、他の動物は決して奔馳することは出來ない、けれども柔順であつて尨然たる駱駝は、長脚を揮ひつゝ飲まず、喰

はず、孜々として進行するので、

世に之を乾海の船と稱するも決して溢美の言では無い、地中海に沿へるバルガン、リバーチー諸國のものが、遠く中部アフリカの土民と貨物を貿易し得るのは、一に造化の好配劑たる此駱駝の効力に依るのである、象および水牛は、前後の兩印度ならびに其近島に於て、專ら遊獵や農業に勞働せしむるのである、

前來述ぶるが如く、炎々として金をも爍かす程の土地の人民は、勤勉心の乏しいのは缺點としても、その缺點を補ふためには天然に賦與せられたる產物があつて、毫も彼等の生活に差支なからしめられてあるが、斯くまでに巧妙なる靈腕を有する造化が、何故に是等の住民をして、更に開明の域に導かれぬのであらうか、その機微は我等の窺ひ知ることの出來ないのであるが、それは其として、温暖國に向つては如何に配劑されつゝあるかは號を重ねて講說するとしやう、

婚資を利用せよ

木村堅爾

世の中が進むと共に我等の生活の度も漸次に高まつて來るのは致し方の無い次第であるが、それに就けても成るべく無駄な入費を省くやうにしなければならない、斯樣な事は今更予が云はずとも諸姉が充分に御承知のことである、のみならず、時々刻々に油斷なく看客が實行せられつゝある事と思ふが、此くまでに世の中の人々の經濟思想が緻密に趣いたにも似ず、婚禮といふ一段になると、如何なるものか平素の經濟思想と大反對の現象を呈するとは、實に人心の反覆と云はうか、人世に於ける理外の理とでも云ふべきであらうか眞に不思議である、

固より婚禮は人間一生の大禮であるから、鄭重の上にも鄭重にしなければならず、端嚴の上にも端嚴にせねばならぬのであるが、その鄭重といひ端嚴といふのも、願くは單に形式の上ばかりでは無く、相

互の精神上に斯旨を躰せねばならぬと思ふ、たとへ其形式の上にしても、今日のやうに只その儀式ばかりを盛大にしたり、或は習慣上の贈答に莫大な費用を掛けて、却つて伉儷の大儀を等閑に附するのは甚だ遺憾の次第ではあるまいか、前にもチヨツト言つたやうに、近年は都鄙に拘はらず一般に生活の程度が高まつて、年一年と贅澤の風に趣くといふでは無いが、謂ゆる一昔前の贅澤と、今日の普通と比べてもまだ、今日の普通の方が入費が嵩むといふ程であるに、それに伴れて婚儀の爲に大金を費すことゝなつて來たが、何とか之を防ぐに良き手段は無いものであらうか、昔から

娘三人有てば身代が倒れる

といふ諺がある、その如く日本では嫁入仕度といつて、遠き昔から之には莫大な費用を惜まなかつた、否、惜んだのであるが、其所には

道理らしき不道理

が横はつて居たので、即ち嫁入りの仕度が立派でないと、おのづと子女の肩身が狹いといふ不道理が勢力を逞うして居つた、予が生國などは極て此不條理が横溢して居る、で、この惡習慣が遂に風をなして、今日では最も其頂點に達して居るから、實際家に三人も娘があれば、大抵の身代は其仕度に入揚げて了はなければならぬといふ仕末である、それに現今は、之も昔と違つて女子に學校の教育といふものが必要と爲つた爲に、以前ならば十二三歳になると母親の手許で裁縫から煮炊のことを初め、それから行儀作法などを一通り教へさへすれば事の濟んだものを、今日では小學校から高等女學校位までは是非とも出して其所で、家政、裁縫は云ふに及ばず、割烹、躰操、算術、その他いろ〳〵の課目を授けらるゝ傍ら、校外の科目として點茶、生花、管絃等を課せらるゝので、夫等を學ぶ當人も大抵では無いが、それらの資金を供給する所の父母の身に取つても想像らるゝ、此く學校時代に莫大な金を掛けて、その上ソツクリ他へ嫁入らせるのに、また〳〵何千圓と

いふ巨額の金を拂はせらるゝのであるから、之が父母たる者は却々容易なことでは無い、尤も天下廻り持といへば云ふものゝ、少しく考へねばならぬ事と思はれる。

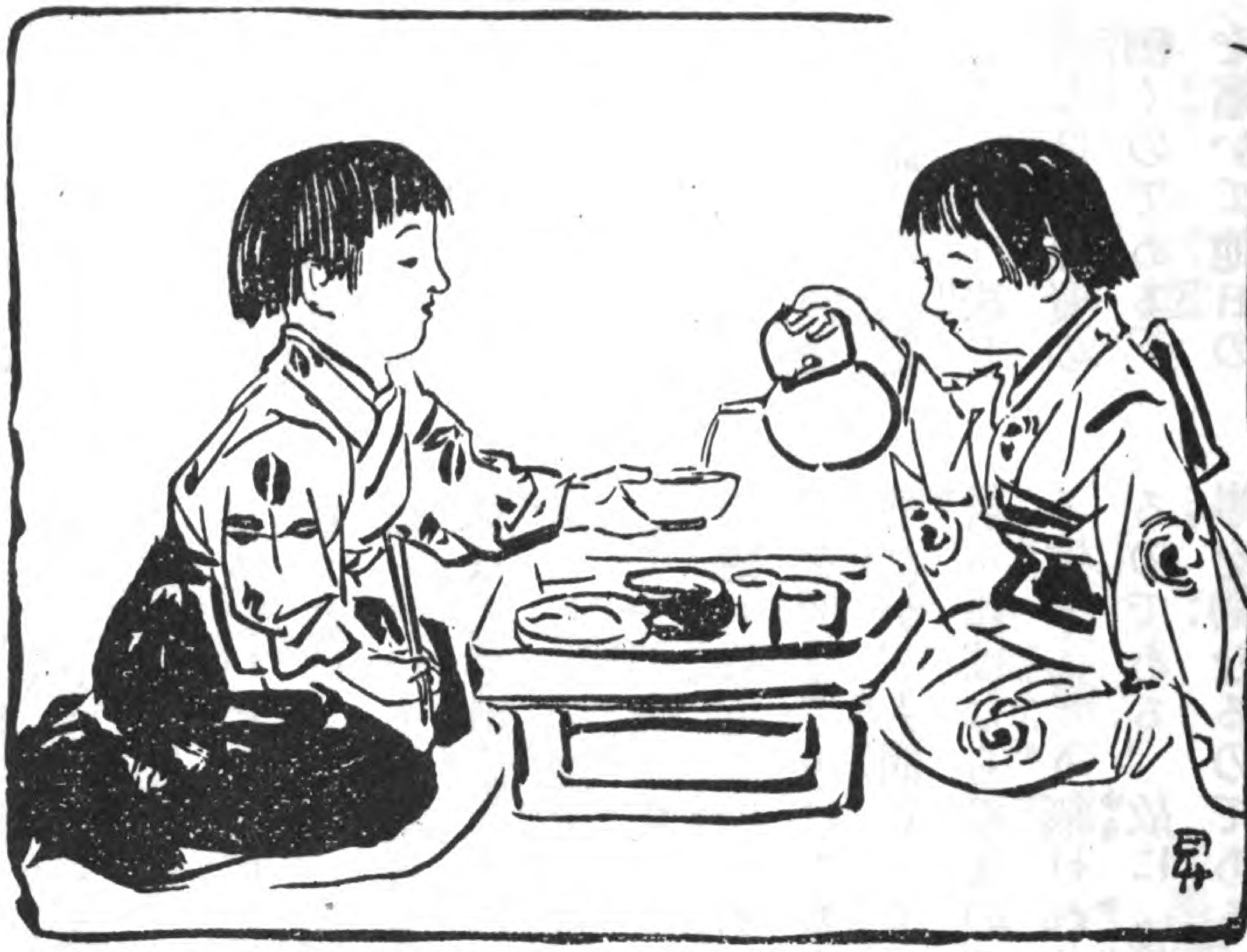
一口に地方といふものゝ、その中でも殊に農家などは商法家と違つて、大抵は年來儉約一方で其家を持傳へるのが習慣であるにも拘はらず、イザ婚禮といふ段になると、それは／＼隨分思切つて金を掛けるには驚く、まづ東京附近で二三萬圓位の資産家でも、娘の嫁入仕度に二千乃至三千圓を掛けるのは決して珍らしく無い、であるからして、下つて一萬圓内外の身代のものでも、帶一筋に百圓近くの金を掛けるものもあれば、下着一枚に何十圓といふ價を拂うが、その大部分は呉服屋の肥料となつて了うのでそれも度々着被るでも無いに、實に惜いと思ふが、近年は益々この流行が盛んになつて、それでなければ嫁入つて肩身が廣くないといふやうな譯で、若しも嫁入仕度に金を惜めば、身すぼらしくて嫁けないといふ、時としては此仕度が充分でないと、折角の良縁も結ぶことが出來ないとは、何と困つた話ではあるまいか、娘を有つた親々の迷惑は然ることながら、これも世の流行であることゝて、如何とも致し方なく、心弱い人々の情として其習慣や風習に打克つことも出來ず、迷惑と知りつゝも、依然その流行に捲込まれて居るといふほどの次第であるが、實に惡弊と言はねばならぬ、斯樣な惡弊は、親々の迷惑は云ふまでも無いが、嫁付く本人に取つても迷惑である、それのみならず、ゆく／＼夫婦となつて將來家庭を組織する上に取つて何の益にも爲らぬのみか却つて一家の爲に不利益を來す原因となる位のものであらう、可惜大金を費けて將來の爲に不利益の種蒔をするやうな惡弊は、如何か一日も早く止めたいものである。

今日婚資の大部分は何に費さるゝかといへば、まづ第一を占むるものは衣裳で、之に次ぐものは器物調度、頭髪の飾物から夜具、その外種々あるであら

うが、まづ是等は他日に殘るものとして、その他一時の儀式に費えて了う金高も少なからぬのである、これまで民間の言傳へに

婚禮は七日の祝儀

と云つて、初日から終りの日まで丁度一週間ばかりといふものは、毎日々々客を換へて宴を設けるといふ風俗になつて居る、これは元より富豪家のことであるけれども尋常普通の家でも、大抵三日の間は客を招ぎ宴を開く事となつて居るのであるから、この入費といふものは却々易々しくない、小身代のものは餘程の倒れとなる、これはツマリ双方の不利益で、縦んば少し位の財産を附けて貰つても、餘り有難からぬのである。



それから同じ娘を嫁入らすにも、少し自分の家より身分の良い處へ遣るには、その娘を嫁付ける爲に、所持の田畑の大半を賣拂つてまでも片付け、爾うして夫が爲に勝手向が左前になつたなどゝいふ話は到る處で聞く事で、それでは双方共に不利益千萬な事は云ふ迄もないが、初めから其不利益な事を承知しつゝ、尚ほ行つて行かなければ、世間の義理が何だか濟まぬやうに思つて居るのは、如何にも愚の極ではあるまいか凡そ世の惡弊といつても、これ程な惡弊はあるまいかと思ふ、それも大抵世間の事は利害の相伴うものであるけれども、是ばかりは害あつて益がないのである。

併し斯様なことは素より各自の勝手で、決して政府の御役人様達が立入つて制限を加ふべき筈のものでも無ければ、また個人同志で規約を立つべき性質のものでは無いが、心ある人々は能く〳〵前後の利害を考へて、世間の風潮の外に立つ勇氣が無くてはならぬ、假りに今日の資産家の格で、三千圓の嫁入仕度に遣ふ處を千圓に減じて、餘りの二千圓を公債證書か、又は銀行預けにして置けば、毎年何程かの利息を生む、一躰人間一生の中には、何時如何なる浮沈に遇はぬとも限らぬ、今日までは榮耀榮華の身の上でも、神ならぬ身の明日は如何なる運命に掴み去らるゝか知れたものでは無い、倘し一朝斯く運命の激變に遭遇した時には、たとひ幾襲の錦綉の衣裳があらうと、長持に何杯の裝飾品があらうと、決して何の役にも立つものでは無い、斯様な時に婚資の貯蓄でもあれば、それは直に活きて働くのである。

　されば嫁入りの仕度に無用の費えを省いて他日の計を爲すのは、單に嫁その人の生涯を安全ならし

むるのみならず、これは榮枯盛衰の原則の上から見ても爾う無てはなるまいと考へる、設令左様なくとも、今日どんな資産家の娘さんでも、最早一旦他家へ片付いて了へば、身に付いた財産といふものは一つも無いから、何となく心細くて、何も角も夫に服從せねばならぬ、尤も法律には夫婦の財産の別を認めるといふ條項はあるけれども、多くは其生活の一切は夫の財産收入に依頼して居るのであるから、主婦としての地位は實に憐むべきもので、若し不幸にして一朝夫に先だたるゝか、その他言ふべからざる境遇に接した時があると想像して見られよ、予が説明を聞までゝはあるまい、是等は萬々一を慮つての咄だが、人間といふものは其位先の事を心に掛けて居らねばならぬもので、それが無いとすれば、謂ゆる遠き慮り無ければ近き憂ありといふ事に撞着するのである、故に豫め婚資を節して貯蓄せられん事を勸むるのである。

　右は嫁その者の一個人の身の要愼としての勸めで

あるが、前來述ぶる所の世の風習に從つて、婚儀に莫大の金を掛けて遣る、片方は掛けて貰うと定つたならば、謂ゆる形式上の盛儀や端嚴は、この大禮を擧ぐるの躰面を保つを限度として、相互に不急の衣服や調度、その他種々の出費は省けるだけ削減し、彼の新婚旅行などいふ、全で親を差措いて若夫婦で結婚匆々旅行するといふやうな蠻風は廢して、夫等の入費は一切擧げて、その土地の學校とか、或は慈善團躰とかいふものに寄贈する事としたならば、啻に其名を不朽に垂るゝことを得るのみならず、教育の普及に寄與するばかりで無く、自ら國家の基礎に培ふことに爲つて、その利益は擧げて言ふべからざるものがあらうと察せられる、併しながら予は他人のポケットまで立入つて指揮し命令するの權利を有するものでないから、取捨は一に看客の判斷に待つのであるが、たゞ新婚旅行をして、行く先々で黄白の力を藉りて瞬間の快樂を買うに優つて居ることだけは信じて疑はないのである、

女子の誡愼すべき事

醫學博士　大澤謙二

女子に就て言ふべき事は澤山にあるが、サテ言ふことは易く、行ふことは難しで、なか〳〵實行するといふ段になると容易ではないものだが、其所を一つ耐へて決行する覺悟がなければならぬのである、けれども之が實行とか、又は決心とかいふ事は男子でさへも躊躇する位であるから、況して意志の弱い感情の強い女子に在りては無理からぬことではあるが、さればとて何時までも行ひ難い、決し兼るといつて居た日には、迚も之が實現を觀るの期は無いのである、

一体女子といふものは概して虛榮心の激しいもので、充分腹の出來たものは左樣でも無いが、喩へて見れば、德利の中に水なり酒なり充分に入つて居れば、何んにて振つても音はしないが、少しでも缺隙があると、必ずポシャ〳〵といふやうな響を發する

と等しく、多くの女子の中でも之と同じく、充分に學問もあり、德操もある、約言すれば、充分に素養のある女子は、決して人前を繕らうの、外見を衒うのといふ事はしない、丁度德利に水が一杯滿ちて居るやうなものであるが、少しでも空隙のある、即ち素養の足りないものになると、如何にもして自己の學問あり技能のあることを他人に示したいといふので、何かに付けてチョイ〳〵その鋒鋩を顯はしたがる、否、露はしつゝあるのである、これは大に愼しむべく誡しむべきことである、

元來學問や技能といふものは、人に誇り他に衒うために修めたものでは無い、これは己が實用に供するために學んだものに相違ない、もし然も無いとすれば、實にその目的を疑はなければならぬ次第である、けれども其は爾うではあるまい、必ずや自己の實用に供せんが爲に修めたに異いない、然うとすれば之を他の面前に誇るなどゝいふことは以ての外の次第と言はなければならぬ、それに斯ういふ事は女

子ばかりではない、男子でも實は見ッとも無い、愧づべきことである、凡そ人として耻を知らないとありては、實は人たるの價値の無いものと斷言しても差支ないと考へる、これは餘り過激のやうであるが、予一己の意見では無い、遠き昔支那の孟子といふ學者も爾う言つて居る、即ち人として耻なきは禽獸に近しと極言してあるのでも立證せられる、依つて何うか世の女子たる方々は克くその邊の消息を理解されて、人の物嗤ひとならぬやうにして貰ひたい、

それから結婚のことであるが、之に就ては以前から大部彼是といふ說もあるけれども、予の考では如何うしても或程度までは親たるものが、干涉と云つては語弊があるとすれば此語は避けても可い、兎に角多少世話をして遣らなければ不可ぬ、口を利いてやらなければならぬと考へる、それは外でも無い、將來結婚しやうとする若い男女をして、その結婚するといふよりもズット前、その結婚しやうかせまいかといふやうな心持のない時分から、彼等をして互

ひに各自の性行や心事を粗知らしむるといふ機會を與へて遣らなければならぬと思ふ、

是までのやうに、若い男女が結婚する工合を見るに、イザ結婚といふ數日前に、僅か一回見合と云つて顔の見合をする、甚だしきは相互に寫眞を取り遣りして、それで人生の一大典禮たる、否、終生の苦樂を共にすべき對手を取極めするとは、實に何たる無謀な仕方ではあるまいか、これらは固より言ふに足らないのであるが、普通世間の遣口は、前に云つたやうに、婚約をする前に只一回の顔の見合をして、碌々口も利かないで、それで良いとか惡いとか取極めて了う、併しそれでも仕合せと大した過ちも無いやうだが、それが爲往々謂ゆる媒介口に誤らるゝものが尠くないやうに見聞する、それ故に此弊を救ふには、如何しても兩者が結婚する前に、彼等をして各自の性情等を知らしむるの機會を與へてやらなければならぬ、その機會を與へると云つても、若い男女を手離しにするといふ事は危險である、同じ若い者でも、男は爾うでも無いが、女子だけは何うしても兩親が監督の位置に立たなければ不可ぬ、併し毎時も兩親が附切りといふことは出來ないから、まづ母親たる者は其責を負はねばならぬ、即ち何か若い者同志の會合があるとか、又は自宅へ青年の男子が訪ねて來たといふやうな場合には、必ず母親たる者は傍で監督をして居らねばならぬ、然も無いと何時如何なる魔が挾さないとも限らないから、其所は充分母親の注意を要するのであるが、斯うして時々兩者を接近せしむるやうにすれば、自然その中に双方が對手の性行等を知ることが出來やうと思ふ、

併しながら斯事は造作も無いやうで、實は之を實行するといふ事はなか／＼容易では無い、といふものは、度々會つて心易くなると、マア彼の人なら平素が平素だから何の心配はあるまいと云ふやうな油斷の生じ易いもので、その油斷が大敵である、十里の長堤も蟻の一穴から潰れるといふ事もあるから、愼重の上にも愼重にせねば不可ぬ、之に就ては何か

良い策が無いものかと、實は常に心を痛めて居るのであるが、まだ好い案も考へ出さないのであるが、一体我國は、チヨツト人を訪問するにしても、衣服を着換へなければならぬといふので、何か土產物を整へなければならぬ、自然億劫になる、尤も西洋でも、改めて客に行く時は別であるが、平生チヨツト訪問し合うといふやうな時は尤も簡單で、それに互に寄合つても、三人行けば吾師ありといふ如く、智識を交換することに努めるから、決して人の噂さや讒訴などを爲ると云ふことは無い、何うか我國でも平素互ひの交際は爾ういふ風にしたらば良からうと考へる、けれども永い間の習慣といふものは容易に之を改めると云ふことは難しいもので、それには多くの人々が氣を揃へて掛らなければ改良する事の出來るものでは無いから、何うか諸姉も其心掛で、良い工夫を考へて貰ひたい、(文責在記者)

燗やすてゝ置いても暮るゝ日を

女子の三面觀

山田光英

通じて世の中を觀るに、洋の東西を問はず、口頭の理論は偖措き、今日實際の所が、何れの國に拘はらず、假令文野の差異はあらうとも、必ず部落を成し、郡縣を成し、國家を成して居るものは誰かといふに、更めて云ふまでも無く男性と女性とが集つて爾うして共に與に異性同志が結合して社會を成して居る、されば斯の男女異性の結合といふことは

先天的の約束

であると斷言しても差支へ無いと考へる、斯くの如く女子たるものは社會を形造るに就て實に缺くべからざる一要素であると同時に、倘しも斯の世の中に女子が徴つたならば、如何にして社會國家といふものを繼續して行くことが出來やうや、それば不可能の事に屬するのである、維新の前までは我國でも、殆んど女子は一の器械視せられて居たの

であるが、明治の曙光に接してより以來、大に女子の眞價といふものを認められ、從つて女子の教育といふものを奬勵せられし結果として、昨今は餘程女子の地位も高まつて來た、とは云ふものゝ、尙ほ廣く眼を放つて觀ると、未だ或一部分といひたいが、我國の女子の七八分乃至九分九厘までは舊時の思想に支配せられて居る者が尠なく無い、而して其剩す所の僅少の部分の中には往々女子の天分といふものを抛擲しやうとさへ考へて居る者が鮮なからぬのであるが、それも過渡期としては免がれざる暗潮であるであらうが、餘り感心は出來ない、何故なれば、





女子は三面の要求

を充たさねばならぬ大責任のあるもので、即ち社會の一員としての女子、人の妻としての女子、小兒の母としての女子、此く三面の充實を、社會より將家庭等より要求せられて居るのであるから、なか／＼一口

に女子位が、又は女子の分際でなどゝ侮蔑すことの出來るものでは無い、否、その嘲笑し冷罵する者こそ、實に自ら女子の眞價を知らぬといふ事を表白して居るものと云はねばならぬ、此くの如き人は必ず男性のみで家庭を形造り社會を繼續し得るものと、夢想といひたいが、實は空想を描いて居るものであるから、迚も共に人生のことを談ずるに足らない痴漢といふべきである。

凡そ生を斯世に稟け來つたものは、男女に關はらず、古代はイザ知らず、現時に在りては決して毫も此社會と關係なしに一生を通過することは出來ない謂ゆる國民の一員として存在を自認しなければならぬ、既に國民の一員として自己の存在を認めたとすれば、その國家を保全し持續するの義務として、此に夫妻的の關係を拒むことは出來なくなる、換言すれば家庭を形造らなければならぬので、既に家庭を形造れば、從つて子女を生み之を育つて行なければならぬといふことは、是亦自然の道理である、尤も往々石女といふ一種の女性もあるが、それは例外で普通尋常一樣の女子は之に加はることは出來ない。

右の如く國家の一人として、將また妻として、及び母として斯世に出でたるものとしたならば、必ず之に副ふべきやうに努めなければ不可ぬ、喩へば、家屋を建築するにも夫々順序のあるもので、唐突地固めもしない大地の上に建築することは出來ない、よしんば建てたにしても永持が無い、謂ゆる大厦高樓で無くとも、之を建てやうとする前には必ず地擬といふ事をして土臺を固め、而して後建築に取掛らなければならぬと等しく、人に在りても男女を問はず、各自かならず其土臺を堅めて掛らねばならぬもので、若しも然もない時は人として斯世に處して行くことは出來ないのである、殊に女子は男子に比ぶれば國家に對して一層重い責任のあるものであるから、なか〳〵油斷のならないのであるにも拘はらず天下の女子の大部分は未だ其所へ氣附かれた方の澤山ないのは誠に歎はしき次第と思ふ。

そこで人として、また母として、且つ妻として存在する女子方が、克く社會の要求する前述の三大條件を遺憾なく充たして行かうといふに就ては、之が土臺となるべき要素は決して少なくない、けれども其孰れの方面に向つても第一の要義たるべきものがある、それは外でも無い健康である、

實に健康は成功の母なりといふが如く、我國の諺にも古來から、生命あつて物種といふと同様で、何事を爲すにも自己の身体が壯健で無ければ、到底何事をもなし得るものでは無い、如何に精神だけは利かぬ氣性でも、肝腎の身体が言ふことを利かない時は、たゞ腹の中で焦心苦慮して居るばかりで、約まるところ不成功に畢らなければならぬ、これは予が更めて言ふまでも無く觀易き道理であるのみならず、諸姉が今日までに既に業に實驗せられつゝある事であらう。

元來人として健康を希はぬものは無いのであるが何うも我國の女子は、既往幾星霜の間に浸み來つた惰性とも謂ふべきか、成るべく身体を動かさない工面をし、厚い坐褥の上に居て、腮で奉公人を使ふのが可いことに心得、これが上品な生計で、チヨツト親類縁者等の許を訪ねるに方りても、自分で手土產の菓子折一つ携つて行くのも耻かしいやうに考へて左程重くもないものを女中に持たせて行く、といふその底意を推して見ると、ツマリ自分の家は此くまで生計向が裕福であるといふ事を世間へ衒うに過ぎない、殊に忌むべきは、幼稚園へでも行く童男童女なら知らぬこと、たとひ幼少ながらも最早小學校へ通ふほどの子供なら、自分の辨當や學校道具位は持つて行けないことは無い、而かも女中や小女などに夫等を持たせて從けて遣る、それも尋常科一二年生の中なら未だしもだが、最早高等科に進んで、一二年で卒業するといふ子女までに爾ういふのがある、これは單に小學校の一例だが、この小學校以上の學校にも斯ういふ例は澤山に見受ける、それで其實子女の兩親の心持は如何かといふに、何卒して其子女

の身体を强壯に健全に發育せしめたいと望まぬものは一人も無いのであるが、

その希望と實行とは正反對で、昔支那の齊といふ邊鄙な國は、大層自分の國の言語が惡いといふので、當時都の魯の言語を習はせやうといふので、只今の流行語でいふと、一人の留學生を魯の國へ遣はし、三ケ年間ほど其國の言語を練習せしめ、國に皈りて後、多くの子弟を集めて之を訓練せしめて、一意言語の改良に盡碎せしめられたが、丁度我國に於ける外國語を學んだものゝ現狀のやうに、魯語を使用する者の僅少なるに反して、齊語を用うる人の數が多いので、謂ゆる多勢に無勢で魯語は擴らずに了つたといふ話がある、今日でも何だか理由の判らない事をいふものを指して齊東野人の語などゝ云ふ如く、元來齊の國の言語は惡かつたに相違ない、故に魯の言語を容れて之を改善しやうとする其心掛は立派である、即ち子女は勿論、自己の身体をも併せて健康に保ちたい、强壯にしなければ爲らぬと云つて、やれ何が滋養になるの、やれ運動が足りないのと云つて氣を揉まれにも拘はらずその平素は如何かといふと、成べく身躰を動かさ無やう、例へば、自分の居間の掃除どころか、寢衣一枚、着更一枚も疊まうとはしない、尤も奉公人も何も居らない家では據ろなく自分で爲るが、それも人でも來ると、遣りかけた仕事まで片附けて、私は家に居ても此通り何もしないで浮羅々々して居る遊んで居る、實は氣樂なものでせうと言んばかりの顏色をして、表面を繕らう事にのみ腐心して居る、

仕事が何耻かしいから

若しも仕事が耻かしいとならば、口を利くのも仕事御飯を食べるのも仕事、仕事といふ點からは區別を見ないのであるが、口を利く事や御飯を食べる事は人の前で行つても耻かしくも無いが、衣服を疊んだり、座敷を掃除する所を人に見られては耻かしいとは如何なる道理に基くものであらう、併しながら他所へ行つて客間で無暗に衣服を着換へるとか、又は

疊み直すとかいふやうな事は失禮であるが、自分の宅で常に夫等を爲るのに何が耻かしいのか、その耻かしいと思ふのは畢竟間違で、底を叩けば虚榮心の爲に捕虜となつて居るからである、實に怪かる話ではないか、

これは今日まで誰一人云はないやうであるが、一体虚榮心といふものゝ爲には頗る健康を害するもので、この事は他日委しく述べるとして、此には其一端に止めて置く、苟くも自己の健康を損傷したならば、前來陳るところの國家の一員としての要求を充たす事も出來なければ、人の妻として家庭の主婦たるの重任に堪える事も出來なければ、延て子女の母として慈愛の懐に眠らしむる事の出來得るものでは無い、故に斯三大要求を充たして女子の天分を全うせんとならば、最も健康に注意を拂はねばならぬ、之に次ぐものは健全なる精神であるが、それらは項を更めて咄すことゝしやう、

阿佛尼

女子美術學校教授　谷紀三郎

五

諸子よ、阿佛尼當時の胸中は果して奈何なでしたらう、之れを通常一般の婦人として思ひやつて御覽なさい、只愚痴に流れ、涙にのみ暮れて、果は世を怨み人を謗るに止まる位の事であつたでせう、けれども阿佛尼の高き人格は此苦境に際して遺憾なく發揮されたのでありました、以爲らく、爲氏は細川の莊を横領するものである、既に人の道に背ける無道者である、かくては家門の爲めに、否我が愛子の爲めに甚だ憂ふべき至りである、止むなくんば宜しく之を鎌倉の政廳に訴へて事の曲直を正し、以て將來の安固を圖らねばならぬ、阿佛尼は男々しくもかう考へたのです、遂に意を決して、乃ちかの政廳に訴ふべく、道程三百里、何の意とせず、住み馴れし京の地を發足して鎌倉は女一人旅の苦を敢てしたので

ありました、當時自ら日記に記して居る、
をしからぬ身一つはやすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみはなほしのびがたく、道をかへりみるうらみはやらむかたなく、さてもなほ東の龜のかゞみにうつさば、くもらぬ影もやあらはるゝとせめて思ひあまりてよろづの、憚を忘れ身をえうなきものになし果てゝ、ゆくりなくもいざよふ月にさそはれいでなんとぞ思ひなりぬる、
さりとて文屋康秀が誘ふ水のありしにはあらず、只實に道の爲め、家の爲め、子の爲めにかくは思ひ餘れるのみ、いかに壯烈な婦人でせうか、いかに志想の堅固な人でせうか、情操高き人格を偲ばしめられるではありませんか、今でこそ一晩かゝれば京都へ行かれます、併しまだ六百年の昔では少くとも十日以上を要したでせう、其覺束なき道の程を野越え山越え女の身で、たつた一人の冬の旅です、いかに寂しかつたでせう、さて子故といひ、道の爲とはいふとも、之をしも壯擧と謂はずして何でせうぞ、

六

阿佛尼の十六夜日記は右の故を以て建治三年十月十六日に京都を發足して鎌倉に下つた道中日記と鎌倉滯在中の日記なのであります、但し滯在中の記事は極めて少しばかりです、卽ち知る、私がこの文の第二節に、所謂十六夜日記をものすに至つた事柄といふのは以上の事實に過ぎぬのであります、諸子は果して如何なる感想を思ひ起し得たでせうか、
さて十月十六日に京都を發足した阿佛尼は、十月廿九日拂曉に酒匂を發したとありますから、遲くも其の翌日は鎌倉へ着いたのでせう、さて鎌倉へ着いてから奈何であつたか、極樂寺のほとり月影の谷に住んで居たといふ阿佛尼は、そこで空しく弘安六年といふ年まで滯在したのであります、數ふれば滿五ケ年以上の歲月を、訪ふ人もなき寂しき宿に過ぐしたのでありました、薄命の老尼にとつてはいかに長い年月でありましたらう、なぜ如其長逗留をしたのでせう、言ふ迄もなく肝腎な訴訟を決して呉れなか

つたからで、御承知の通り弘安といふ年は國家まことに多事の時であつて、かの元寇を控えた時の世の中なのでありましたから、さらぬだに亂後を承けた鎌倉の政廳は種々の緊要事件に忙殺せられて、阿佛尼が提起の訴訟は空しく五ヶ年といふもの何等の判決を與へられずに素志が通されましたのでした、細川の莊は爲相の有に歸することを得たのでありました、どんなに滿足でしたらうか、本懷でしたらうか當時の胸中實に思ひやられます、

併しながら、諸子よ、不幸なる阿佛尼は竟に薄命の人でありました、何故なればその成功に對して滿腔の喜悅を表し、且つ多大の感謝を拂はうとして、慈母の歸來を鶴首して待つ所の愛兒等の笑顏をば遂に見ることが出來ませんでした、即ち阿佛尼はかの鎌倉で死にました、五年の間待ちし裁判が判決せられると殆んど同時ころに、月影の谷は寂しき庵中に於いて極めて寂しき周圍に取りかこまれつゝ、遂に遺焉とし瞑せられました、いかに多くの思を遺したでせうか、或は又正覺の光を仰ぎつゝ頰笑みて彼の世の淨土に行つたでせうか、兎にも角にも私の目には不幸薄命の老尼として映ずるのであります、

秋のうた

菅　惠　子

雁のこゑ

風寒み身にしむ夜半の月影に
　ころもかりがね鳴わたるなり

小夜ふけてゆくへ定めぬ雁金の
　鳴くなる聲ぞあはれなりける

世のうきを思ひつらねてかりがねの
　なく聲きけばあはれなりけり

朝がほの花のさかりもおもしろけ
　れど、莟にもまたおもむきありて

夕月の影にかぞふる朝顏の
　つぼみのふりのおもしろきかな

秋のうた

秋はぎ

けふもまたいざ見にゆかむ秋萩の
　ながめにあかぬ宮城野の原

人づてに聞くもこひしゝふる里の
　白はぎの花いかに咲きしと

庭も狭に咲匂ひたる秋はぎの
　花のさかりとなりにけるかな

月の影

こゝろあらむ人に見せばや津の國の
　なにはの浦の月のけしきを

松風の音にかよひてよる波の
　岸邊に月の玉ぞちりける

すみのぼる今宵の月を眺むれば
　こゝろの塵もはらはれにけり

かねてより契りおきにし須磨の浦の
　今宵の月をともにながめむ

かくばかりさやけき月の影ふみて
　などてや君はかへりゆくらむ

いつよりもわきてさやけく思ふかな
　こゝろも空もすめるつき影

もろともに今宵の月をながめやる
　こゝろも空にうかれけるかな

年ごとに月見る友は多けれど
　こゝろのともの數ぞすくなき

虫の音

虫の音にあはれさまさる秋の夜の
　昔こひしきやましなのさと

長き夜の淋しき閨のまくらべに
　あはれをそへてこほろぎのなく

わけゆけばゆふべ淋しき秋の野に
　誰に聞けとやすゞ虫のなく

長き夜の明くるもしらでこほろぎの
　こゑもあはれになきしきるなり

秋の野に露をしとねの草まくら
　ゆめ路のすゑにこほろぎのなく



小春日和

電車の話（つゞき）

理學博士 田中正平

我邦に於ける狹軌道の將來

我邦の狀況を見るに、夫の三呎六吋の狹軌道で、將來どの位に列車の速度を增進し得るかといふ問題を講ずるのも頗る興味あることであらう、公衆の希望する速度は、素より際限のない事であらうが、實際出來る丈を取調べて、之では滿足が出來ぬといふなれば、今より思切つて根本的の改作を決行しなければなるまい、此大問題に就いては、吾邦の當事者は、夫々學理上の斷案もあり、又實際につきて調べて居ることであらうが、其中一二點は、特に實際の仕事振を觀察せずとも、歐米の振合等を參照すれば直に判かることもあるので、今より是等に就て卑見を述べて見やう。

機關車動輪の最大徑は、軌道の幅に依つて定つて、歐米に普及の彼の四呎八吋半の廣軌鐵道に於ては、

動輪の直徑が七呎の上に多く出でないことは、前號に述べた如くで、吾邦の狹軌では、之に相當するものは、既に東海道線、關西線、又は山陽線に用ゐられて居る五呎の徑であらうが、此際機關車新調のときは、之を五呎六吋にすることが出來やう、之より大なる車を用ゐると、汽罐の中心が餘りに上昇し、機關車の重心が上つて來る結果として、機關車の座りが惡くなつて來る、偖機關車設計家は、常に重心を成るべく低うして、顚覆の危險を少うすることに苦心して居る位であるから、此際思切つて徑六呎の車輪の上に大汽罐を据付けるといふことは、大に不安心に考へて、之を敢てせないであらうが、斯すれば機關車が必ず顚覆すること請合と云ふにも限らない、或は存外之でも差支ないかも知れん、つまり何處でもまだ此種の試驗をしたことがない、故に唯壁に鬼を描いて恐ろしがつて居るのかも知れん、併し三呎六吋の狹軌鐵道上に、徑六呎の車輪を有する機關車を運轉せしむるといふのは、現今の狀態では、

少しく突飛な要求である感があるからして、先づ當分最大徑を五呎六吋に止めて置くことにしやう、そこで此五呎六吋の車を一分時間に三百二十回回轉せしむるものと假定すれば、一時間六十三哩の速度を得る勘定である、又馬力の問題に移ると、先づ只今吾邦の最急行列車を牽引して居る機關車は、傳熱面が九百乃至一千平方呎で、之より見積ると凡そ五六百馬力しかない、併し所要馬力は列車の噸數によつて定まるものであるから、先づ聯結列車を極めなければならぬ、そこで只今新橋、神戸間を運轉して居る急行列車の設備で、當分間に合ふと假定すれば、列車の重量を百三十噸と見積つてよろしい、之を平坦線で一時間六十哩の速度を以て滯なく牽引するには、凡そ七百五十馬力を要して、之を供給する汽罐を傳熱面は、約千二百平方呎となる、現今の建設規定範圍内で、此程度の機關車を設計するのは、別に困難といふことでもあるまい、否、右より二割方大なる傳熱面を持つて居る機關車が出來得るであらう

之を掻い摘んで云へば、吾國現在の鐵道で、出し得る最大速度は、一時間六十三哩であると云ふことである、是が總ての區間で實行せられて、云はゞ純然たる直行であれば、東京、神戸間の運轉時間は、約六時間とならうが、是はまだ〳〵空論に過ぎんので實際なか〳〵さうは行かぬ、即ち前に述べた通り、復線の敷設が行屆いたとしても、中途に種々の故障がある、先づ大決心を以て旅客乘降の爲に、途中で停車をさせないとしても、機關車を取換へる爲に、多くも平均六七十哩毎に列車を一回づゝ止める必要もあらう、又勾配線、曲線、橋梁等通過のときは、速度を緩める必要もあらう、一躰四十分の一などの急勾配や、二十鎖の如き甚しい屈曲のある線路に、高速度の列車を運轉せしめやうといふのは少し無理な注文であるから、線路が充分改修されて、右の樣な大なる障碍物が取退けられぬ限りは、假令廣軌道に改築せられて、現今歐米で行はれて居る樣な大機關車が出來た所で、運轉の危險が增すのみで、列車

の速度を非常に増すことは出來まい、歐洲大陸や米國の如き、遠距離直通の必要ある處は別として、吾邦の樣な島國は、それ程早い列車の必要もあるまい又小山や荒れ河の澤山ある吾邦の土地で、英國と同樣な運搬の便を得やうといふのは、其開化の程度が假令同じくなつても、幾分か贅澤であるやうにも見受けられる、併し兎も角も、急行列車の速度を現行のものより、著しく增進しやうと云ふには、勾配、屈曲改築が必要になつて來るが、是はなか〳〵大事業であつて、直に實行は出來まい、であるが、それにも係はらず、高速度運轉が必要とあれば、一の彌縫策として急勾配の所にのみ電氣機關車を使用するがよい、前にも述べた通り、バルテリナ鐵道で用ゐて居る樣な機關車を用ゐれば、吾國普通の急行列車を一時間三十五哩の速度で以て、四十分の一の勾配を安々と曳き揚ぐることが出來やう、又之より強い機關車を拵へることも出來やう、勾配線は孰れも餘り長距離に渉らぬからして、電線敷設の入費も嵩むまいし、又電氣運轉の線路が短いに伴れて、送電の費用が少くなるに依つて、石炭を燃して發電した所で、現今の蒸氣機關車で運轉するよりは、費用が節約される見込がある、其上電氣の長所とする所は、急勾配線のある近所には、利用の出來る水力がある筈であるので、之を利用し得れば尙更妙であると考へられる、即ち東海道線を例に採れば、足柄山と關ケ原附近と逢坂山との三箇所を電氣機關車の運轉區域として、其他の線區運轉には夫の一時間六十三哩出る蒸氣機關車を使用すれば、東海道線で以て一時間四十三哩乃至四十五哩の平均速度を以て運轉することは必ず出來得ることゝ思ふ。

隴を得た序に蜀を望む

さてこれら述べた所の要點を數へ上ぐれば、即ち蒸氣機關車を使用して、急行列車を運轉する場合の實際的最高速度は、歐米諸國に於ては一時間平均六十哩であつて、吾邦に於ては平均四十五哩となる、併し隴を得て蜀を望むとは人情の習ひ、彼の國々に

於ては、今日既に之を以て滿足しない徴候が見える、故に早晩此點に就て大速度を要求する場合に立至らぬといふことは斷言出來まい、此場合に於て依然として蒸氣機關車を用ゐんとすれば、假令廣軌鐵道に改築しても、永遠の滿足は得難いのである、言換へれば此目的を達する上に於て、早晩電氣運轉に移らなければならぬ時期に向ふであらう、其場合に於ては、狹軌道にては間に合はぬか如何と云ふ問題が起るに相違ないので、今日より此問題を考究して置くのは、或は無駄事ではあるまい、勿論軌道を擴張するに就きては、高速度運轉を遂ると云ふ外に、幾多の理由もあらうが、今單に電氣運轉の下に高速度を得ると云ふ目的から云へば、狹軌、廣軌の差は念頭に置く必要がないと思はれる、其譯は先づ電氣使用の場合には、實際働輪の回轉數に限度がないと云つても宜いので、隨つて比較的小なる働輪を用ゐて、任意の高速度を出し得ると云ふことゝ、構造上强大なる力、即ち充分の馬力を出す餘裕が澤山にあると云ふことである、此點に關して異議を挾む論者もあらう、『元來





電氣モートルは、孰れも一對の車輪間に取付けなければならん、そこで之に利用の出來る間隙が、廣軌では四呎五六吋であつて、狹軌では三呎三四吋であるからして、其割合で馬力が減少するに相違ない」と斯樣に云ふであらう、成程或程度迄は之に相違ないが、モートルの幅に於て失ふ所は、徑て以て補ふことも出來やう、又實際廣軌鐵道で强大であると稱して居る電氣機關車では、モートルの有効なる幅即ちアーマチユールの幅は三呎二三吋の外に出ないので、餘分の幅は、夫の刷子が占めて居る、併し此刷子は車の臺匡の外に取出すことが出來る、此方式は夫のパルテリナ鐵道の機關車に既に採用せられて好結果を奏して居る、であるから此通りにして、狹軌鐵道で有効なる間隙を充分利用すれば、頗る强力なモートルが据付られる、元來電車に於ては、其動力を外部より導入するのであるから、設計が其宜を得る段になると、馬力の不足を感ずると云ふことは、萬無からうと思はれる、以上の理由によれば、電氣運轉に變更の曉には、狹軌道でも不經濟で遣切れぬと云ふ點まで、速度を進めて參れるものゝ樣に私は信じて居る。(完)

安東菊子の君のもとに遊びけるとき

小川直子

安東菊子の君、若き折は幸うすくして、はやう脊の君におくれ、心ぼそけなりけむも、名におひ給ふ菊のごと、心さま氣高う操を守り、子達をおほしたて給ふ事うるはしかりければ、香はしき名も人に知られて、めでたきが上にいとみやびて、敷島の道にも深く心をそゝぎてものし給へば「山路の菊」とてみづからあつめ給へる家集もあり、世の人みなもめでつゝゆかしがる君なれば、おのれもなつかしさに折々問ひみとはれみ樂しむどちなりけり、さるから

に此程つれ〴〵なればとて、三輪田女史、阿部優子の君、おのれをも加へて、みたりを招き給へり、皆喜びて行きぬ、この日は七月七日の事にしあれば、まだ五月雨も名殘盡せぬほどなれど、雲間見えつゝよき日なりき、されば午過ぐる頃皆つどひぬ、あるじの君喜び迎へて、昔今の人々の短冊どものうるはしきを帖になしたる、又は人より得給へる消息文をあつめたる卷物などとり出でゝ見せられけるまゝに、諸共に見てたのしめるに、園生を見やれば、廣やかなる苔路さへなめらかにて、老木若木の常盤木どもゝ茂りあひ、こき薄き緑のつら〴〵そが中に、あぢさゐの高やかなるが、花もあまたにいやかさなり、今を盛りと匂ひ渡れるを見て、優子の君これを題にて例の三十ひともじをもつらねなば、いかにをかしからんとのたまへば、

三輪田女史

千萬をまつのこかげに所得て
　咲きこそにほへあぢさゐの花

うるはしき世のさま見せて紫陽花の
　ひと日〳〵にいろまさりゆく

優子の君

芝生の上いと清きに、いつの世の子の日にひかれけむ、枝おもしろくたち榮えたる松のもとに、あぢさゐの咲匂へるをあかず詠めて

とことば書して

榮えゆくやどのしるしの松陰に
　千代をしめたる花の色かな

幸ひとの君にあえけむあぢさゐの
　花のいろ香も世に似ざりけり

おのれ

ながむらん君がこゝろにならへばや
　すが〳〵しくも匂ふあぢさゐ

おのれまた朝顔の盆栽あるを見て

朝な〳〵君がめづべき花なれば
　甲斐ある色にさぞ匂ふらん

かゝることいひ〳〵て居る程に、優子の君、論語

といふ文の中なる、爰のひとふしかしこの一言を拔き出で、我こゝろに覺束なう定かならねば、願はくば說き聞かせてたびてむやとのたまふに、三輪田女史は素より經書にあきらかなる君にしあれば、つばらにとき給へるが、猶序なればとて、大學の中なる

緡蠻黃鳥止于丘隅。子曰於止知其所止。可以人而不如鳥乎。

此丘隅に止まるまでは、小雅の詩なるが、孔子はつねに天地間の自然現象を以て敎の材料となし給ふこと多し、此全体を一わたりかいつゞめていはゝ、春の長閑なる頃黃鳥が鳴囀る時は、必ず小高き岡の頂に樹木の茂りあひて、我姿の容易に見えぬ所をえらび、そこに止まりて、心靜かにうるはしき音色をもてさへづるなり、凡人の目に見ゆる事實はこれに過ぎざるも、さすがは聖人也、孔子は此詩を讀みて忽ち黃鳥は能くその止まるべき所を知りて居る、ましで萬物の靈たる人として小鳥に劣るべき事かは、即ち道は自然なり、故に人たるものは君としては仁

德、臣としては忠義、父は慈に、子は孝に、夫は婦をいとほしみ、妻は貞操を守り、兄弟は共に友愛の心をかはし、朋友は互に信をもて交らふ、此五常五倫の道ぞ人の止まるべき所なるに、若しその當然のことはりにたがひたる行ひありては、是れ即ち鳥にだも如かざるものなり、と一の天則より人の踐むべき一の大道を發見し給ひき、要するに物は同一なるに、凡眼と聖眼とに由りて雲泥の差を生せり、

といふを、女史は今一きは一をさへあらはし、たとへをとり、言葉もうるはしうかたり給ひければ、皆耳を欹てゝ眼きつゝ喜び樂しみぬ、此時おのれ

見馴來し文のことばもさらにまた
　きけばこゝろのみがかるゝかな

優子の君

いにしへのひじりの敎なかりせば
　いかにさまよふこゝろなるらむ

などよみ出でつゝ喜びけり、また菊子の君は

玉あへる友の來ましゝ我やどの

たのしきけふをいつかわすれむ

とよみ給ひければ、優子の君のかへし

いつまでも忘れぬ友の中垣に
結びそへばや千代のちぎりを

猶また優子の君

心ゆくかぎりなりけり唐やまと
わけいる道もともにひかれて

かゝる遊びのたのしきにつけても、おのれは願ひの叶へるこゝちして、嬉しきことかぎりなし、されぱおのれ若き程より學にこゝろざし、人たる者の道を踏み、心の玉をも磨かむと思ふにつけては、あはれよき友を得むと願ふ心浅からざりしに、此君たちは皆すぐれ給へるが中にも、三輪田女史は並々の博士はづかしげなる君なれば、おのれは常に敬ひ尊びて、みつ栗の中むつまじう、心あひの友にしあれど、かたみに世のつとめのいとまなきどちなれば、心靜かにかたらふこといとかたくて、七夕つめにあらねども、逢ふ事の稀なるを常にうらみとしつゝ過し來つるに、けふ斯くのどやかにかたらひて樂しきのみならず、觸る所の益を得る喜ばしさ、たとへむにものなく思へば、我教子連にも、けふのさまをかたりて、友をえらぶに心すべき道をと、いさゝか書しるしぬ。

巴里の婦人

帝國圖案社長　福知天香

私の先年佛蘭西に滯在して居つたのは、僅か一年餘のことであつて、殊に自分の專門とする所の研究に忙はしく、殆んど寸暇を得なかつたのであるから、その外の事に就ては、何事も深く觀察することは出來なかつた、それ故こゝには巴里の婦人といふことに就て話をしやうと思ふのであるが、是とても偶然眼に觸れ、耳に聽いて記憶して居ることだけを話すので、それも順序立つて居らないのであるから、或は婦人といふことの肝腎な觀察に就ては要を得ない

かも知らないが、且らく辛抱して讀んで貰つたならば、網の目にも風留るといふ諺もあるから、何か稗益する點が無いでもあるまいかと思ふ。

巴里の婦人といふものは、元來が歐羅巴中での殆んど中央に位する都會に居る人であつて、古へより巴里といふ所は、總て婦人の服飾とか、その他日本でいふ行儀作法といふやうな事に就ては模範とされて居る所の人であるから、その容貌とか風俗などに就ては、凡て世界の美術家が模範とし、又世界の贅澤家が皆その風に倣ふといふやうなことである、併し通例外面を飾る方のものは、その行爲とか心の修養とかいふ方が乏しいのが常であるから、巴里婦人に於ても矢張その傾がないではないが、併し容貌と外面に飾うて居る態と、また內輪に有つて居る行と、意外に變つて居る所もあるやうに思れる、それで先づ巴里の婦人の見た所の容貌と風俗から御話をするが、元來巴里人は、餘り脊の高い方で無い、中には隨分日本婦人位の者もある、併しその形は皆誠に恰

好が好くて品が宜い、それは大變他の國の婦人に比べると差異があつて、文明國、大都會と云はれて居る所の英吉利倫敦人ですら、この巴里に較べると實に田舍者たるを免れないのである、それで巴里の女の形は

總てタプローになつて居る

即ち美術の形に適うて居る、英吉利の婦人は、巴里で之が惡口を云つて、板戶を立てたやうであると評して居る、即ち直立して肩が怒つて、甚だ不愛想なる形をして居る、倫敦の婦人でさへ其通りであるから、况んや巴里婦人から比べて見ると、獨逸の如きは如何にも田舍臭い態を爲して居る、又亞米利加人の如きは、何分新開國といふやうな俗な態に見える

それで通常西洋人は

年をとる程滿肥して行く

やうである、それで若い人はマドマゼールの時から、マダムになる迄の間といふものは、皆形がスラリとして恰好が宜いが、お婆アさんになると段々肥えて

來て、實に大きな横肥りになり、甚だ我々の眼から見ると不格好で、滑稽畫に類して居るやうな態の人が多い、それで勿論彼國でも、貴賤の區別によつて大變に容貌は變るけれども、併し他の國から見ると巴里の女は下女からして職工に至るまで、實に何れも身柄な人の娘とか、また女房とかいふやうな風をして居つて、下等の婦人ま



でも其形が良くて、而して服裝が能く調つて居る、その容貌は元來巴里の女は肌が大變に奇麗なといふ譯でもなく、また目鼻立ちが好いといふ譯でも無いけれども、併し格別片寄つた顔をして居らぬ故に、容貌などは好く見える、で、通常の人でも隨分淡く白粉を塗けたり、臙脂を注したりして居る、併し我々日本人の目から見ると、一般に何か鋭く怖ろしく見える、就中俳優であるとか、或は一部の女子とかいふものになると、目の邊へ淡く墨をさして、如何にも凄く見える、で、皆歐羅巴婦人は日本婦人のやうにポッテりとして圓顔のは少くて、一般に鋭く見える、併しその怖ろしい顔をして居る割合には、心は左樣に怖ろしいことは無いやうで、その目の邊へ墨をさして

居つて、帽子が頭から冠さつて居るから、「至で鬼のお化見たやうな顔をして居る人も、話を仕出すと至つて優しい人であつたりするやうなことで、何うも日本の人が見慣れぬから怖ろしく見えるであらうと思ふ、尤も可笑しいのは、年の重つた婦人が誠に派手な服装をすることで、六七十歳ぐらゐの婦人が、頭に藤とか菫とか乃至罌粟などの、紫色をしたり赤い色をして居る立派な花を帽子に飾つて居る、さうして衣服などもピカ〱と光るやうな物を着て、餘程日本人の目からは可笑しく見える、殊に奇なのは、四十以上の人に口鬚が生へて居つて、私の髭よりも餘程濃く生て居つて、それは實に可笑しく見える。

今度は衣服のこと

であるが、衣服は勿論、巴里は世界の流行の模範となる處であつて、男の衣服は倫敦の方が宜いといふ人もあるけれども、婦人服は世界中みな巴里の風を見倣ふのである、それ故に其形の宜いこと、またその仕立方にも念の入れてあることは巴里の着物に限る、當時流行つて居る衣服は餘り派手の態でない、大抵宴會服などを除くの外、通常婦人の着て居る着物は黒地が多い、誠に目立たぬ衣服である、その衣服の作り方も昔の如く、また他の國の如く蒼蠅飾りといふものをクド〱附けないで、誠にサッパリした粋な風俗である、一概に巴里の婦人の着物を華美だといふ人があるけれども、少しも其風俗は華美でないと思ふ、その華美といふのは、宴會服のやうなものをいふか、然もなければ俳優か或一部の女子が着るものを見ていふことである、通常の人の衣服は、その仕立方といひ、又色合といひ、至つておとなしやかである、但し帽子は何れも奇麗な花が飾つてあつたり、それから鳥の剝製などを附けたのもある、之には種々な意匠を凝らして、實に日本の女が頭道具に注意するよりも甚だしく帽子の飾りといふことには意を用ゐて居る、その他持物などでも、餘りキラ〱とした蒼蠅飾り、また金銀で光らしたやうなものは巴里の人は通常用ゐない、餘り人の目に附か

ないやうなものを用うるけれども、巴里の人の持つて居る物は、謂ゆる氣の利いた物を持つて居るのでチヨイとした金物、時計の鎖とか、鐵入とか、蝙蝠傘の柄などゝいふやうなものでも、又縫物編物のやうなものでも、皆意匠が面白くて、謂ゆる美術品の本國だけあつて、なか〳〵工夫のしてある面白い形のものが多い、さういふ所は他の國に優つて居るであらうかと確かに思はれる、一つ奇なるは女の襟巻で、これは臘虎とか又は貂のやうな種類の頭を剝製にしたものを首に卷くのであるが、如何にも獸が首へ喰付いて居るやうで餘程可笑しい、是とても餘り眞面目なマダムなり、又はマドマセール抔は致さぬので、多くは俳優とか或一部の女子とかいふ者の行ることとのやうに見受ける。

それから今度は言葉遣ひであるが、元來佛蘭人の言葉といふものは、咽喉から出て來るやうな語調が多いのであつて、英吉利の言葉は齒に響き、唇の先を餘計に動かすやうな言葉が多い、それで巴里婦人の言葉は、

良い婦人ほど閑雅にして、餘り耳立たない所の、極柔かなる言葉を遣う、で、他の國の人から比べると、餘程品よく我々には聞こえるやうである、また其動作に至つては、歩くからして巴里の婦人は靜かな方である、亞米利加の女子はズン〳〵と馬の駈けるやうに行つて了うけれども、巴里の婦人は左程どうも忙がしさうには歩かないのであるが、併し

その歩き方は外輪で日本の女の内輪に歩くから見ると、餘程お轉婆らしく見える、巴里の婦人は左程靜かに歩くけれども、併し日本の女に比べると餘程迅い、我々は始終先を越されることが多かつた位である、それから

巴里婦人の特色

ともいふべきは、大變に愛嬌のあることで、是は歐羅巴中の人は、支那や日本から見ると、皆愛嬌に富んで居るやうであつて、如何にもさうチヨイとの事

に怒つたり、又人を睨み付けて居つたりするやうなことなく、何時も嬉しさうな顔をして、話かけでもすると、充分の愛嬌を添へて答へもするし、問ひかけもするといふやうな風で、就中巴里の婦人は能く人慣れて居るせいであるか、誠に愛嬌に富んで居つて、氣輕な所が見えるやうである、併しその愛嬌といひ氣輕といふのは、日本の藝妓や遊女のやうな態度とは違つて、それが自然に出て居つて、餘り厭らしいといふ感を起させることはない。それから男女の權利と、それに伴ふ所の禮式等の上に就ては如何であるかといふと、至つて巴里婦人は男に對しては威張らない方である、恐らく世界中で一番女の威張る處は亞米利加であらう、元來歐羅巴人は、女を扶けて其を敬ふといふのが一の習慣である故に、巴里に於ても散歩をする時でも、又は他所の家へ行つた時でも、若くは宴會に臨んだ時でも、女を始終先に立てゝ、さう

して扶けてやり、手を引いたり、又は總ての物の取つて遣つたり、與へたりするやうなことは見えるけれども、併し例へば乘合馬車の中でも、男が坐つて居る所へ婦人が來たとて、故ら立つて席を讓るといふやうな事はしない、又煙草の如きも八ケましい席に於ては勿論不可ないけれども、婦人の近邊で煙草を喫つても、左程女に對して失禮ともしない、餘程他の國から見るといふと女と男は平等の權利を有つて居るやうに見える、殊にこゝに餘程注目すべきは、歐羅巴人のそれらの禮式といふものは多くは人前で外見にする所の禮式らしく思はれるのである、何故といふに、人を訪問したり、散歩をしたり、總て家の外に於て婦人と相携へて行く場合には毎時も女を敬ふ禮式を盡すのであるけれども、一度我家の部屋の戸を押して内へ入れば、全く日本と同じく、男の方が總て女に對つて威張る方である、女は必ず男の機嫌をも取り、また色々細かい所の世話

を爲るのである、家の内と外で大變に權利も差うが如く確かに見える、それで巴里の婦人の家での暮しも、今云ふ通りに家の内にては矢張男が主人たる格であつて、總ての事の命令を婦人に下すのは勿論のこと、婦人は何事に於ても、相談を夫に掛けてからで無ければ事を決行しない、且つッイ其處に在る物を取れとかいふことの如きも、また衣服の始末をせよとか、或はカッヘーを持つて來いとか、マッチを擦れとかいふことの如きも、すべてみな男の方が命令者であつて、女がそれを承はつて忠實に能く働くのである、それから最も感ずべきは、巴里婦人は斯く外面が粹な服裝をして、派手やかに暮して居るやうに見ゆるけれども、その家の生活方または平生の心掛に於ても

質素儉約は甚だしい

もので、例へば、食事の如きも、決つして麵麭の粉でも無汰には捨てない、又芋の皮でも肉の切端でも決して無益にしないやうに心掛け、それから衣服の如きは、其を大事にすることは甚だしいものであつて、平生家の内で着て居る衣服は、汚いといふやうな衣服ではないが、決して良い衣服を着ては居らぬそれで外へ出る時だけ着換るのであつて、その着換へた衣服を脫いでからといふものは、大變に之を丁寧に疊み、又チョイとの汚染でも汚染脫をしたり、それから僅かなる綻でも能く繕ふたり、又ブラシを掛けて塵掃ひをして、おそろしく衣服は丁寧に取扱ふ、それで意外に巴里の婦人の有つて居る

衣服の數は少ない

のであつて、さうして一枚の衣服を長く着るといふのは、この都會の一般の風習である、それから其他家事の經濟向に於ては、如何にも節儉極まるものである、今巴里婦人が如何に節儉であるかといふ事の一例を云へば、その當時の博覽會である、その博覽會は先つ空前の盛大なる博覽會であるから、土地の人でも誰でも度々之を見たいのである、所がその節儉の爲に度々見に行くといふことが出來ない、故に

中等以上の人でも、先づ博覽會は一回より見た人はない位なことであつて、その見に行く樣は何うかと云ふと、その見に行く日は、家內中殘らず打連れて夫婦のものが子供を伴れて、それに尙ほ外の家族をも連れて、さうして大きな籠へ麵麭や葡萄酒へ水を混ぜたものや、又二三の果實だのといふ一日の食料を盡く盛込んで、それを夫婦のものが釣つて往くといふ仕末であるのみならず、さうして博覽會場へ這入る切符は、朝と夕方とは直段が異つて夕方の方は高いから、朝の間に一家族みな食物を携へて、一枚の切符で入つて了う、そして終日博覽會を見て、場內の木陰とか或は建物の裏手の所とかへ坐を占めて、その籠の中のものを開いて辨當をつかふのである、所が、博覽會の中には食事店は無いかといふに到る處に如何なる物でもある、日本で云へば立食ひすべきやうな物もあるし、又菓子や麵麭の類を賣つて居る處もある、けれども此立食ひや菓子麵麭すら錢を出すのは無駄として、その携へて來た所の辨當で濟ませる、それで夕刻まで博覽會を見て、夕刻にも同じく其殘りの食物で濟ませるのである、それから夕刻になるといふと、大層疲れて來るから、博覽會の中の貸椅子を借りるのである、是は公園にも備へてあることであるが、この貸椅子は二文出すのである、二文出して腰を掛ける、その貸椅子を大人だけが借りて、子供は草の上へ坐らせて、さうして一度椅子を占めた以上は、人に取られぬやうにと思うて、何時までも動かないでジツとして居る、尤も此椅子の据付けられてある處は、シヤトードーといふ博覽會の式場のある前などであつて、夜分になると盛んに種々なる電氣燈が美しく點けられ、人の往來するのを見るのには最も宜い場處であるから、其處へ陣取つて、仕舞まで夜の景色を眺めて、夜の十時乃至十一時になつてから皈るといふ風である、斯く博覽會を觀るに就けても、家內中一日に僅かなる費用で博覽會見物を濟ませて了うといふやうな節儉な遣方である、況んや巴里を少し離れたる田舍などへ

往つて見ると、その食べて居るもの、着て居るものは、實に粗末極まつたもので、滅多に肉などは食べない、又女の衣服の如きも、五年とか七年とかの間は、三枚なら三枚の衣服を順番に洗濯して着て居るのであつて、それで何か祝の日とか祭りの日とかいふ時には、襟だけ新らしいものと換へるので、衣服は依然古いものを用ゐて居る、それで今日は晴衣を着たといふのは、襟だけをいふのであつて、衣服をいふのではない、斯くの如く儉約である、實に日本の近代は、百姓などまで西陣織の帶を締めなければならぬとか、又絹張の傘を持たなければならぬとかいふやうに驕つて來たが、大變な違である、さうして巴里人なり佛蘭西一體の人は、生計が困難で其樣にして居るかといふと、幾らか生計も困難には違ひないのであるけれども、田舍家といへども必ず千法とか、それより以上一萬法とかいふものを、水呑百姓のやうな人でも儲蓄して居らぬ者はない程である實に是は能く日本なども考へなければならぬ事であると思ふ。

尙ほ一つ感服なのは勉強忍耐の强いことである、それで公園などへ子供を遊ばせに往つて居る所の子守でも

始終手に仕事を離す時はない

子供を遊ばす車の緣に、一つの針箱やうなものが取付けてあつて、それに細工物を容れて居る、それで子供を遊ばせに行つて、その看護をしながら始終縫物をして居るとか、又は編物とかを行つて居る、甚だしきは乘合馬車の中でも縫物などを行つて居る婦人は幾らもある、巴里の婦人が只遊んで居るのを殆んど見たことは無い位である、最も

巴里は夜の國で

夜分は遲くまで起きて居る處であるが、大抵夕食後には、女は手仕事をするか、然もなければ帳簿を附けるとか、又は手紙を書くとか、夜業をして居らぬ者は勿論ない、又良い婦人でも近頃は皆炊事を大變に骨を折つて、さうして女ばかりに働かせずに掃除

もする、料理の仕方に付いて世話を燒き、自ら手を下すは勿論のこと、誠に克く働くのである、且つ其力の强いことはなか〳〵大したもので、重い物を動かすのは、マアあのお孃さんがと思ふやうな婦人でも、何の事なく輕々と取扱つて、さうして男の行るべきやうな仕事も、ズン〳〵その女が行る、それに就ては餘程凡ての力も强し、また能く忍耐するだけの身体は元來有つて居るからして出來るやうに思へるが、誠に勤勉なる習慣を持つて居る、總て巴里人を通常贅澤で、大變派手であると見る人が多いやうであるが、如何にも一通り巴里を見物して皈つた人は、成程爾う思へる譯である、それは實に巴里といふ所は　日本の京都と誠に能く似て居つて、婦人の服裝を美しくして居るのと、姿が何となく優しいから爾う見えるのである、それと巴里なる處は歐羅巴中の人が遊びに行く處の都であつてこれも丁度日本の京都の如き所である、それ故に、

芝居とか或は寄席とか、その他酒宴の興を揚くる一部の女子とかいふものは勿論、世界の客を招ぐ爲に容貌の美を盡し衣服の美を盡し、また言葉の美を盡し、愛嬌の上の美を盡して、而して人を招がんと欲して居るから、それは實に我々の目から見ると天國へでも行つたか、龍宮城へでも行つたやうに總ての婦人が見えるのである、成程爾う見えるけれども、是は謂ゆる客を呼んで錢を儲ける爲の一の假裝であつて、その實巴里の婦人といふものは、左程までに贅澤なものでは無い、他の國の人から見ると、恐らく内面に一層の節儉の德を備へて居るのであると思はるゝに相違ない、私も實は左樣見受けたのであるこれは巴里へ永く住んだ人の如きは能く知つて居ることで、私が特に說を爲すのではない。

◎女子大學の講義錄　日本女子大學櫻楓會の事業として、來春四月より女子大學講義錄を發行するの計畫略成りたる由、

障子張換への方法

生方 龔

暑い〳〵といふ中に、何時しか土用三伏の候も過ぎて、庭に梧桐の一葉の落つるのに秋を知り初てから最早一ケ月も經つと同時に、單衣の上に袢纏を襲ね、それでも寒いといふので、誰が催促するでも無ければ、又勸めるでも無いけれども手は自ら簞笥の錠を開けて袷を取出すといふ季節となつたので、これも誰とて責めるものゝある譯では無いが、軒の青簾は何時しか取去られ、葭簀張の夏



障子は秋の風と共に取拂はれて、紙障子の張換へに忙しき時節となつたので、その張換へにも、松下禪尼の故智に倣つて丁寧に一小間二小間と切張をさせるゝ方もあるが、勝手元は兎も角として、座敷の障子だけは見ツとも無いといふので、全部を張換へらるゝ家もある、そこで其張替へらるゝに先だちて

舊い紙を剝ぐ手段

として、或は井戸の端へ持つて行つて水を注けたり又は河の中に浸けて置いて剝がるゝのであるが、その剝ぐ時は、大抵は細い竹の棒を一端に横へ、これ

に剝ぐべき紙の一端を卷き附け、そして漸次に總体を剝ぎ去るのが通例である、併し之では容易にその卷附けたる紙を拔取ることが出來ない、それ故に多くは何本にも卷付けて、さうして之が乾るまで拋つて置く、併し幾卷も卷付けてあるから容易に乾かない、と云つて無理に棒を拔去らうとすれば紙が滅茶滅茶になつて了う、固より障子の反古紙であるから何うでも宜いやうなもの丶、それでは物の冥加が盡る、そこで

廢物を利用する

にしても、僅かなことで大層な損得がある、今この障子の古紙を剝ぐにしても、竹や其他の細い棒の類を用うるよりも

稻藁の稈心

を使用さへすれば、棒切れのやうに澤山卷かうが、又は少なく卷かうが隨意であるばかりでなく、之を拔取るにも造作がない、從つて障子の一枚々々を別々に卷取つて行くにも至極簡便である、且つ爾うして置けば古紙の乾きも早いのみならず、屑といふもの丶出る憂がない、それに大抵この剝取つた紙は無益らなく費消されて了うのであるが、右に述べたやうにして剝取つた紙は、左程粘氣が無くなるといふ事も無ければ、又纖維が衰弱するといふ事も無いので、澁紙の心などは、新聞紙などで張るよりも此紙の方が遙か優つて居るのである

之は決して空談で無い

實際予が多年試した事實なのである、實は餘り吝嗇な咄のやうだが、家政の整理などゝいふ事の要は斯樣な所にあるのである。

それから能く乾して張るのであるが、その張方は後に委しく述べるとして、先づそれより前に

紙質の吟味

の事に就て話して置く必要があらうと思ふ、これは言ふまでも無く一般に美濃紙を用うるのであるが、近年は障子紙と云つて、特に長い俗にシチブと稱するものが造られ、且つそれが續いたものを市中に販

賣せられて居るが、その原質は矢張り美濃である、併し之にも上中下種々の品質があるが、張つて保存が良く、且つ室内の明るいのは俗に生漉といふので、その中でも漉斑の無い、色の白い薄めなのが上等としてある、この外單に丈夫一式といふ障子紙もあるが、それは紙質が厚くて、目が締つて色が黒いので、何うも張つてから室内が薄暗いから、同じ障子でも、南向きの日當りの良い處に閉てるもの、外は賞美が出來ない、併し丈夫のことは受合で、少し位物が當つても破れるなどゝいふ心配は無いけれども、以上の缺點があるから客間などには避ける方が宜い。

序でながら障子の効用を少し咄さう、西洋間では紙障子を用うるといふ事は無いが、日本室では重に紙障子で、中には近年中硝子といふ造りが流行つて來たが、その咄は後廻しとして、一体紙障子と硝子障子では、孰れか良からうかと云ふに、それも目指す要點によるので、先づ衛生の點から云へば

紙障子は硝子障子に優る

ことは萬々である、併し光線の點から云ふときは反對となるのであるから、言はゞ一利一害といふやうなものであるが、その利害を比較して孰れか優れるやといへば、何うしても紙障子の方が貫目が重いのである、前にも云ふ如く、成程ガラス障子は光線を多く取るといふ點では優つて居るに相違ないが、随分紙障子でも、古くなつては不可ないが、新らしい張立ての當座はガラス障子に負けない明るいのであるが、少し日が經つと段々に燻つて來て、ガラスのやうにチョイト塵芥を拭取るといふ譯には行かないこれは確かに紙障子の缺點であるが、併しガラス障子は何うしても目が濃かいから、紙障子のやうに空氣を流通させるといふ事は出來ない。

元來我々人類といふものは、日々生活して行くに就ては、固より光線も大切であるが、併し空氣ほどでは無い、たとひ空氣があつたにしても、それが腐敗すれば直ちに害を我々の身体に及ぼすのである、それ故にガラス障子を閉切つた中に居るさ、何ぞな

く何時か厭な氣分になるが、紙障子では左樣云ふことは無い、それは紙の目から始終空氣が新陳代謝するからである、それに紙障子は斯く始終空氣が流通交換するが爲に、ガラス障子では閉切つ置けないといふ位の暑さでも左程では無い、又ガラス障子では、閉切つては困るし、去りとて開けて置けないといふやうな場合でも、紙障子なら閉つて置いても差支ない、それに近年は前にも述べた如く、光線の不足は中ガラスで補ふ裝置が出來たから少しも差支ない、此く紙障子はガラス障子に比べて優つて居る、即ち我等の衛生上には最も適して居るのである。

大部話が側路へ外れたが、前の如く紙質を撰んだとすれば、次は

糊のことである

東京などでは重寶なことには、姫糊と云つて米の粉から製した糊を煮て賣つて居るから直ぐ間には合うが、障子張に用うるものは

生麩糊に限る

この生麩糊といふのは小麥から取つたもので、初め煮る前に、障子の數に由つて適度の分量を鍋に入れ、次で水を注して凡そ十分乃至十五分間ぐらゐ其儘に靜置し、それより火に掛け、絶えずマナ箸やうなもので攪拌し、その色が葛餅のやうになれば熟えたのであるが、尙ほそれを試すには

豫め火箸を二三分間燒き

これを手早に糊に觸れて取上げ、之に糊の附かざる時は熟したるものとす、尤も此糊は少し硬目に煮て置く方が宜い、而して大抵世間では此糊を緩めるのに、先づ皿か盃のやうなものゝ中に入れ、之に水か湯を注して溶くのであるが、これでは何うしてもツブ〳〵の塊が出來たがる、依つて之は溶かす前に一度裏漉へ掛けさへすれば其樣いふことは無い、併し裏漉の無い時は擂鉢で摺つても可い、さうさへすればツブ〳〵の出來るものではない、突然盃や皿の中へ硬い糊を取つて、それをゴシ〳〵刷毛で溶くなどは、第一刷毛が堪つたものでない、或人は糊は丸い

塗盆が刷毛捌が自由で可いと云はれたが、之は謂ゆる畳水練で、御自身に刷毛を使つたことの無い方であらうと思はれる、予が實験によれば、浅い四角といふよりは少し細長い格好をしたものゝ方が宜い、併し止むなくんは塗盆でも皿でも構はない、而して糊の溶き加減は、刷毛に附けてポタリ〳〵と垂れる位の程度なれば宜しい、餘り薄いのも又濃いのも、張上りの出來榮に影響するものであるから、其所は各自に工夫せねばならぬ。

サテいよ〳〵紙を張るの段になつたのであるが、實は二人で張れば之に越したことは無いのであるけれども、時としては爾う注文通りにばかりには行かない、その時は一人でも張らなければならぬ、斯ういふ場合には、障子を倒さに立掛けて置いて、程良く糊を着けたる後、紙の裏を外へ出しその巻終りの一端を曲らぬやうに、障子の親骨にあるキツクミの處にあて、その他孰れも見當の歪まぬやうに擬がつて、徐々に紙を横に轉がして他の一端に至つたならば、そこで鋭利なる小刀を以て、是もまた歪まぬやうに切離し、それより四指の脊にて軽く其中央となるべき骨の上を、他の一端より一端に至るまで押しならし、次に縦骨の中央なるものを上より下に向つて前の如くし、漸次左右に及ぼすのである、併し次に糊を附ける時は、既に前に紙の張られたる部分は最後に塗けるやうにしなければ不可ぬ何故といふに、若し其所へ先に塗けるやうなことがあると、張るまでに紙がフヤケテ爛れるやうになつて了うからである、さうして約そ四五段も張つて行くと、手順が悪くなるから、今度は障子を上下にして張つて行くべきである。

それで張り了つたならば、人によりては宜くないと云ふが、アツサリと狭霧を吹いて置く方が可い、尤も障子を張るのは、餘り快晴で少し風でもある日には、殊に糊の乾きが速いものであるから、何方かといへば晴天の日より曇つた日の方が宜しい、又暴

つた日よりも雨天の方が宜しいといふものは、紙に濕りが來て居るからで、この濕りが來て居れば、多少それが爲に紙に伸が來て居るので、乾いてから狂が少ないからである、併しそれには餘程糊の延し方に關係する、それから此

障子張に最も忌むべき事が一つある、それは即ち上の小間と下の小間とで繼目の重なることで、これは餘り見場の宜くないものであるから、客間とか又は人の目に附易い場處には氣を注けなければならぬ、時としては紙が一寸や二寸は損でも避けるが宜しい。

・そこで障子を張るには一体一本の障子に何の位の紙數を要するものであるかといふに、元來障子といふものゝ數へ方は、

二本の障子を合せて一間といふのが通例となつて居るので、四本の障子ならば美濃紙一帖、即ち四十八枚で足りるのである、さすれば一本に丁度十二枚の割合であるから、何本あ

らうとも之で割出すことが出來るのであるが、併し是は通常本間と稱する障子の割出し方であるから、當時東京邊で流行る九尺二間に四本といふ、俗に素六といふ障子や、昔から御殿や寺院などで用うる經間といふ寸法となるとそれ〳〵異うのである。

終りにチヨツト斷つて置くが、これは經師屋などいふ商買人の事を標準としたのではない、日常普通の家庭で容易く行はるべき事を述べたのであるから、讀者は其心持で見て貰ひたい。

誤解されたる女子の三從

文學士　雜賀　健

昔貝原益軒先生が一たび女子の三從、即ち幼にしては親に從ひ、嫁しては夫に從ひ、老いては子に從ふのが女子の履むべく守るべき道であると説かれてからといふものは、今日と異つて女子を一個の機械視して居つた時代であるから、或一部の男子の如き

は、謂ゆる鬼に金棒、渡りに船といふ調子で、之を籍りて以て女子を馭するの唯一法と心得て、少しく氣概のある女子が何か云はうとすると、直ちに此三從説を振廻して屈伏することに努め、甚しきは之を以て女子を虐たげる行動さへも少なからぬのであつた、それが久しき間の習ひ性となつて今も尚ほ此誤解を以て女子を制せんと試むる男子の種が切れないやうに見受けるが、去りとは女子の身に取りて迷惑千萬の至りであるのみならず、地下に於ける益軒先生は其説の誣ひられたることを遺憾に思つて居らるゝであらうと、實は察しつゝあるのである。



益軒先生が在世の時代と今日では、全きり時勢の異うのは言ふまでも無いが、先生が在世の當時とて、成程女子の教育といふ點に就いては、殆んど月と鼈と差うのであるが、併しある僻目の人の見たやうに、何も女子を有るか無しにしたといふのでは無い、却つて或一面に於ては、今日よりも遙か男子が女子を優遇もし、又敬意を拂つたも

のである、それに其頃に於ける一般國民の狀態は如何かといふと、諸姉も知らるゝが如く、士農工商といふ風に國民の階級が四段に劃然と分れて居つて、止んごと無き御方より公卿諸大名といふ方々は別として、それらを除きたる外の國民中では、農工商のものは士分のものには頭が上らなかつたので、その代りイザと云へば直に出でゝ、君の馬前に於て潔く一命を捧げなければならぬものとして平素訓練されてあるので、云はゞ武士たるものゝ一身は、自分の身体で實は自分のもので無いといふやうな工合になつて居る、又武士以下の農工商とても、平素土着して銘々の業務に從事して居るので、實は安氣のやうであるけれども、これとても皆それ〴〵異つた領主を戴いて居るのであるから、一朝事あつた節に、その領主から人夫などに引上げらるれば否といふことは出來ない、是非とも召に應じなければならぬといふ習慣上の掟があつたのである。

すべて男子の側は斯ういふ工合であるから、實は寸時も安心が出來ないといふ有樣と云はなければならぬ、若しも一朝事あつて男子が外に出た時は、後に留まるものは誰であるかといふに、老癈したる男姑や、或は頑是なき小兒等である、それを扶養し哺育して行くものは一家の主婦たる者を除いて外には無い、乃で其將來一家の主婦たるべき者の信念を確立せしめんが爲に、實は此女子の三從說を講ぜられたものであらうと、實は餘り穿ち過ぎた話かも知らないが、自分は爾う信じて居る。

それに益軒先生だからとて、儒教一點張といふのでは無く、克く我邦の國躰等の事も嚙み碎いて居られ、且つ男女の性情等の點に就ても其長所短所までも承知せらるゝのみならず、この兩性の天分をも攻究せられてあるのであるから、決して女子にのみ絕對的に服從を强ひられる氣遣ひは無いと思ふ、謂ゆる善意のものであるに相違ない、之に反して男子の如きは、士農工商に關はらず、絕對的に領主から服從を强ひられて居つたの

である、その實例は枚擧に遑あらずで、一班は稗史小説や演劇講談などでも諸姉が承知して居らるゝであらう、それ故に男子の方面は先生が左程喧ましく云はれずとも、已に業に以前から行渡つて居るのであるが、何うも女子の方面は閑過せられて居る所より、成るべく約めて判り易いやうに斯く先生が示されたものと考へる。

倘し之が女子に對する絶對的のものであるとすれば、甚だ意味が薄弱なるものとなる、何せなれば、幼にして親に從ひ、老いて子に從ふことは男女共に同じであらうと思ふ、一躰理屈より何より、幼者が親を慕ひ之に從ふことは先天的の約束で、他より從へといはなくとも、自づと從つて行くものである、それから老いては子に從ふといふ事も、西洋の如く家庭が個人本位であつたならばイザ知らず、吾邦の如き、千古以來家族本位で成立つた家庭では、扶養するなと云つても、其子たる者は老者を扶養すべきものである、之が子たる者の践むべき道で、名けて孝といふものであるといふ事は、殆んど遺傳性になつて居るのである、これは男女に依つて異なるものでは無い、即ち通有性のものである、然れば女子にのみ對する絶對的のものとは云ふことが出來ない、依つて善意的のものであると解釋するのが穏當であらうと考へる。

次に嫁しては夫に從ふといふ事であるが、女子が嫁して男子たる夫に從はなければならぬとすれば、男子たる夫も亦女子に從はなければならぬ道理であらねばならぬ、チヨツト是は突飛な説のやうに考へられるが、決して爾うでない、といふものは、夫たる男子と妻たる女子とは、何も主從の關係の如きものでは無い、

謂ゆる一心同躰

のもので、即ち百年の苦樂を共に與にすべき密着なる連鎖を以て繋がれたるものであるから、妻たる者が夫に從がはなければならなければ、夫たる者も亦妻たる者に從はなければならぬといふのは自然の道

理である、併し世間に往々ある、亭主を臀に敷くとか、又は嚊天下とかいふ事を奬めるのでは無い、何處までも女は女らしく、天性の美德たる柔順を以て夫に事へなければならぬことは言ふまでも無いのである、萬一夫たる者が、嫁しては夫に從ふべき者であると云つて、無闇に一も二も無くガミ〳〵言つたならば、妻たる者も自然面白くないといふやうな心持が出て來るから、如何しても家庭が圓滿に治まる氣遣ひはない、之に反して、夫たる者は妻を愛し、妻たる者は夫を敬するといふやうに、謂ゆる夫婦の間に秩序といふものが整つて居さへすれば、家庭を殊更に和樂にしやうと焦らないでも、毎時も春風の駘蕩たるが如き家庭を成して行くことが出來るのである、恐らく益軒先生の意見も此に歸着するのであらうと考へる。

近頃大部西洋化した人の口吻を聞くに、何うも吾國では女子を粗畧にする、歐米のやうに大切にして地位を高めて遣らなければ不可ぬなどゝ呶號せらるゝが、歐米とても或人の云ふやうに、左まで男子が女子に屈服して居るのでは無い、即ち女子といふものは性來纎弱いものであれば、堅剛たる男子は之を劬はつて遣らなければならぬといふ眞意から懇切にして遣るので、是は吾邦とても少しも變つたことは無い、成程或人のいふやうに、歐米人のやうに外を歩くに手を組合うなどいふ事は無い、それは從來永き間の吾國の習慣として俄かに其を破つてまで、爾ういふことを爲ないまでゝある、縱ひ改むべきものと知りつゝも、永い間の風俗習慣といふものは、なか〳〵早急に更めらるゝものでは無い、何うしても漸を以て爲なければ不可ぬ、併ながら殊更に改めなくとも左程差支の無い事なれば、强て之を改めてまで他の國に媚るの必要はあるまいかと考へる。

兎に角益軒先生の意見は、餘り予が曲解に過ぎたか知れないが、決して臆測ではあるまいと確く信ずる、即ち絕對的に女子にのみ服從を强ふるものでは無くして、相對的の善意に出でたもので、決して或

一部の男子が考へるやうに、唯一の女子制御の條文と解すべきものではあるまい、若しも何處までも爾うとすれば、それは餘りに女子を侮辱したるが上に全く女子の天分を解するの明の無いものであるといふ事を自ら表白するに過ぎないのである。

試驗の爲に勉强すべからず

東洋女學校主幹
文學士　村上龍英

今更に斯樣な題を發したならば、如何にも迂濶千萬、世間を知らないにも程があるといふ竹篦返しを喰ふのは覺悟の前であるが、それ位の事に恐れて居ては何も言ふことは出來ない、且つ知つて言はざるは何うも奥齒に物の挾まつたやうで、溜飲が下らないから、思ひ付いた事だけは言つて見やうと思ふのであるが、若しも寸毫たりとも諸姉を益する事があれば幸甚である。

何うも現今學校へ通ふ方を見るに、之は女子ばかりでは無い、男子でも爾うである、もと〳〵學問を研究し、技術を修めるのは何が爲かと云へば、言ふまでも無く、之を小にしては身を立て家を齊へるが爲であらうし、大にしては國家に益せんが爲であらうと考へる、然ればこそ男子は、政治に法律に、はた敎育に工藝といふやうに、各自目指すところの學術を修めると同樣に、彼の特に專門に研究する人は別として、まづ普通一般の女子達は、小學校を卒てから其以上の學校に入るといふものは、ツマリ將來家政を整理し、子女を敎養しなければならぬといふ大役を有つて居るのであるから、それを果すに必要なる學問なり、又は技藝なりを習はれるに相違ない然るに其所に氣が附かないやうに思はれる、尤も高等女學校の一二學年程度の者は尙だしもとして、それ以上のものでも、兎角それらの點を疎外にして居られはすまいかといふ節がある、聞く所によれば、古への學者は人の爲にせられたといふ事を耳にして居るが、それは又如何いふ理由かといふに、乃ち最

初自分で學問なり、技藝なりを修めるのは、その學んだ所のものを以て、將來世の人達を敎導きて、而して約まるところは國の爲、家の爲にしたいといふ心掛けで修業せられたといふことであるが、それが中世になると、最早餘程その調子が變つて來て、自分獨りで樂しむが爲に、學問や藝術を修められたと云ふことである、併しまだ自分獨りで樂しむといふ間は宜い、固より國家に取つては少しも益する所はない、その換り又毒にも爲らないのであるから好いが、だん／＼世の變遷するに從つて、學問や技藝を修める仕方も變つて來て、當今では殆んど趣を異にして居る、まづ大抵は試驗の爲に勉强する、尤も試驗制度の弊は予とても認めないではないけれども、これも國家の制度であつて見れば據ろない、如何しても規定の試驗を通過しなければ其學校を卒業することが出來ない、卒業することが出來なければ一人前の資格が着かない、一人前の資格が無いとすれば相當の處に嫁づくことが出來ないといふやうに將來倒しになつて來るから、否でも應でも試驗を受けなければならぬ、その試驗を受けるにしては、何うか誰よりも彼よりも優等の成績が得たいものである、といふ心掛けは立派であるが、サテその手許に切込んで見ると、たゞ優等の成績を得て卒業して、朋友や世間の人に誇りたいといふ一念だけで、殆んど其間に自己といふものゝ存在を遺れて居る、それでは折角學問や藝術を修めた甲斐が無からうと思ふ、何故爾う云ふかといへば、世間多くの女子を見るに、學校へ通つて居る間は、その試驗に落第してはならぬ、卒業しなければ女子の一分が立たないといふやうに身を入れて、明けても暮ても其に頭腦を突込んで居るから、比較的在學中は何角よく覺えて居るけれども、卒業して足一たび校門を出た當座は夫程でも無いが、一年と經ち二年を過るに從つて、その中お嫁にでも往くといふと、折角高い月謝を拂ひ、貴重な時日を費して覺えた學問は勿論、藝術等に至るまで、全然頭腦から去つて了つて、チヨツト弟や妹

に何か歷史とか地理とかに就て聞かれても、直ちに之に答へ得るものは殆んど稀で、弟や妹などか其は斯うである、彼はアーであると說くのを聞いて、其樣なことがありましたかチーといふやうな者が決して尠くない、それと云ふが、在學中單に試驗の怖さに追はれて勉强したからである。

固より學問も普通一通りだけは學ばなければならず、藝術も女子の嗜みとしての裁縫を初め、その他のものも修めなければならぬが、日を經るに從つて夫等を忘れるとありては、折角囊の日修めたことは無意味になつて了うのであるから、已に業に校門を出たものは、成るべく餘暇を利用して溫習し、尙ほ在學中の人々は、試驗の爲にしないで、自己の爲に勉强するやうにして貰いたい、これは畢竟自己の爲とは云ひながら、約まる所は家の爲國の爲となるのである。

風の音やめばまた打つきぬたかな

夫婦觀（其の二）

千勝義重

△單に夫婦觀と謂つて了へば、一寸面白さうな標題だ位に思はれるけれども、眞に其表裡を觀察すると云ふ事になると、益々範圍が廣くなつて簡單に述べ盡すことは甚だ至難しい、自分の眼に映じた限りを述べ、自分の胸底に湧いて來る感想を語るだけでも容易でないから困る、のみならず、筆が心のまゝに辷らぬので、今は聊かこの觀察を吐露するに躊躇せられるのであるが、まづ／＼取留めもなき漫言よと思召を願つて、淺薄な自分の觀察やら感想やらを述べて見ることにしやう。

△立返つて結婚の成立から見て行くと、前にも謂うた通り樣々あるけれど、何うせ、黃金力に依つて結び付けられた結婚や、勝手氣儘な自由結婚などに、終を全うする者は少いのであるから、今は東洋流の關涉結婚より成立した夫婦を觀る事にしやう、即ち

親の選定に與かつた夫婦の方面を觀るのである。

△斯うなると、世間の親と云ふ者は何様ものであらうか、これも一寸謂つて置く必要がある、謂う迄もなく、各階級を通じては様々な親があるであらう、けれども『這へば立て立てば歩めと敎へた口で今更轉べ』と謂ふ様な無理な親は、自分のお話には數へぬ、又、子女を敎養することは將來の報酬を望むものであると謂つた様な親が、下流社會に幾らもある、例へば、眉目よい娘を持て、左團扇とか、玉の輿とか、其將來を想像し、飯の種を嚙んで含める様な、非道な慾を持つて居る親である、が、これもお話にはならぬ、と謂うて、親と親との約束ならば、などゝ云ふ様に其子女を泣かせる親も感服はしないが、人の親として其子女を愛すると云ふ情に至つては、千人が千人同じ事ではあるまいか、加之に、子女を知ると云ふ點に於ては親を措いて他に無い、のみならず、世間といふものに對しては既に深い經驗を持つて居らるゝものであるから如何に自由な世であらうとも、其子女の結婚に就て親を度外に措くといふことは出來ぬ筈である、其所で自分は、關渉に伴ふ弊害は多少あるとしても、之を世の常として觀るつもりなのである。

△さて親として其子女の將來を安樂ならしめやうと祈らぬ者はないが、其嫁を選み、其婿を選むに當つて、果して何を標的とするであらう、當人を望むだらうか、財產を的にするだらうか、何うも自分の見る所では財產を專一と爲はせぬかと思はれる、彼程の財產があれば善いではないか、よしや係累はあつても、兄弟だつて何時迄家に居る者ではなし、親御もあの年、最早前途の見えて居ること、まア辛棒するさ、嫁だつても彼なら我慢頃、婿だつても彼なら普通、と云つた様な親が世間に多くはなからうか、次には係累を見る人だ、財產は無いが第一係累がないから仕合さ、彼なら自分等の遣り様一つで安樂に暮せるではないか、嫁だつても女學校は卒業して居るし、いや、婿だつて會社員ではあるしと云ふ様な、

類である。斯樣な事で結婚して、眞に將來の幸福が得られるであらうか、當然なら、嫁なり婿なり當の人を先づ第一に見ねばならぬのに、さもなくて良緣が結ばれるとすれば、それが眞に良緣と云ふのであるかも知れぬ。

△尤も、緣談と云ふものは、何れの社會、何れの方面にあつても、大抵相應した間に起るものである、例へば、官吏にしても、或は會社員にしても、亦その家庭に育つた子女にしても、あの家庭に育つた者ならば、彼の官吏なら、彼の會社に勤める人ならと云ふ樣に、月下氷人も其つもりで、見當をつけるものであるから。



△併し當人を見ずに、財產や係累をのみ見るといふのは感服しない、たとひ當人が相當の地位にある者としても、若し其人に缺點が多かつたら何うしやう、當人が手に餘る我儘者であつたら何としやう、それこそ、財產の無いよりも、係累のあるよりも、モット辛い目に逢はねばならぬ。といへば、今の世の敎育を受けた者にソンナ者は無いと云ふ人もあるであらう、が、自分の見る所では、たとひ相當の敎育ある女でも、亦たとひ相當な地位にある人でも俄に信ずることは出來まいと思はれる、今の世の人はご隨分我儘であるから—

△翻つて結婚期に於ける人々の感想如何を見たらば何樣なものであらう、女ならば、自分は官吏を夫としたいとか、實業家を夫に持ちたいとか、それで、男らしい應揚な、自分に對しては極めて優しい人とか或は、たとひ官吏であり實業家であつても多少文藝趣味を解する人を求めたいなどゝ想像して見るのが普通であらうか、それとも、人の妻としては如何なる義務を負ふものであるか、將た如何にして其責任を盡すべきであらうなどゝ、嫁がぬ前から、眞面目に考へて居る人が多からうか、人の妻となつて初めて結婚前の考の幼なかつた事を知る人ならば兎も角、彼の想像と此の實際と全く相違して居るが爲めに、煩悶する人が多い世の中とすれば結婚前に於ける女の心と云ふものも推し測るに難くはない。

△男とても同じ事である、女と云ふ者は優しい者であるから、妻があつたら何樣に慰安を得ることであらう、同じ世に處するなら、獨身で無味に過すよりも、妻を迎へて有意の活動を試みるに如ず、などゝ思つて結婚して見ると、豈計らんや、我儘だ、贅澤だ、不從順だ、彼も缺點だが、此も妻たるの資格を缺いて居る、と云つた樣に不滿足な事ばかりなので、遂酒を飮む、夜は歸らず、互に氣まづい世を送つて居ると、云つた樣な者も世には少くない。

△とは云ふものゝ、これはホンのお話である、世の總てが左樣であつたらタマルものではない、唯々彼

の所謂理想なるものと、實際とは必ずしも相副ふものでないといふ話をしたのみである。

さて親の考は考、子女の所謂理想は理想として、然らば、世の結婚と云ふものは如何に成立せらるゝものであらう。

△まあ〳〵何事も宜しい、親の眼鏡に曇はないと押付けられ、當人見合の結果彼の人ならば――となれば玆に一の結婚が成立するので誠に簡單なものである、勿論、其以前に身分や係累に就て大略捜つては置くが、當人同志の意志が果して投合して居るやら、其樣なことは餘り詮索せられぬのが世の常らしい、に依つて之を世間知らずの諸孃に話たら何と思はるゝか知れぬ、如何に親の眼鏡だからとてまた如何に風采が好いからとて、少しも當人同志の精神を知ることもなく、之を夫婦にするとは、夫婦になるとは、何たる事であらうと、驚かるゝであらうか、けれどもこれが世間普通なのであるのみならず、それでも治まりがついて行くのだから不思議である。

△兎も角も偕老の契を結ぶことになると、半年や一年は夢中に過ぎて終ふものである、況して其當座の如きは、異性抱擁の美感に打たれ、丁度樂天國にでも遊ぶかの樣に、全く自己の存在すらも分らぬ位なものである、換言すれば此時は則ち、夫妻相共に其本領を忘却して居る時である、相共に其愛に掩はれ、其樂みに掩はれて、夫たり妻たるの自覺を失なつて居る時なのである。

が、其中に種々な事に遭遇したり、子が出來たりするので、漸次其本分を自覺して來るのであるが、風波の種を蒔くのも、和合の基を開くのも、此結婚當時にあるのである。

△併しながら、中流以下の家庭にあつては、左程夢中になつて居らるゝ者ではない、親がかりの氣樂な境遇にあるとか、有り餘る財產があつて多くの女中を腮で使ひ廻す程の家庭なら知らぬ事、夫に相當な職業があつて、家には老いたる父母もあり、下女も使つて居ると云ふ境遇ならば、夫に對する萬事の世

話は勿論、老父母に奉仕し、下女に臨むなど、結婚當時から種々の苦勞あるべきが當然であるから、世間馴れずに育つた人や、結婚は人生の花であるなどゝ夢みて居た人の眼が覺める時で、或は自分の所謂理想と此現實が相副はぬ爲に、失望したり、不平を起したり、世を怨んだり、結局家庭の平和を破る樣な事になるのである。

△男の方は自ら趣を異にするが、女の方になると、子供の時から緣付くまで、學校やら遊藝の稽古やらに追はれつゝ、衣裝や化粧に心を碎くまでも、實際其の苦勞の味を嘗めぬのであるのみならず、其所謂理想も前に謂うた通りであるから、相當の家庭に嫁いた當座の如きは、琴三絃や、茶の湯活花等に其日其日を樂しく過し得るだらう、さなくとも偕老の契を結んだ人の愛に浴して、嬉しい月日をのみ送ることが出來るのであらう、などゝ思ふのであらうけれども、實際に於ては決して其樣に安樂なものでは無い、よしや夫と二人暮しの、下女を使つて家庭を作るとしても、呑氣に過し得るものでは無い、であるから藝と云ふても、琴三絃などの遊藝よりは實用的手藝の方が必要であると氣付いて來ると同時に萬事學んだ樣に簡便に容易に行はれ難いと云ふ事をも知つて來て、人の妻たる本分を自覺するに至るのであるが、此時に當つて餘程辛棒強く氣を持たぬと、自棄を起して我儘になるとか、さらずとも夫の滿足を買ひ得ず、遂に不和合の基を作ると云ふ樣になるのである。

△それから、女は生活的經濟上の智識が無いものであるから、人の妻として内政を司どる樣になると、未婚當時思つた樣に甘く行くものでなく、自心の我儘であるとは知らず、人並に美を飾る事が出來ぬと謂つては、夫を意氣地ない者の樣に思ひ、連立つての物見遊散も心のまゝならぬと云つては、夫の腑甲斐なさを怨めしく思ひ、夫が嵩じて遂に不和合の原因をなさしむると云ふ事も、決してめづらしい話では無い。（未完）



教育小説 十月一日

スーベルトル作　淺岡朴堂譯

十月一日の朝の八時のことで御坐いましたが、自分が書架の上に書籍を陳列して居ります所へ、メールゼチピエーブと申す近處の水菓子屋の女房が、林檎抔を入れた一ッの籠を持つて參つて、室内へ置いて歸りました。これは久しい前から買馴染の水菓子屋で御坐いますので、毎日曜日には屹度何か持つて參ることに成つて居りました、此水菓子屋の爲には自分は好い御客樣の方でしたらうと思つて居りました、併し此店は商買に掛けては不手際で仕入抔も不十分には相違無い、けれども、歳久しく買つて居ましたから、僅かばかりの金錢の爲に、また僅かばかりの品の相違の爲に、他の店から買ひますのも氣の毒、且は此店も困るで有らう抔と思ひまして、何時も此店からばかり水菓子を取つて居りました。畢竟默つて居る間に約束が出來て居る樣なもので御坐いました、自分の慈愛心は彼が爲には一ッの不動産でした。

此日自分の書籍を書架の上に陳列しながら、書架の不足を感じまして居る時に、彼女房が參りましたので

丁度好い機會に來て與れた、御前の良人のミッシェルさんは指物師で有るから、書架を拵へる爲に來て貰ひたいものじやと斯う申したので、彼の女房は直に、宿の人を上げますといつて梯子を下りて行つた、其折には心付がなかつたが書物を陳列して仕舞てから一寸胸に浮んだ、彼の女房の容貌音節抔が例の快活な調子とは違つて居つた、乾度何か心配なことが有つたらしい、彼は可愛想じや女盛りの年から長い間辛苦ばかりして殘酷な試驗に遇つて居る、辛苦も彼位したら十分じやらう、思出してもぞつとする程じやが、自分は百年立つても彼の時のことは忘れられまい、自分が彼を尊敬する樣に成つたのは畢竟あれからじや。

そも自分が此區内に引き越して來た時にみすぼらしい新店で、誰も買ひに行く人も無い水菓子屋を見付けた。却て買ひ手の無い店が目に付いて僅かの物を買つた、元來自分は物を買ふのに極て寂しい店を撰ぶが、寂しい店は好い物が少ない、其上價が安くない、それに自分が何時でも寂しい店を撰んで物を買ふのは、同胞中の貧困者に同情を表するからで、別に自分の利益を圖るのではない、サテ此水菓子屋抔といふものは、兎角に不幸なる孤兒やら寡婦抔が人の憐愍を買ふ爲に形ばかりの店を出すのが多い、必ず憐愍を乞ふ爲めばかりでもないが、其商法で金滿家に成らうといふ人は先づ無い方で、大躰は命繋ぎのみの商であるやうじやであるから金錢と品物の交換といふよりも、客の多數は寧ろ金錢を施して遣る樣な譯じや。

彼のメールゼチ・エーブといふは、其當時に在つては年の若い美しい女だつたが、其花盛りと見える時は早や辛苦する樣に成つた時で、忽ちに萎れて仕舞つた、其良人の指物師は手は利いた人だが、惜いことに酒の神樣を信仰する爲に、丸で性質が變化して仕舞つた、それが爲に活計抔も不如意らしかつた、例へば一週間の内仕事をするのは二日位のもので、其他の時間は先づ酒神の信者仲間と共に御籠りをして家に寄り附かぬといふ風で、一家の暮しは都て女房の働に依賴するといふ次第と思はれた。自分は或日のこと僅かばかり

の買物をする爲に、彼水菓子屋まで出掛けた。すると其店の後ろの方で女の爭つて居る聲を聞き付た、其聲の内に涙に曇つたといふ樣な女房の聲がした、果してゼチビエープで有て、彼が赤坊を抱き居つた、其前にも一人の田舍者らしい女房が居つた、其樣子から察すると、其赤坊を里子に取つて育てた婦人で、其婦人が頻りに赤坊の養育料を出せと言つて迫つて居るに相違ないと認定することが出來た、店の女房は辯解の言葉にも申譯の口實にも最早種切れといふ樣な次第で、只泣き居るばかりで有つた、隣の家からも、女房が出掛けて來て頻りに其田舍の里親をなだめすかして居るらしいが、其里親が中々一酷で承知しない、却て腹を立てゝ脅し文句やら惡口やら益々鋭く言ひ募つて來た、自分は此憐れな爭を聞いたものゝまた中裁にも立ち兼ね、歸るにも歸られず、双方の言ふ所を聞き居つた、其處へ丁度水菓子屋の主人公ミッシエルアロー即ち指物師が歸つて來た。

　彼は仕事塲から歸つて來た風で有つたが、確に歸り掛けに酒屋に入り込んで飮んで來たに相違ない、其財布は頸に掛けられて有るが、其口は開いたなり、閉ぢもせず、中には物の有りさうにも見えない、彼は帽子を手に持ち居つたが、其髮の毛の蓬々として居る樣は、佛蘭西人の祖先のゴール人らしく、且つ久しく櫛の歯の觸つたことも無い樣な風で、其眼球を眼元の方に据ゑて、青白い樣な顔色をして居る樣が、何となく物凄く見えた、其内に迷ふた樣な眼付で方々を見廻はしたが、其足も確とは蹈み止らず、蹣跚として躓きながら店に入つて、女房のゼチビエープを呼んだ。

　女房のゼチビエープは困つて居つた所へ、良人が歸つて來たから嬉しくて堪らない、喜びの聲と共に赤坊を抱いた儘で店へ飛び出して來た、然るに其良人の有樣は、蹈む足さへも定まらぬといふ樣な次第だから、がつかりして其頭を赤坊の頭の上に垂れて、其涙を赤坊の頭の上に濺ぎ懸けつゝ泣くより外に仕方が無かつ

た、此時隣の女房と里親とかゼチビエープの後に續いて店へ現はれて、おかみさんあなた矢張養育料はくださるので御座いませうねと、先づ里親が聲を懸けた、隣の女房は兼て此夫婦の平生のことを知つて居るからゼチビエープには同情を表するが、此ミツシエルアローをば寧ろ惡いと思つて居る、それに今此醉つて歸つて來た有樣が癪に觸るから、ミツシエルを眦に懸けて睨まへながら、ツンとして愚弄する樣な風で、里親に向ひ御前さんおかみさんを苦めるよりも、お金をば旦那から御貰ひなさい、丁度好い所へ歸つて來たからとミツシエルを指さし示した、里親は乾度した風でミツシエルの方を見向いて、ア、これが御親父かへ、マア呆れた、大變ゑらい人ね！自分の子の養育料さへ拂はぬ癖に、御酒をば浴る程飮むなんて。

御酒との一言丈けはミツシエルの耳へも響いたものと見え、ナ、ナントといふた、誰れが酒といつたか、此方樣は酒は飮まぬが燒酎をば飮んだ、酒と聞いては此儘には濟まされぬ、コリヤ山の神、錢を出せイヤ近所の酒店で、此方樣を待ち居る友達が有る、早く行かずばならぬ早く出さぬか。

此亂暴なる言葉はゼチビエーブの耳にも聞こえたには相違ないが、彼は何とも答へず默して居つた、するとミツシエルは蹣跚ながら賣り溜の側にいつて引出しを開け、頻りに錢を搜がす風で有つた。

此時隣家の女房が里親に對して、御前さん彼を御覽なさい。此家の御錢は何處へ出て行きますか、御前さんは御氣の毒な方だが彼の通りの譯ですから、可愛さうに此家の御神さんも御前さんに、どうして御錢をあげられませう。

里親は隣の女房の言ふことを聞きながら、さればとて私に誤りの有るではなし、何の道養育料だけは貰はにやならぬ、是非とも拂うて貰ひますは。

といひつゝ暫し思案顔をして居つたが、田舍女の本性を現はして、これまで赤坊に對して厚く注意したこ

とやら、それが爲には思はぬ費用がどれ丈け懸つた抔と、如何にもくど〳〵しく述べ立てゝ、相手に對しては如何にも尤と思はせ、且つこれを聞き入れずば、如何なることをするか分らぬと恐がらせやうとしたらしい。

そこで女房のゼヂビエーブは若し今金を出さずば、赤坊の身の上にどんな非常なことをされるか分らぬと心配して、其子を抱いたまゝ店の後の一間へ行き自分等の寢る床の内に寢かした樣子で有た。

そこで里親はゼヂビエーブの素振を見て、これは赤坊を匿して、養育料を出さぬ積りだなと、一圖に邪推して火の樣に怒つて、部屋の内に躍り込んだ、間も無く女同志の爭ふ聲と、赤坊の泣き聲とが混同して聞えた。

此時まで賣り溜の引出しを搜して居つた、ミッシエルが電氣に感じた樣な鹽梅に、ぶる〳〵ッと震ひて耳を傾けた。同時に赤坊を抱いた女房と其赤坊を奪ひ取らうとして後から追ひ懸けて來た里親とが店に出かけて來たと思ふ間に、女房は賣溜の側に來てミッシエル此兒をと叫びながら、ミッシエルに身を寄せかけた。



ミッシエルは驚かされて、眠りを覺ました人の樣な風で勃りと起つた。

おれの子ッど、どんな子かと吃りつゝ叫んだ。叫びながら其眼は赤坊の方に向いた。

ミッシエルの良智良能の活動は顔の上に現はれた。

むゝ、ロベール、これがおれの子のロベールか。

と抱かんとしたが足が蹣跚けた。里親はヤッキとなつて、赤坊を自分の手に取らうとして、

御錢だ此子は私の御錢だから私が持つて行きます。此子は私が育てたのだ、此子を育てた物入を御前さん方が私に拂はないとすれば、此子はお前さん方の手に入る筈はない。死んだ子も同樣じや御錢でもよし、此子でもよし、何ちか一ッは是非貰はにや私は此を動きましね！。

ゼチビエーブは子を抱きしめて、此子を持つていんで、如何する積りか知らんと口の内でいつた、其聲を聞いたか聞かぬか、里親は育兒院は棄兒を拾ひ取つて育てたものに其物入りを拂ふ、育兒院の方が眞の親よりも餘程ましじや、オーさうじやさうしやうかと、これもまた小聲でいつた。

此言葉を聞いたゼチビエーブは一層恐れて、赤坊を抱きしめて、壁の方を向いて、里親の方を後にして、丁度牝獅が其兒を保護し居る樣に似て居つた。自分と隣家の女房とは、如何にして仲裁仕樣かと考へつゝ、默つて見て居つた、此時ミッシエルは此に居合せた四人を見廻はして、何が誰やらそれを見分けやうとして居るらしく見えた、其内に女房と小兒とを見定めて莞爾と笑み、また自分と隣の女房とを見て迷ふたらしく見えた。

する内に何事をか思ひ付いたらしく、待て待てッと叫んだ、叫ぶや否や庭に出でゝ水の一ぱい滿ちて居つた、バケッの中へ突然頭を浸し、再三再四浸しては出し、出

しては渡し、殆ど十回餘も同じことを繰り返へした、
此に居合せた人々の眼は、何れもミッシエルの方にのみ向つた、此水浴が彼の醉の幾分を醒ましたか、彼は自分等を一と目見て、直にゼチビエープの方に向ひ、喜ばしさうな顏をした、そして其小兒を抱かふとして、女房の方に近寄りつゝ、ロベールおゝロベール、こりやゼチビエープ、おれにも其兒を貸して呉れ、

ゼチビエープはイヤ〳〵ながら、其子を良人の手に渡しは渡したが、若しや取り落しはせぬかと危ぶんで、上から落るものを受け留る樣な樣子で、掌を上に向けて兩の手を小兒の下に出して居つた。里親は此時またも養育料を渡せと迫り、若し出さぬに於ては裁判所へ訴へるといふ最後の手段を宣告した、

ミッシエルは注意して聞き居つたが、其言葉の終ると同時に、小兒をば女房の手にもどして御金は何程でよいのですかと問うた、

里親はまたくど〳〵と種々の入費を數へて、僅に三十フランですといつた、

ミッシエルは直に衣嚢に手を指した、併し何も有つた樣子では無つた、すると彼は顏を顰めた、其内に何か口の中で呪咀でもする人の樣に、何事かいひ居つたが、急に懷の中へ手を入れて、チヨッキの裏の邊を探つて、忽ち大形の銀時計を出し、これを頭の上に高く指し擧げて、これッこれが御前さんの金じや、これが第一號形の銀時計じやぞ、喜ばしさうに叫んで、私は平生これが渇いた時の用心の梨じやといつて居つた、イヤこれを懷の中に呑んで居つたのは私じや無い、これは此赤坊が呑んで居つた樣なものじや、隣の御神さん何卒これを買つてくださいこれで不足ならば、此外に金の耳輪が有る、こりや女房お前の耳輪を外づして呉れ、それも可愛子の爲めじや異存も有るまい、肉を質に入れる樣な苦しい塲合には、時計も耳輪も家財道

具も何も蚊も賣るより外に道は無い、マア世話に成つた里親には奇麗に勘定を濟まして、其赤坊を寛り寢せるがよからう、女房一寸其子を私に抱かせよ、私が床の中に寢せて見たいといひながら、サモ可愛といふ樣な風をして、女房の手から小兒を抱き取つて、以前とは丸で別の人に成つて、無器用な抱き方をして、そろ〳〵と次の間へ行つて、床の中へ小兒を寢かした、サテ此以後といふものはミッシエルの行狀が全く別人の樣に變化して仕舞つた、酒神信仰の仲間とは交際を絶つて、毎日規則正しく朝から晩まで夫婦共稼ぎといふ譯に成つて、相互に助け合ひ、良人の方は更に其隣りに細工所を設けて、此處に働き居つた、實に二十餘年一日の如くで有つた。

其家内の空氣は實に淸く實に和らかく、實に暖かく、非難すべき所は無つた、殊に夫婦共に其兒の敎育に骨を折つて、彼等の社會に在ては、珍らしい位で有つた。

其兒は學齡以來引續いて學校に通ひ居つた、數學を修め圖書を修め、猶父の業を學んで餘程前から其業を始めた樣にも聞いたが、イヤまだかも知れない、何れ其子が工業を始める爲に、其道具やら其他の準備やらで、尠からぬ金を費したらしい、併し幾何費しても無益の費ではない、蒔いた種に實がついて、收獲時といふ都合に成つて來たのじや、何にせよ其子のロベールは今内には居らぬと見える、自分の彼れに逢はぬのも久しいものじや、一年餘にもなるか知らぬて、

自分は二十餘年前のことから、彼等夫婦のこと其子のことを思ひ出して、心の中に世の中の有樣を味はつて居つた、其間にミッシエルが書架を拵へて與れやうとて、道具を持つて出掛けて來た、そして注文通りの仕事に取り懸つた、自分は此時日記の目錄を書きながら、ミッシエルの容貌に眼を注いだ、

若い時に人並外れて酒色を貪つたり、また老年に成つてからも日々心を勞し、骨を折つたからでゝもあら

う、顔に現はれた皺が、他人より多い樣に思はれ、また髮の毛は殆んど無く、其僅ばかり殘つた毛も眞白だ、脊も弓形にまがり、膝も痩せ、これもまた幾分か曲つて見えた、隨て丈の高サが餘程減じた、其上全躰の上から考へて見ると、何でも落膽して居るらしい、自分が物を問へば、言葉短かに答へる其鹽梅が人と談話することを避ける樣に思はれた、自分の推測では彼は今望を逐んとする愉快の塲合で有るに、何故に落膽の樣が見えるか分らなかつた、兎角する內にミッシエルは鐵鎚を忘れたから、それを持つて來るといつて歸り掛た、自分はミッシエルを引き留めて、彼及其女房の心配するのは、其子のロベールの身の上に關係して居るといふことを聞いた、

　さればといつてロベールが怠惰者に成つたといふ譯でもない、我が儘勝手を働くといふ譯でもない、つまり夫婦ともロベールが孝行者で在れといふことは念に懸けて居つたには相違ない、そしてまた老後に今日までの辛苦の埋め合せに、ひと花咲かせて貰ひたいといふ望も有つたに相違ない、母のゼチビエーブは指折り數へて、何時何日からは家に居つて落付て仕事をするであらうといふことを樂んで居つたらしく、父のミッシエルは可愛子を相手に仕事をするを樂んで居つたらしい、然るにロベールは落付て內に居ない、久しい前ウエルサエユの受負業者と協同して一仕事するから、當分內へは歸られ無いと言ひ出した、そこで夫婦の心では多年の訓誨も多年の希望も空しくなつたと考へた、併しロベールの方では前途の希望を滿たす爲に、即ち新しき位置を以て、他の同業者に讓らない丈けの仕事をするには、先づ大事業の上に關係を持つ樣なことも仕なければならぬとの考を以て仕たことかも知れない、ゼチビエーブが自分の心に思ふ丈けの理屈をならべて、果ては泣の淚でロベールを家に居らせやうとて說諭したことが有るらしい、其時ロベールは母に抱き付いて母をなだめつすかしつして慰めたが、抑留されてはたまらぬと思つたか、また飛び出して仕舞つたと

聞いた、

それから一年餘歸らない、殊に其歸る時をも言はない、兩親は毎月一度づゝ逢ふのみで、また直に分れるといふ譯で、其子の心が分らぬといふて心配して居るらしい、右の次第であるので親のミッシエルは自分は神様から賞めらるべき時に罪せられた、自分は經濟上手で仕事好きな子をほしいと思つたに、神は自分に慾の深い吝嗇な子をくだすつた、自分は伜を成長させた上では、自分の側に置いて自分の若い時を思ひ出して、且つ共に樂しまうと思つて居つた、女房は自分と違つて早く孫が見たいから、嫁を貰はうといふが、自分はそれはいかん、女房を持つと伜の荷が重くなつて苦しくなる、それよりは伜を自分の側に置いて、彼の面白い歌を聞かして貰ふ方がましじや、伜は中々音樂好きだから、伜も喜ぶであらうといつて居つたが、これは夢で有つた、嗚呼つまらない羽が生ると、雛鳥は飛び出して親を顧みもしない、其内父も母も忘れて仕舞ふ、先生親といふものは馬鹿々々しいものですと嘆息して、稍有つて彼はまた、昨日は伜が歸る積りで待つて居つたのです、是非とも歸つて來て、私共夫婦と共に食事をしなければならぬ譯なのですが、歸つて來ませんモウ駄目です、伜めが何か企てゝ何か一仕事仕出かす氣でせうが、私共夫婦は辛苦をする丈けして年は寄る、此上は後世の願より外に仕方は無いです、如何したら好いことやら分らない、アノ馬鹿奴め、イヤ先生二十何年といふ間アノ恩知らずを教育する爲に骨を折り金を費し、父も母も好い思ひもせず、苦んでばかり居つたのは何の爲でせう、先生御察しください、朋友との交際も絶ち、飲みたい酒も飲まず、つまり親甲斐のある親と成つて子供を子供の様に育てたいといふ考ばかりないのでしたイヤ馬鹿な親で有つた、またそればかりではない、自分をば女房も伜も二人ながらひどい目に逢した女房が出來た子が出來たといふので、私の心に前途の希望といふものが出來た、そこで老實な心に成つて、一生懸命に働いた、先生私を一人の百

姓だと思ひなさい、其百姓が自分の爲に麥を植ゑて、一生懸命で稼いで、折角收穫時が來たと思ふと、其麥の穗が空で何の用も成さぬといふたら、可愛さうでは御座いませんかと、聲も哽々に成るまで、話し續けた、凄い樣な眼をして唇を震はして居る樣の氣の毒さ、何とも慰めやうも無つた、暫時二人の間に言葉がとぎれた、するとミツシエルは忘れた鐵槌が氣に成ると見えて、一寸といつて歸つて仕舞つたミツシエルは可愛想な男じや、世の中の人が自分の德義を盡した、德義を盡した丈けの報酬が無く、却て馬鹿を見たといふ樣なはめになると、其德義を盡したことを後悔するのは、これじやこんなことじやといふことを知つた、成程ミツシエルの身の上話しの樣なことに成ると人は、誰でもそんな考を起すものと見





える、イヤ無理もない、

併し德義といふものは、言葉の上から見た樣な單一なものでない、人間の一生の上の重大の關係を以て居るものじや、德義を盡すのは無益じやといふことは無いばかりで無く、最大必要なことじや、德義を盡したからとて、其報酬が其人の身に思ふ通りに報つて來るものではないが、何の道報酬は來るに相違ない、併し報酬を思ふて德義を行ふべきものでは無い、元來世の中の總ての事柄には道理といふものと、其結果といふものが有る、德義を行ふ上に於ても、矢張此普通の法は外れない、サテ世の中に德義を行ふ人に不仕合なものが有る、實際經驗上相違ない事で有るが、經驗上其德義を行うた人は、世人からは必尊敬すべき人として重んぜられる、但し德義を行うて直接の報酬若くは目に見える報酬を望む人からこそ、德義を行ふことはつまらぬといふ觀念が起るが、これは眞誠の德義家の觀念では無い、畢竟我々の生涯は、德義を行へば何の道思はざる褒美を受る樣に仕組んで有る、小說の樣なものじや、良心の平和、滿足または名譽杯いふものは、其德義を行ふた人の眼に何にとも思はぬけれども、若し良心の平和なく自家の滿足することも無く名譽もなく、此世に在るとして考へて見たならば、如何であらう、例へば良心が始終痛苦を感じ、何事に就ても不滿足で耻ぢ入る樣なことばかり有り、または不評判で人から後指をさゝれる樣なことばかり有つたら如何であらう、斯ういふ所から見ると、德義を行つた爲に一ツも此痛苦を感じないとすれば、德義といふものは、實に貴い實に好い此上もない御寶物ではあるまいか、自分は一人でこんなことを考へて居つた所へ、ミッシエルが歸つて來た、直に仕事を始めた、矢張今日も其子のロベールは家に歸らぬらしい、ミッシエルは細工を仕ながら、彼の希望と彼の失望と悲む杯話して、獨り憤慨し居る樣子で有つた、彼は繰り返へし〳〵同じことを話して、其不仕合を哀訴した、彼は其子のロベールの助力で以て、兎やせん角やせんと企たことを一

々述て自分に話し、また嘆息しつゝ、私の大屋さんは三十年來の稼ぎで、大夫金持に成つて、此頃田舍の別莊へ隱居しやうといふのですが、經濟上手な人ですが運も好いのですな、私抔はそれとは裏表で運が惡くて、此家を讓り受るに就いては、二千フランを拂はねばならぬことに成つて居ますが、暫く待て戴かねばなりませぬですから、悴の奴が此へ歸つて與れば、私も大助かりといふもので、彼が居れば私の工塲を繁昌させることは譯が無いです、學術も出來、また人並勝れて働きもあり、細工の上にも新發明の工夫とか、改良の意見とか相應の見込をも持つて居つて、中々傑い者です、私が兼て悴の圖案の内に階段の構造方を工夫して書いたものを見ましたが、久しい間の工夫で旨い都合に出來て有りました、それを成功させやうと思つて、ウエルサエユの請負師と結托したに相違無いです、此事も私が久しく心配して、若しやそんなことを仕はすまいか杯と案じて居ましたが、終に其爲に家に歸らないのです、私は親子の間でも彼奴の心持を聞くに遑が無いのです、なせといふと、先生彼奴は全生活を此一事に込めて置くと申してもよい程に、改良とか發明とかいふ事に氣も心も奪はれて居つて、仕事氣違ひとでもいひたい樣な奴ですからな、

とミッシエルは、自慢やら怨みやら、取り交せて話した、自分は此話に就いてミッシエルが、半分は其子を罪し、半分は其子を自慢すると思つた、斯う自慢する程であるから、彼の子の歸らぬので、猶更にミッシエルが痛苦を訴へるなど合點した、兎角する間に夕の六時に成つた、自分は面白い日記を書き終る時に近く成つた、嗚呼今日の數時間の內に、如何に種々のことを心に感じたことよ、ゼ子ピーエブとミッシエルとに關して、如何に喜怒哀樂の變化よ、

自分は夕食の用意を仕て居る間に、ミッシエルは仕事を仕ながら、其子の話をして最早仕事も終り近く成つた、

フト耳に留つたは人の急いで來る足音、ハテと思ふと室の戸が開いた、ゼチビエーブがロベールと共に現はれた、

ミツシエルは驚きは驚いたが、左も嬉しさうに見えた、また忽ち其嬉しい顔を隠すが爲めに故らに憮然した風をした樣に思はれた、

ロベールは父の憮然したことには心付かぬが、其淡白無邪氣の樣が自分を驚かした程で、父の懐に飛び込む樣な風で抱き付いた、ゼチビエーブは何か言ひたさうな顔で有つたが、我慢して抑へて居つたらしかつたするとロベールは自分に向て左も嬉しいといふ風で挨拶したから、自分もこれに對して其無事安泰を祝し、且つ其來て呉れたことを謝した、これが濟むとミツシエルは昨日は貴樣が歸るかと思つて待つて居つたと、乾燥無味な相貌と音節とでいつた。

御父さま何卒御容しください、セーンゼルマンに用事が有つて參つた處が晩くなりまして歸れませんでした私の尋ねた人が切角私を留めて御馳走して呉れましたので、とロベールが答へた。

ミツシエルは片手に鐵槌を持つて釘を打ちながら、ロベールの方を一寸と見て慣つた樣な聲で、それはさうであらう、人の家へ行つては其主人の意に從はねばならぬから、……併しロベール主人と共に鶏の肉を肉指の尖で丁寧に突くよりも睦まじい間柄で、庖丁で黒麵包を切りながら食ふ方が旨いといふ人も、世の中には有るよ。

御父樣私も其方で御座いますと、愉快の面持もて答へ、また併し御父樣蠶豆を食ふには、先づ莢を取れどいふ諺も御座います、それで前途の爲に私は大工場で働くのが必要だと思ひました。

フム貴樣の大工場で働くといふことは、アノ階段の構造案の實行かな。

御父様、其階段のことは今は私の案とは申されません、ライヤモン君の案と申さねばならぬ譯になりました、と笑みながら答へぬ。
それはどういう譯で。
私が發明を賣りましたから。
との一言を聞くと、削りかけて居つた木と道具を持つた儘勃と突立た、そして眼を丸くして叫んだ、何に賣つたッ。
はい私は自分の發明したことを、唯で人に與る程都合の好い懐を持ちませんから。
ミッシエルは木材も道具も投げ出して、怒りの聲で、貴様は馬鹿物じや、自分の才氣で其名譽を揚る程の工夫を發明したのに、それを人に賣つて人の名譽にするとは、實に情けないつまらぬ奴じや。
あなたロベールが何にか悪いことが有ると申されますか、とゼネビエーブが問うた。
するとミッシエルは激昂した風で、何に悪いことッ、お前の知つたことではない、お前は女じや、自分は彼奴にじや、イヤ彼奴も工業者の新發明を大事にすることは、兵隊の帽章を大切にすると同じことで、金錢の爲にそれを他人に渡す抔といふことは無い筈といふこと位は知り居るで有らうに……、イエ馬鹿もの……若し自分が發明することが有れば、それを賣る位なら、寧そ眼玉を穿取て賣る、工業者の新發明を大事にすることは、自分の子と同様にすべき筈じや、それを大切にし、それを成長て、世界中にそれを知らせる様にすべきじや、それを賣る抔とは阿房の骨頂じや。
ロベールは少しく顔を赤くしたが、御父様何故に私が新案を賣つたかといふことを御承知くださいましたら、御機嫌を御直しくださるでせうと思ひます。

さう〳〵お前好くいふたと、最早默し兼ねたと見えて、ゼチピエーブがロベールに左袒した。

どうして〳〵とミッシエルが頭を振つた、ア、悴の不幸じや、それを賣つたも元はといへば我々の爲めにしたものと、ゼチピエーブが重ねて言葉を挾んだが、ミッシエルは猶不滿足な顏で、ロベールとゼチピエーブを見詰め居つた、そこでロベールも詳にことの仔細を言はねばならぬはめに成つた。

御父樣久しく住み馴れた此家を大屋さんから讓り受け度と思つて、大屋さんに相談して見たら、二千フランの半額、一千フランは是非現金で貰はねば讓ることは出來ぬとの答でした、それで私は其一千フランを私の仕事で儲けて、此家を手に入れて、御父樣や御母樣を御安心成さる樣に仕たいと、其以後といふものは心が此事ばかりにはまつて居ましたので御座います、畢竟ウエルサエユの受負師と結托することに成つたのも此事の爲で御座いました、此受負師の工塲で、私の新發明を實驗して見まして、其處で新發明の買手も出來ましたので御座います、其後金を受取て大屋さんへ拂つて、半金のみでは御座いません、二千フラン悉皆出しまして、此家全躰を御父樣と御母樣のものにして、此通り必要の鍵を殘らず持つて參りました、昨晩參つたのは此大屋さんの内で御座いまして、馳走になりましたのも矢張此大屋さんの内で御座いました、細工塲も有ります、食堂も在ります、客の間も有ります、寢間もあります、これを御覽くださいませと、鍵を父の前に出して、まめ〳〵しく説明した、譽むべき所は十分で惡くいふべき所は少しもない、殊に彼が父母に遠ざかつて居つたのは孝行の爲めで有つて、親の方でのみ個樣のことゝも知らずに怨んだので有つて、慾の爲でもなく、我儘の爲でもなく、吝嗇の爲でもなく、全く父母を喜ばせたい、父母の爲にしたいとの孝心に外ならないので有つた、彼夫婦の善く子を育てた、報酬は今日父母の手へ入つたので有つた、實に此孝子は親の爲に身を犧牲にしたので有つた。

此說明で今まで腹を立てゝ居つたミッシエルも穴が有つたら入りたい程耻しいやら嬉しいやらで、殆んど落涙する程で有つた、女房もロベールも大滿足で有つた、此話の團結の後、彼等は歸らうとした、併し自分はチャント晩食の用意を仕居つて三人を留めた。

食事が長い時を費した、料理が此日に限つて特に旨かつた、これは愉快の心が料理を旨く食べさせたので有つたらう、自分も此位樂しさうな一家團欒の快樂を見たことは無つた、丸で親子三人の心は一ッで有つて其利益、其感情、其相互の愛、實に洋々乎として融和せる趣は、畫にも筆にも現はし樣が無い程で有つて、これが人間の人間たる最上の美事じやと思はれた、力とか面目とかいふものも、此間から出て來る、親むとか愛するとか思ひ遣るとかいふことも、此親子兄弟の間でなければ眞の味は分らぬ、此一家は小さいものではあるが、此一家を手本に一國に及ぼして、一國の同胞を個樣に仕たいものじや、さうすれば實に人の自らいふ通り神の子じや、自分は世の人に望む一家を結合する愛の鎖を失はざらんことを、此鎖を解かんには、風雨の中に麥束を解きて、其の穗を拾收すべからざるが如く、團欒の樂みは得べからざるに至らん、猶望らくは、一家親睦の心を以て他人と交り、其親睦すること一家の如くならんことを、古聖セーンポール新信徒に對して書を寄せしこと有り、此衆人が同心協力して以て、一身同躰の如くならんことを望むと、此言以て人世の法則と爲すに足らん。

秋の服裝

三越呉服店注文係主任　飯野三一

流行の色の事に就ては前回にお話した如く、藍氣を中心としたもので、その藍氣も總て濃厚としたものは廢れて、一般に淡氣の方に傾いて、先づ質素のものなれば鼠色、少し華美になれば藤色といふ鹽梅の色氣が好かれて、そして是等の色が此秋の流行界を支配することは最早毫も疑ふべき餘地が無いのである。

元來流行といふものは、之は二ツの方面から作らるゝものと思ふ、即ち一は世間の需用者たる御客よりの要求と、他の一は豫め世の趨勢を觀て、而して其意を迎合して供給せんとする者即ち呉服商といふこの二ツ方面が合して造らるゝものである、隨分是まで種々なる時代があつて、或は元祿式といひ、或は桃山式といふやうなものが流行つたが、今や夫等は何れも厭かれて、近時は如何なる風なものを要求せらるゝかと云ふに、當今は依然として光琳式に止めを刺さるゝやうであるから、本店の如きも此冬の準備として、曩に裾模樣の懸案をした所が、博愛なる江湖の諸彥から寄せられたものが、丁度締切りの期日までに一千二百十一枚の多きに達したので、京都の七百五十三枚は去る事ながら、之に次ぐものは東京の二百四十一枚、大阪の百枚等であるが、中京を以て自ら任ずる名古屋の二十一枚は何だか物足りない感がするに反して、廣島の二十六枚は頗る注目に値ひするものと考へる。

光琳式明治模樣

といふのは如何なる風のものを云ふかと云へば、更めて言ふまでもなく、光琳風を土臺として、之に西洋の草花とか、又は絞りといふやうな意匠を凝したるものを加味して、而して謂ゆる明治的に美化したものを云ふので、之は單に衣服のみでは無い、帶や友禪の類にも澤山ある、併し以上は一般の流行に就て概說したものであるが、尙ほ之を細別して、

婦人の袷の色氣と縞柄とは如何なるものが歡迎さるゝかと云ふに、その地色も昨年まで流行して居た、濃い鐵色とか又は御納戸などゝいふ色は、サッパリとは行かないまでも先づ十が八九までは廢れて一般に淡くなつてその淡い色は何であるかといふに鼠色が主位を占めて居る、而して縞柄はと云ふと、是までのやうな朧縞は少しく厭られて、それかと云つて判明したものが好かるゝかといふに、爾うでも無い、言はゞ是までの物よりは稍ハッキリしたものが喜ばれるといふ工合で、令孃方なれば絣向、それもクスンダ物が迎へられ、また上流の貴婦人方になると御召縮緬、その御召縮緬も地質にチヾラを出したものなどが喜ばるゝといふ風で、通常のものは厭られて來たやうに見える、即ち金紗御召（絹糸の中に微かに白糸を織込みたるもの）、白金御召、高浪御召、楊柳御召などで、織方の變つたものになると纎織清綾織、下つては綾御召、綾糸織などゝいふ類が歡迎されるが、實用向としては、矢張り秩父銘仙とか、又は伊勢崎銘仙とかいふものが需要さるゝもの、その柄合は御召に近いもので無ければ喜ばれないのである。

光琳風裾模様



それから是は古くから萬更無いでも無かつたが、

たとへ有つたにしても若い婦人方などには見受けなかつた事で、先づ當春以來の新流行といふべき

婦人の單羽織

であるが、この羽織は夏の初め單衣の取附きとか、乃ては秋の袷の時代に重用せられるのであるが、其地質は種々あるものゝ、主なるものは絽鶉縮緬、鶉縮緬等で、是等を無双にせらるゝ向もある、併し色氣は別段衣裳と異つたことは無い。次に

婦人の帶

に就ては何かと云に、昨今は以前と異て衣服の縞柄に適當したものを好と云風になつたが、之は畢竟世の御婦人が、色や縞柄の調和といふ智識の進れた現象であらうと察するのである、夫に帶を撰ぶにも、以前は數が少なくとも高價な物を取れたのであるが、昨今は柄の良と云よりも地質の方に重きを置るゝと云に傾いて、而して成べく數を多く有るゝと云事を好るゝ事となつて、今日の所では綴縮緬、ゴブラン織優華織、御召縮緬織の如きものが多く賞美せられて餘り變たものや、餘り地質の厚ものなどは喜ばれない、而して其柄は單純な寫生よりも、例へば、一種の草花にしても、それの一部分に他の技巧を加味して、謂ゆる模様化させたものを嗜好せられる。

流行を豫報するといふ半衿

は如何といふに、すべて袷時代には夏物に比べて稍濃色を用ゐらるゝが、之は氣候の關係で自然の數であらうと思ふ、而して模様は如何かといふに草花物が多い、その草花だが、之を繡とした物と單に織出した物では何方が好くかといへば、それは繡を施した方であるが、之は何故であらうか、言ふまでも無く、織つたものよりは繡の方が高く見えるのに基づくのであらうと考へる、例へば、友禪とか絞物などに繡を加へたる物の如きで、地質は通常の縮緬よりも金紗縮緬、又は金糸の交りたる物等が喜ばれる、一時非常な熱度であつた寶石入は幾分厭られて來た觀がある、是等に次で要求せらるゝものは

婦人のコート

であるが、本年は最早毛織物のコートは、雨か曇天の外は用ゐないといふ風で、全く廢れたと云つても差支ない、そこで新流行はと云へば、絹物なれば御召縮緬といふ中でも、青柳御召などが最も歡迎せらるゝ、併し無地は流行らない、縞物が多い、そして其縞は衣裳のものよりは判然としない薫んだものが好かれる、最も無地でも織方の異つたものでグット上品になると、青柳織の自然の縞を瀧に見立てゝ、これへ光琳の紅葉を刺繍した高尚なものもある、寸尺は男子のインバネスと云つた工合で、大抵二尺八寸から乃至九寸位の謂ゆる半コートやうなものであるが、是は一体裾捌きが良くて且つ歩き易いばかりで無く、折角お金を掛けた衣服の縞柄を、以前のやうな長いコートでは皆な隱して了う、それでは惜いといふので、その縞柄を現はすといふ意味を多少含んで居るものではあるまいかと察する。

因に從前は、袷といへば二枚襲に限られて居つたものである、然るに最近年は其二枚襲といふ事が廢つて一枚着となつた、之は多分縞物との關係上斯う爲つたものではあるまいか。

大部御婦人方の事のみで持切つて了ひましたから、男子方の方面を少々搔摘んでお話すれば、

男子側の方面

では、縞柄に別して異りは無いが、織物で云へば絞のあるもの、即ち綾糸織、淸綾織、優綾織、光華織等で、その他異つたものは大島紬、琉球紬等を含むのであるが、餘り管々しくなるから略するとして、ツイ先頃、私は店用を帶びて二週間程關西へ旅行して、その節妙なことを發見したのである、それは外でもないが、是まで東京と大阪との流行を比較して見ると頗る其趣を異にして居たので、それも其筈從來大阪の流行といふものは名古屋から吸收したもので、云はゞ大阪の是までの流行は名古屋本位であつたのであるが、諸孃も知らるゝ如く、名古屋風は謂ゆる華美ではあるが、どうも何處かに田舍臭味がある、そこで此田舍臭味に飽た大阪人士は東京風を

歡迎するといふ風に、今日の如ゝ兩者の流行が接近して來たのではあるまいか、最も東京に比して大阪は、すべて地味な柄が流行るとは云ふものゝ、其色合といひ柄といひ大差は無い、殊に近時大阪の人々が、從前のやうな短い羽織で無く、殆んど東京の者と同じ樣な長の羽織を用ゐるやうになつたのは手近な一例である。

國家的要求と婦人の發展

日本女子大學校長　成瀬仁藏

◎力の要求

今年は近年に無き豊作の豫想で、人々が喜こばしき收獲の秋を迎へる事の出來たのは、實に幸福である此の好期は人の意氣自ら高かく、氣清き秋天と共に輝やく樣な希望に滿さるゝ時である、此の時に當りて吾々は、尙深く思を潜めて、我が國民の要求、即ち國家的意志、社會的意志なるものが、最も渇望し要求して居るものは何かと考へて見る事が必要である即ち現時の日本が最も痛切に必要を感じて居るものは國家の經濟力富力の増進といふ事である事を知らねばならぬ。

是れ人間の知識の力、意志の力、及びその品性により成就せらるゝ事である、即ち教育的問題たり又政治的問題である、要するに國民自身が世界に於る日本の位置に適應し、世界的舞臺に飛躍しその使命を全うするに足るべき實力の必要を自覺し、之れを渇望して居るのである、此國民の自覺、この要求、求めて已まず、得ざれば安んぜず、眠より醒めて奮ひ立つこの發動は實に國家の前途に赫々たる希望の輝きそめた前兆で、國家の爲め、實に慶賀すべき事なのである。

◎力とは何ぞや

今日では國家といふ代りに力と云つて居る、世界の列强といふ、此の世界で認めて居る國家と云ふ社會的に云ふ所の人格は一種の力である、從來の日本

はこれを武力と認めて居つた、又獨乙が世界に雄飛して居る所以は國民の腦力――研究の力であると思ひ、アングロサクソンは人格の力を以て、米國は實行の力を以て優秀なる强國として起つて居る、と信じて居つたこの武力と云ひ實行力といひ、又た研究力といふ樣な一方にのみ偏して興つたものは必らず反抗を生じ、その力の變ずる時代が來るのであつてこの事は古今の歷史が既に證明して居る所である、けれども今吾れ〳〵が云ふ國家的意志の要求に應ずる所の力なるものは、斯くの如く、單調にして偏りたる力ではない、此れ等凡ての力を含み此れ等の力を生ずる源泉となるべき所の眞の力をいふのである、この力を養成し、自己を發展し、實現する事が、即ち吾々日常修養の目的である。

◎自己發展と婦人

自己を發展し、眞の力を養ふ事が、吾々の修養の目的でありとすれば、如何にして發展を計るべきか。即ちわれ〳〵は吾々の身躰の力、智力、精神力の三つの力を健全に發育せしめ、その平衡を得る事に勗むる事である、元來わが國民の力、各個人の力が故なく放散され、無益に消耗せられてあつたのは、即ち此の力が平衡を失ひ一方に偏つて居つた事に起因する、特に婦人は近來自己の發展に勉むる事切なりと雖、熱心であり、忠實なる割合に事の擧らず、其の働の徒勞に屬する事の多いのは、此の三つの力の平衡よろしきを得ざると、意志の力薄弱にして、よく一貫して働く所の原動力たる確信が乏しき故である。それが爲め、屢々沈滯し、屢々迷ふのである、之は今日の社會が婦人に對する壓迫にもより、又遺傳的習慣よりも來る境遇の罪なりとも云ひ得れども、要するに從來の婦人敎育の不完全は深かき根本の原因である。

◎健康力の增進

吾々の身躰に力の宿る所は、神經系統と頭の組織及び、これを包みて周壁となり運動力たる筋肉とより組織せられ、この組織によりて吾々の精神力が湧

出するのである、此の神經系統の目的はその作用を筋肉に傳へて活動力を起さしむる爲めであつて、神經と筋肉の作用が平均を得て始めて吾々健康を、增進するのである、若し神經作用のみに偏して、筋肉の活動を許さなかつたならば、身体は忽ち平均を失ひて健康を害するのである、然かるに、今日の敎育は此の平均を失ひ、只書物を讀み、暗記に耽り、想像を馳せ、神經をのみを過勞せしめる事を以て能事卒れりとして居る、そうして筋肉の活動、意志の働きがこれに伴はない、だから其の結果は女學生の多くが徒らに薄志弱行の徒となり、空論家となり、人格を作るの力に乏しく、神經過敏のものとなり、遂には家庭は不幸に泣き、其の子孫をして、不健康に陷らしむるが如き、禍害を釀すのである、某醫家大家の言に、「健康の力も意志の力も筋肉より來り、活動を欠く神經の過勞に依りて飛散す」と云はれて居るが、吾々の身体の健康と否とは、其の影響する所自己の精神身体のみならず、實に子孫の幸不幸の岐るゝ所なれば、吾々は、勗めて心身の働きを平均せしめ、神經の過勞を避けざるべからず。

◎智力と仝化力

昔は風の力や人の力で船を進めて居つたのも、近來は蒸氣力或は電氣等の無限の力が發明され、海には一萬噸以上の船を建造して大洋の風波をも物ともせずに自在に横行し得る様になり、陸上には、亞米利加や加奈太の大原野も數日間に横貫することの出來る様になつた、また近頃は又、白令海峽を連接せしめ、或は歐亞の兩大陸を貫通する鐵道さへ計畫せられて居るのである、斯くの如き大發明も、大計畫も皆人間の智力の發達に基くのであつて、其の力は只知識の同化作用によりて出來るのである、即ち讀む事に依り、觀察に依りて得たる種々の智識と、五官より受くる感覺とが、吾々の頭腦に入りて仝化され、玆に推理となり、斷定となり、最後に概念を作り出し、こゝに始めて信仰となり、活動となるのである、若しこの仝化力がなくば、如何に萬卷の書

を暗記し、豐富な研究材料が集められてあつても恰かも消化力なき胃中に滋養物を投ずる如く、何等の養分を攝取するの出來難い樣なのと全じである、即ち何等の智識ともならねば、何等の活動ともならない、今日の學生に欠くる所は智識の乏しいのでもなければ、材料の乏しい爲めでもない、唯々全化力に乏しいのである、だから斷定なく、實行なく、活動なく、主義なく、信仰なき結果に至り、意志の薄弱を來たして居るのである。

◎精神力の養成

即ち道徳力を養ふ事に就て、特に考ふべき事は、國家社會の要求に應ずるといふ精神である、體力も智力も意力もこの必要によつて起つて居るのである、精神力も亦た全じく時代の要求に應ずるものである。

この力は只だ、金力威力武力によつて得る事の出來るものではなく、人格の根本たる力、ヒウマニチー―愛―仁―宗敎的精神の生命によつて得るのである、今日政治界、敎育界又經濟界、即ち國家的意志の渇望が、人物―品性あり眞の力ある人物を要求して居ることを自覺する事が出來れば、吾々はこの精神的生命を養成する事が、刻下の急務である事を悟り得るのである、殊に最も多くその衝に當り、その使命を全うする、責任を負ふべきものは婦人である、婦人は天然にその美しき性を供へて居るのである、今や婦人が向つて趨るべき走場は開かれて居るのである、婦人の發展は實に國家的意志、時代的精神の最大要求である、誠や力は要求に依つて出來ると云はれて居る、婦人それ、努力せよ。

◎自を信じ又人を信ぜよ

啻に精神的方面に於て計りでなく、物質的方面に於ても、社會にも家庭にも、婦人力に俟つべきもの多く殊に、農業工業の如き方面にも、婦人の發展によつて開拓さるべき事業少なからず輻湊して居るのである。

要するに今日の日本婦人は深かく時代の叫びに耳

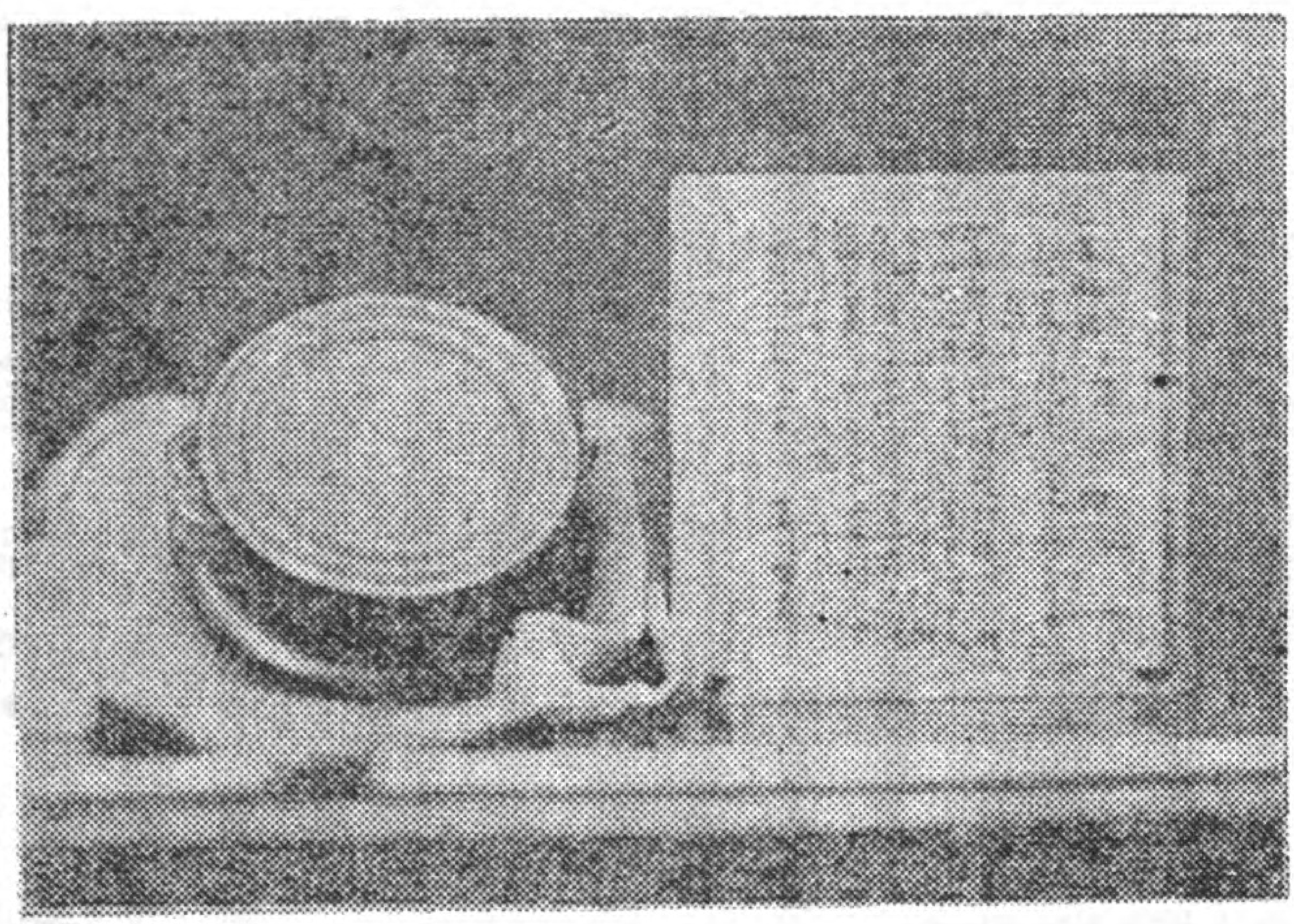
を傾け、その使命のある所を自覺して、體力を養ひ、智力を養ひ、精神的生命を養ひ、以つて完全なる力を養はねばならぬ、吾々は玆に到りて始めて、自己を信じ天を信じ人を信じ、社會と一致し、國家と一致して、偉大なる力の發現となり、時代の要求を滿足せしむる事が出來るのである。

中山幸子刀自を訪ふ

豫見道人

愛國婦人會、共立育兒會の話が起れば、直にその引合に出さるゝは中山幸子刀自である、十有餘年間の刀自は、この二つの會の爲には、眞に病器ともいふべき身體を、風に任せ雨に任せ、西に東に奔走勸誘せられ、巨額の費を投じつゝ、愛國心慈善心の喚發に勸められたのである、されば勤儉自ら奉ずること極めて薄きに拘らず、之に千金を投ずることも、恰も一枚の紙を惜まざる如き有樣である、かくて長き年月輕からざる病も、愛國慈善の精神的治療によつて、席暖まるに遑なきまでに忘られ、これ等の會の催には、いつも刀自の列席せられざることなく、また刀自を見ざる時は物足らぬ思ひをせしめられたのである

古証鈷



然るにこの春以來刀自の顏をこれ等の會合に見る能はざるに至つた、流石の刀自もそろ〳〵飽きが來たのであらう、などゝ臆測するものさへあつ

ねが、それは素より刀自の心事の一端をだに知らぬものゝ話で、刀自はいつか病床の人となり、殆んど一時は危篤に瀕せられたのである、されど心は常に愛國慈善の爲に働き、一刻もその念頭を離れられな

摩耶夫人大聖降誕の銅像



かつたに違ひない、予は一日その近況を聞くべく刀自の病宅を訪うた、刀自は重き枕に就かるゝにも拘らず快く面會せられた、一年前の面影は何處にかと思はるゝばかり瘦衰へられ、打見たるのみにてまづ涙こぼるゝのであつたが、例にかはらぬ快活なる調子で、語らるゝ所もまた愛國慈善の事である、予はそのお身體で相變らずの御元氣でと云へば、刀自は笑うて、元氣どころではない、死ても此度の病には勝てずと覺悟し、摩耶夫人大聖降誕の銅像を大本山永平寺へ、古證鈷を大本山増山寺へ、それ〳〵祠堂金を百圓づゝ添へて寄附し、後事何くれとなく取賄つて置いた程であつたが、或はこの向では回復するかもしれぬ、その時に詠むだ歌がある

みほとけの敎の道の尊けれ
なほ後の世に光りますらむ

といふのであると語られた、予は刀自の病の一日も早く平癒せられんことを切に祈つて居る、

さて前記大聖降誕の銅像は、印度佛にて珍希の重寶、古證鈷は建仁三年長樂寺隆寛の作にて、これまた希世の重寶である、幸ひ刀自が紀念の爲撮影せられた寫眞があつたので、こゝに拜載することにした摩耶夫人の袖より大聖の降誕さるゝ所、いかにも之に對して靈光に浴する思ひがするではないか、

音樂雜話

中川愛氷

◎人間ほど自分を詐るものはない、その結果東京音樂學校に、世界第一の三絃樂が用ひられぬといふ矛盾が起る、十餘年以前予が三絃樂の鼓吹に力めた時、三絃などの音は士君子の耳に入れるものではない抔とけなして、あまり取合ふ人がなかつた、その當時右の東京音樂學校の諸先生等と會食した事があつた而して諸先生が興に乘じて歌ふ所は、三絃の御厄介にならねばならぬものゝみであつた、

◎それもその筈で、東京音樂學校は、一の尋常洋樂學校に過ぎないのである、されば少しばかり聞きかぢつた洋樂より、邦樂の方が解つて、且つ面白いに不思議はない、

◎然るに茲に不思議なことがある、洋樂家先生を夏期一週間ばかりの講習に傭ふに、數百圓の報酬を取られ、それで算盤のとれる程生徒の集まることである、而して何を學び得たるかと云へば、何の學び得る所があらう、たゞ免狀を一週間の短日時と少許の黄白にて得らるゝより、虛榮心の化身がこの募に應じて、一種の厭ふべきスタイルを學び得るに過ぎぬのである、天下罪深きこと多しと雖も、予はかゝる講習會を興行して、音樂を惡用することを憎まざるを得ない、

◎音樂を學校に於て採用するのは、品性を優雅にし、人間らしき性情を養ひ、社會の風紀を淸く美しくせんが爲である、三絃樂の士人に顧られざりし結果、下流社會に流行して、風俗を紊すに便せしより、憐むべします〳〵上流社會に遠ざかつたのであるが、その虛に乘じて洋樂ならばとあつて、これが僥倖にも當つて、まだバタ臭かつた洋樂が俄に繁昌した、その結果は何うであるか、今日の中流以上の風俗を紊したのは、洋樂が與つて力がある、風俗をよくせねばならぬ音樂の爲に、その反對の結果を見るのは何ういふ理由であるか、それは云ふまでもない、音

樂を始めて見やうといふ心事が、多くはまづ不眞面目なからである、

◎昨年より美音會といふのが起つた、純粹な邦樂研究且演奏會で、金の逃げる音といふのが金言の如く思はれた三絃樂のみの會である、予も關係者の一人であるが、美音會といふ如何にも露骨な、一種異樣の響きをもてる此會名にも、林伯爵會長といふことになると、朝野の名士三百餘人の會員が出來、いつの演奏會にも紳士貴婦人にて客止の姿である、失禮な申分ながら、これ迄三絃樂などゝいへば排斥せられた方が多いやうであるが、實際耳を傾けられて居る所を見れば、感に堪へて居らるゝやうであるして見ればこれまで自ら詐られたのであるまいか、

◎關口銀次郎君は面白い人で、三絃樂の名人である一日の骨休めは、夕食の膳に美聲を出すことで、令夫人三絃を取り、令孃之につれて舞ふといふ有樣である、これだけを聞けば誰にも出來ることゝ思ふであらうが、これがなか〳〵むつかしい、何故なれば一人この中に心の正しからぬ、或は惰け者が居ればこれは續かぬ話である、正直に働く人の集合であればこそ親子三人水入らずに此樂みが出來るので、この樂みあるが爲に家はます〳〵榮え、近所合壁は君の感化をうけて、俄に朝寐を止めるのさへある、音樂の妙はそこにあるので、日本の音樂は四疊半式などゝけなす人があるが、この四疊半でよろしい、洋樂のやうに騷々しいのがよいのであれば、日本にもそんな樂器が幾らもある、一たび東大寺の鐘をつけば千有餘年の餘韻を保ち、八幡宮の曉の太皷は桐ケ谷全市に響く、高松城を陷れるに足る丈の法螺の貝もあれば、銅鑼鐃鈸何でもお好み次第である。

◎併し今更三絃樂の功德を述べるまでもなく、美音會が貴紳三百餘人によつて組織せられて居るのを見ても證明し得られる、この時に於て、流石の尋常洋樂學校も三絃樂を研究せられずに居られなくなつた即ち三絃音樂家を數名招聘することになつた、そのうちの一人名見崎得壽齋は、予が取立てた名見崎の

の家元である、予がもし十餘年前三絃樂の爲に微力を致して置なかつたら、恐らくこの流儀だけはつぶれて居つたに違ひない、圖らずも尋常洋樂學校の爲に三絃研究の一材料を殘した譯になつた。

◎この名見崎の家元に就て面白い話がある、名見崎といふは富本節の三味引の家柄で、義太夫節でいへば竹本に對する鶴澤といふ如きものである、名見崎得壽齋ある時富本家元との間に不和を生じて、勢ひ絃界を去り、一の蒔繪師になつた、予は蒔繪師には他に適當の人もあらう、もし富本家元の下に使はるゝを屑とせぬならば、一派の家元に取立てゝやらうと、それ〳〵關係者に話をつけ、家元として東京府に出願した、東京府では試驗の上でといふ事であつた、そこで予は誰が試驗をするのであるかとその試驗官の名を聞いたが、そんなものが有らう筈なく、注文通り許可された、その時に東京府の官吏としてこの事に關與せられたのは、慥に藤大路男爵であつたと記臆して居る、

◎兎角人間のする事には私が多くて、音樂にしても立派な大家が隱れて、愚にもつかぬ人が世に時めいて居る例が多々ある、箏にても現に東京に松本檢校といふ大家がある、文學の素養もあり、年齒といひ風彩といひ、何處へ押出しても立派なものである、故竹翁などもその箏に合せて尺八を吹くを名譽としたものであるが、千萬世を渡る術に拙である、竹翁は尺八にて數萬金を吹き出す時に於て、松本檢校は裏長屋に淸貧を樂んで居る、如何にも眞に音樂家らしく出來て居る、予はこの檢校を或音樂會に推選した、然るに其會に三曲部なるものがある、その三曲部の試驗の上でといふことであつた、もし試驗するならば押合某といふ先生が之に當らねばならぬ、その押合某といふ人は松本檢校と比較するも不倫な位で、巡査が警視總監の試驗をするやうなものである名見崎の家元に東京府の官吏が試驗の上と云はれたのを思ひ出してほゝ笑まれた、而して松本檢校は大家に知られて、序に葬られて、吹けば飛ぶ如き者が

榮え、然も右の音樂會にも下手と知りつゝ押合某を出演させた、果して失敗したのであつた、

◎箏の大家山勢松韻は過般世を去り、年よりいへば松本檢校などもその順が廻はつて來た譯である、何うか其技能もその順に行くやうに一般に認めさせたいものである、東京音樂學校あたりで招聘しては如何に、無論應ずまいけれど、

◎東京音樂學校といへば、先頃歌劇を封じられたことゝいひ、近くは不評判教員の免官沙汰あり、既に名を自家の都合にかり體裁よく辭職したるものもありとのことであるが、風紀の上



から實に目出たい話である、決して臭い物に蓋をして置くのが能ではない

◎近頃東京音樂學校では男女合併教授を廢するといふ噂であるが、男女合併にてもよし、教師其人を得ば、それは何うにでも監督が出來る、それより教師と教師と婚し、教師と生徒と婚したる例が同校にある、ちよつと差支ないやうであるが、それ等が大分惡感化を與へて居る、幸にして、それ等の先生に疚しい事がなければよいやうなものであるが、教師が生徒と婚する如きは、餘程

其經路を謹まねばならぬ、法律の手續きばかり立派でも仕方がない、つまり人間であるから物の音も聞きたし、歌うても見たし、それには三絃でもあるまい、ヴアイオリンやオルガンなれば、天下晴れて樂まれる、第一見た所も仔細らしくてよいと、そんなことで始まる藝であるから、眞面目に行かず、兎角風紀問題が、この音樂界から起るのも當然である、と一概にも云へぬが、予の目には多く爾う映ずる、この連中の教師になる人は、餘程確りしてもらはねば困る、況んや其生徒とあられぬ、風聞を立てられる如きもなきにあらざるに於てをやである、或は男生女生を別にするより、男教師女生徒、女教師男生徒を別にする方が急務であると評するものさへある、評者の言素より禮を失して居る、さりながらかゝる評をうくること亦決して名譽ではない、

◎かくの如く云へば、予は絶對に洋樂を無價値とし、また品行の惡き問屋を洋樂家と定めて居るやうであるが、決してさうでない、日本の音樂さへ分らぬものが、西洋の音樂でもあるまいと思ふのと、たゞ音樂を賣物に研究した結果、趣味の墮落者が洋樂家といふものに多いやうであるから、寒心に堪へずしてかゝる言も出づるのである、

◎音樂一口に云へば、遊藝である、遊藝なるが故に大に注意せねばならぬ、動もすれば遊藝は墮落心を誘ふものであるから、この遊藝の師たる人は、またこの遊藝を學ぶ人は、品行をいやが上にも愼んで、この遊藝によつて、家庭を紊し、社會を濁すことのないやうにせねばならぬ義務がある、

◎予は先年調聲會と稱する音樂會を、毎月一回催して四十九回に及んで、その間には其職業のいかゞはしきものも、幾十人かは藝壇に上つた、然も予は藝を神聖なるものにして、極めて嚴重なる態度を以て之に接した、されば一回もその身分職業の如何によつて、演藝會の神聖を汚されたことはなかつた、されば音樂を共に樂むに足るべきは、身分職業にあらずして、其心事の美なる點に在るのである、



東京帝國大學講師 佐々木信綱先生選

野菊

天

美濃國關町　傍島小枝子

朝ありきうす綿入の衣にして　海みる丘に野菊花さく

（評）女らしくして、まさに天位にあるべき歌

地

東京下澁谷日本赤十字病院内　中村千代子

わらじ賣る翁か家の垣根道　野菊の花をあはれとつみぬ

（評）つまれたる野菊もつみし人の心をよろこぶべし

人

美濃國關町　平岡かん子

君來ませせきまさむ道はこゝしく　野菊さきたり岡越にして

（評）かゝる道をふみてさふ友の家、いかにたのしからむ。又云こたびの野菊の歌には すぐれたるが多く 秀逸の中にもよきが多し

秀逸

◎ 名古屋　山根しげ子

やれ垣をくゞる小犬にいたましく　ふみにじられし野菊一もと

◎ 東京　平塚いさ子

糸くるまひく音きこえ雙紙ほす　垣根のもとの野菊花さく

◎ 河内　竹内久子



いさせめて匂ひのみをやつとにせむ　手折るも惜しき野邊の白菊

伯耆　錦織千代子

◎

行軍の一むれゆきて露はれて　野きくにつゞく川添の里

讀者文藝

◎

野菊咲く山田の小道稲つみし
車ひき行く若き妹背の　　美濃　杉山芳子

◎

朝露を駒の蹄にはらひつゝ
野菊さく野につはもの行くも　　下總　秋月廣江子

◎

朝月夜富士を巽に甲斐に入る
野菊はなさく川添の道　　岩代　岸野菊子

◎

村はづれ荷馬つなげる居酒屋の
まがきの内外野菊はなさく　　岩代　岸野つれ子

◎

別れかれ野菊さく野にたゆたひて
母ます國をひさりしのびぬ　　岩代　樹口ゆき子

◎

巡禮の親子憩へり道の邊の
數多野菊の咲けるあたりに　　常陸　岡田萬子

◎

水やりし胡蝶の墓に秋更けて
やせたる野菊ひとつ花咲く　　東京　絅田けい子

◎

小木曾路やつかれていこふ掛茶屋の
かどの小流野菊花さく．　　千葉　吉松かめ子

◎

小羊の一群あそぶ村さかひ
牧の草原野菊花さく　　岐阜　傍島眞紗子

◎

物言はで立たせ給へる石佛の
前に倒れて咲く野菊哉　　相模　服部八重子

◎

村はづれ新釀の酒うれる
わらやのさ庭野菊はなさく　　岩代　岸野常子

◎

昔見し野菊はあらず一村の
田畑崩れて汽車の笛聞く　　神奈川　渡邊八重子

◎

人すまであれたる野路の一つ家に
野菊みだれてあきの雨ふる　　秋田　長谷川薫子

◎

巡禮の兒の歌悲し夕風に
野菊花ちる露の細道　　千葉　吉松龜子

◎

野菊さく日あたり疎き山寺の
墓原つゝき雨にくれゆく　　横須賀　渡邊比佐子

◎

共にめでし君はなくして今年より
野菊も折らで物思ふ身か　　美濃　傍島敏子

◎　美濃　傍島曉子

家か來にかよふ小みちし岡の邊も
　秋はうつくし野菊花さき

◎　岐阜　芳翠敏子

村はづれかきやの背戸のほしがきに
　小春日たかし野菊花さく

◎　岩代　木内しのぶ

杜陰やいつみにいこふ草刈の
　籠にまじれり野菊一もと

◎　下野　井上倘子

朝霧のや丶に晴れゆくきぬ河の
　きしの野菊に秋の蝶まふ

◎　岩代　岸野せい子

昇るなのおきての札も倒されて
　野菊なる子の土手につとへる

甲

○　神戸　古在敏子

虫干の昔のなかより出でにけりむかしつみにしのきく一りん

○　東京　平塚つゆ子

道とへは前栽なかきはしき子の五家の村さす野菊みちかな

○　竹内たれ子

雲にのりて秋の女神のあもります小路なるらむ白菊の花

○　東京　莊　秀子

淺川の岸おもしろき岩の上にやさしく咲けり野菊一本

○　千葉　金子みさを子

故鄕の蛇塚に似し塚ありて野菊も生ひぬこと國の秋

○　千葉　山森君子

破れたる番傘さして野菊さく村のはつれをゆく少女かな

○　美濃　杉山靜子

がた馬車の彼岸詣りの人のせて野菊花咲く里道を行く

○　美濃　杉山藤枝子

妹と背の若き二人か詣り行く小山田小道野菊花咲く

○　東京　神谷てる子

行く人もまれなる野邊の細道に色なつかしき野菊花咲く

○　美濃　各務不美子

賤の女か刈りし馬草にましりけり片野かはらのしらきくのはな

○　臺灣　浮洲德子

道のへの草に埋もれし古塚にあはれも深く匂ふ白菊

○　茨城　金澤すゑ子

秋の旅人におくれぬ野邊ここにたてる野菊に心ひかれて

○　美濃　鷲見こう女

君來ませい丶もか軒ばのむらさきの野ぎくたをりに朝露ふみて

○　美濃　傍島みゆき子

けさよりは羽織かされてあさありき野菊かざしてゆく少女かな

○　神奈川　飯田白露子

ぬらさしと裳すそか丶けて手折りけり野川のきしの菊の一もと

○　兵庫　古東靜子

水車ゆるうまはれる里川のきしにならびて野菊はな咲く

○　兵庫　湖東澄子

一枝はゆるせよ野菊母上の手向の花に我はしもせん

○　大阪　磯村さだ子

水かれて訪ふ人もなき奥つきに吊ひ顔に野菊花さく

○　　岩代　岸野登代子
母が脊にねふる童のうつゝなき稚子髷にかゞる野菊やさしも

○　　須磨　有村さみ子
なり〳〵はたひ行くそさのながめさもなりて栄あり野邊のしらぎく

○　　兵庫　三宅久美子
ひくらしのなく山里の夕くれを野菊手にもち歸る少女子

○　　横須賀　柏原美奈子
むかし君在しゝ家の草垣に咲ける野菊をなつかしみ見る

○　　東京　紫　子
蜻蛉とぶ野澤の水にかゝげ見えて今盛りなり菊のひともと

○　　須磨　有村芳子
のぎくさく花野かはらに日はくれて行くかた遠し雨細うふる

○　　神戸　岡本信子
戰にたふれし兄のうつしゑに涙してさす野菊ぞ淸き

○　　茨城　脇坂須磨子
こほろぎの鳴音よわれる野に匂ふ薄みだれて菊咲にけり

○　　美濃　文野さかへ子
秋思ひそゞろあるきの村はづれ社の丘に野菊はなさく

○　　岐阜　遠山よしの子
稲守の翁がひまにたわらあむ川添堤野菊はなさく

○　　相模　藤原下枝子
秋草の茂みの中の君が墓手向顔なる野菊淋しも

○　　神戸　か　れ　子
美しく咲きみだれたる秋草のなかに床しき野菊一本

○　　須磨　有村紫子
野ぎく咲くまきはの原にうなゐ子かふくくさふえにうしは集ひぬ

○　　播磨　三木郁子
こゝろなき里の童もあはれさや刈りのこしたる菊のひともと

○　　東京　石田りつ子
玉くしげ箱根のあれのふみのおくに淸き野ぎくの花ぞにほへる、

○　　埼玉　横田秋子
そはの花わたの實かるゝ時を得て野畑にさける白菊の花

乙

○　　東京　平塚白百合子
たまうけし鶉ははゞたく草のかげたなれふしたり野菊一本

○　　伯耆　錦織賜子
ゆく秋のつめたき風にゝほひ出てゝうすきゆかりよ野ぎく秋草

○　　磐城　木幡きよ子
馴れて來し花野の菊の移り香はいかに戀しき畷の筒袖

○　　相模　中崎倚子
吹く風もあはれ春邊をしのぶらんさばかりかほる野邊の白菊

○　　東京　倉重千惠子
手折りなはつゆやけぬらむしかすかにいかにやはせむ野邊のむら菊

○　　美濃　各務涙子
荊棘の中に育てさ似もやらてさけるもゆかし野路のしら菊

○　　美濃　各務照子
さく花の野邊にしあればはやせたれさ色香めでたし外の菊より

○　　伯耆　錦織よし子
まちて居よさ殘しゝ稚兒の笑顔にさつゆにぬれつゝ野ぎく手折りぬ

○　　群馬　石井さく子
露ふかき秋の野のへを分行けはこゝもかしこも菊のまさかり

○　　伯耆　錦織さち子
露ながらうす紫に咲いてゝかゝやきにほふ月淸き庭

○　群馬　小野里佐久頁子
舞ふ蝶の宿りも廣き野の面に高く香りて咲きし白菊

○　名古屋　土屋たま枝子
七草の名には洩れさもひさつ野にいろむつまじく匂ふ菊かな

○　群馬　石井美代子
榮行く御代の知るへは遠近の野菊の花の色にも見ゆかな

○　福井　廣部小雛子
春あさき乙女に摘るゝ嫁菜草紫匂ひ野もせにきはふ

○　福島　伊藤よし子
蜓蛉なく淺茅生の中露にぬれて姿やさしき野菊一本

○　陸前　前田河千年子
八千草にまじりて咲けさ何さなくやさしく見ゆる野菊なりけり

○　河内　竹内久子
月さえて虫の音澄みて夜更けて野路の白菊露になりぬる

○　大阪　木村春江子
眞葛原秋風白きたそがれに一重の菊の香ぞ忘られぬ

○　熊本　矢野なつ子
あれ庭の華にたゝかふ野の菊の夜つゆに月のやさる氣高さ

○　橫濱　高橋つれ子
都より御室に急く道のべに姿やさしく野菊花咲く

○　神戸　宇野夏惠子
山里にみるもゆかしきたか庵のまかきにさける野菊一むら

○　埼玉　橫田やな子
露ふかきうつらの床に咲にほふ千代の根さしの野ちの村菊

○　神戸　竹野節子
さまざまに千草か中にやさしくもむらさき匂ふ一もさのきく

○　北京　辻野音羽子
野菊さくあしたの原に床しめて露をまくらにうづらなくなり

○　神戸　登與子
翅弱き胡蝶追ひ來し野の末に優しくにほふ菊の一本

○　東京　青木たま子
たくみらかものせし色もよけれさも野邊の白きくこさにゆかしき

○　愛媛　攝津玉枝子
めづらしな賤が伏屋の庭までも雪かさ見ゆる野邊の白菊

○　越後　水野やす恵子
つみくさに嫁菜さりしはこのあたり早も野菊の花はさきけり

○　遠州　疋田伸子
藥さりいそぐ野みちの夕まぐれなぐさめかほに白菊のさく

○　神戸　今西操子
美はしきみ歌さ共にさこしへに栞さなさん野きくいく本

○　神戸　藤幸子
秋の野にやさしく咲ける秋草の一しほゆかし野菊一輪

○　越後　松永繁子
咲きのころ野きくのかけにやせやせて胡蝶つかるゝ晩秋さなりぬ

○　須磨　有村基子
よをすてゝすむかくれやもさきくれはおのつからさく野邊のしら菊

○　峯子
賤の女が歸りないそぐ細道にあいらしく咲野菊一本

○　東京　石田柳子
ゆかしくもにほふ野きくないへつさにもたる少女の姿やさしき

○　橫濱　鈴木まつ子
おもしろうあきつさびくる道のべに匂ふ野菊のゆかしかりけり

○　東京　石田龜子
朝風に露はらはせつ野の中にけたかく咲ける菊の花かな

○　須磨　有村紫子
野菊さく山下つゝみたさりつゝつゝみのぬしにたつねきにけり

萩

貴族院議員 御歌所參候 子爵 入江爲守先生選

天

故郷にことしも咲けり宮人の
むかしかざしゝあき萩のはな

美濃國關町　各務照子

地

やさしさの程こそ見ゆれ打ふして
露にもたへぬ秋はきの花

名古屋　土屋たま枝

人

咲きつゞく小萩糸萩おのつから
まがきとなりぬ野路の賤か家

岩代國伊達郡小手川村　岸野せい子



佳調

◎おちたぎつ早瀬の波に枝ぬれて岩まの小萩はなさきにけり　岩代　岸野菊子

◎楢こそまた色かへれ庭の面なにしきにつゝむ秋萩の花　河内　竹内敏子

◎限もなく照せる秋の月影に
おもはゆげなる萩か花妻　河内　竹内久子

◎宮城野な今朝わけくれは露の上に
薄月にほふ秋はきの花　清國　辻野音羽子

◎露なから宿のまがきにうつし植ゑん匂ひこぼるゝ糸萩の花　神戸　今西白露子

◎宮城野の露の白萩うつしうゑて居なからひなの秋を見るかな　東京　石田りつ子

◎里の子もこゝろありてかみちのへの小はきか枝は手折らさりけり　橫濱　鈴木まつ子

◎そのむかし友とあそびし里川の堤のこはぎいまかさくらむ　岩代　岸野常子

◎月清きのもりがいほの袖垣につゆおもげなり白萩の花　東京　神谷てる子

◎山寺の松に有明の月すみて虫なく方にしら萩のさく　山根しげ子

◎ 埼玉 横田やな子
白露のみかきか原な來てみれは玉おきわたす秋はきの花

◎ 秋田 長谷川薫子
遠方のともしびきえて眞萩原月影淸く夜はふけにけり

乙

○ 福島 伊藤よし子
小山田の庵のむしろ戸うつもれて虫の音高し萩の一さむら

○ 相模 服部八重子
雨晴れてなほ立ちなやむ白萩の露の細路秋風ぞ吹く

○ 兵庫 古東靜子
文机の小瓶にさせる糸萩に虫の音ちかく月はすみたり

○ 陸前 前田河千年子
草の花あまたあれどもかくはしくめてたき花は秋はきのはな

○ 横須賀 渡邊比佐子
灯は行く方に遠く萩原の露にうつろふ夕月の影

○ 東京 繁子
法の師のくむあか桶にこほれけり岩井のもとの秋萩のはな

○ 東京 平塚いさ子
なく虫の宿とか見なん萩の花立よる袖に露ぞこぼるゝ

○ 横須賀 高橋つれ子
置く露の玉の雫に打伏して咲亂れたる小萩白萩

○ 東京 中村千代子
古郷に歸る野道のうれしきに殊匂はす秋萩の花

○ 千葉 吉松龜子
故郷の萩はさかりと云ひこせど歸きぬ身ぞ面て伏なる

○ 石川 安原外子
おきあまる露の玉ぬく糸萩の枝打たれて匂ふやさしさ

○ 兵庫 圓子
朝まだき露はらひつゝわけゆかん秋風きよき小野の萩原

○ 美濃 傍島みゆき子
初秋の月は限なくすみ添ひて萩の花つまおもはゆげなり

○ 岐阜 傍島眞紗子
まなび子のなげあふまりのふさそれて垣の秋はぎ花みだれちる

○ 高崎 石井さく子
今日あすとまちし野末の萩原に秋のにしきの見え初めてけり

○ 茨城 金澤すゑ子
故郷の常磐の園の萩の花露置きなから今やさくらん

○ 常陸 岡田萬子
萩の花こほるゝ露に袖ぬれぬ夕くれ近き野邊の細道

○ 岩代 樹、口雪子
秋萩の花を手折りて思はずも虫のなく音をみたしつるかな

○ 神奈川 渡邊八重子
萩の花たれまつ虫もさひしげに月もうつろふ露に鳴くらん

○ 臺灣 浮洲德子
花の涙よるかとはかり見るまでに風にみたるゝ岸の糸萩

○ 美濃 各務不美子
朝戸出に野邊の細道わけゆけはつゆおもけなる秋はきの花

○ 神奈川 飯田白露子
米あろふ小川のほとり一さむらの糸はき萩きぬ枝たはむまで

○ 美濃 渡邊ひろし子
朝まだき閼伽くむ尼が墨染のみ袖にふれて秋萩のちる

○ 岩代 木内しのぶ子
うき秋などしらすらむさらぬだに淋しき宿の萩の夕風

○露ながら折りてたゆかんすべもかな君が垣根の秋萩の花　相模　藤原下枝子

○あさぼらけ露ふみわけて詣でたるみ墓さびしも糸萩の花　岐阜　遠山よしの子

○主や誰笛おもしろき窓の下月に匂へりまはぎしらはぎ　伯耆　錦織よし子

○月と虫に今宵の宿はまかせなん萩の下枝露しげきかな　東京　平塚白百合子

○月清し虫の音涼し秋はぎの花につらなる里の家々　越後　松永繁子

○立よらば虫の音絶えむ手折なば露やこぼれむ白萩の花　河内　竹内敏子

○嵯峨の野に萩が花裴咲きにけり行きかふ人の袖にほふまで　神戸　梶原玉子

○朝風にまはぎ糸萩露ちりて秋はきさけり庭の袖がき　伊豫　巽末子

乙

○なく虫を驚かさじと忍びよる袖にふれしか花のこぼるゝ　大阪　磯村さだ子

○久々にたづねし友がみなさけの床の上かざる露の白萩　兵庫　湖東澄子

○學舍の人となる日は來つれどもなほ去りがたき萩の宿かな　神戸　岡本信子

○白露のちるだに惜しき庭の萩を誰が心なの折りて去にけむ　横須賀　柏原美奈子

○ましらはぎこぼれて寒き夕野路にうちかへしみる袖の露けさ　大阪　木村春江

○鳥屋出づる雛ごり二つ羽にふれてみだれこぼるゝつゆのいと萩　美濃　目島まさ子

○朝まだきつゆふみわけて詣でたるみはかさびしも秋はぎの花　美濃　長濱ゆさみ子

○閑靜な數寄に住めりな誰が妹ぞ萩のいほりに諷ひかなで　美濃　瀬川たき子

○みだれては路やさざすと結ばれけむ背戸の垣根のあき萩のはな　東京　神田けい子

○糸萩の花さくみればたらちねの逝きにし秋をおもひいでつ　岩代　岸野さよ子

○なつかしき都の姉におくらばや出湯のみちの萩のはつはな　岩代　岸野つれ子

○月清みはぎ咲く宿の琵琶の音こぼるゝ花に打泣かれぬる　伯耆　錦織千代子

○名なし堤夕ぐれ寒し口なわのうごめく度に紅萩のちる　下總　秋月廣江子

○おく露の袖もたはゝとなるまでにみちなせはめて萩のはなさく　美濃　各務濱子

○つゆしもに秋の哀れぞみちてける手折るもをしき園の糸はぎ　東京　倉重千惠子

○うゐおきし形身の萩の花さきて母のいましゝ昔をぞ思ふ　東京　倉重喜美子

○すその原すゝきふきまく夕風に虫の音もする萩の下枝　東京　平塚つゆ子

○しら露の玉なさかしてなつかしき小女さひせり秋萩のはな　美濃　杉山藤枝子

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　美濃　杉山芳子
さをしかの聲きゝに來し山里の月ほの白き白萩のやさ

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　美濃　杉山靜子
うつろはんあすは知られさ手折り來て母にも見せん野邊の糸萩

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　相模　中島倚子
入合の鐘や谷間に消えうせてあはれをぞ増す萩の下露

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　福井　廣部小雛
はてもなき廣野に咲ける萩の花きのふに變る今日のにぎはひ

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　越後　水野やすゑ
初時雨庭の小萩のたわゝ日よ小傘かたむけ來ても見ませな

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　神戸　登與子
山賤が往來もさすがいとひけんせまき道しに咲けるしら萩

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　東京　青木たま
夕つゆにさやけき月をやどしつゝいろまさりゆく萩の花つま

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　美濃　文野さかへ子
獨一人むしろあむなる背戸の井をかこみてさけりまはぎしらはぎ

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　美濃　倚島敏子
背戸にしてすゑふろすなる賤か家のかきねうつくしまはぎしらはぎ

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　岐阜　芳翠敏子
萩のかげつゆの玉かげあざやかにうつりて清し朝月の池

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　美濃　平岡かん子
こころ〳〵秋はぎの花さく見えて虫の音よろし川添のみち

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　美濃　倚島曉子
こゝよりは吾家もちかしくろま下りてみつゝをゆかむ倚のほそみち

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　美濃　倚島小枝子
はれつるべ心してくむ音に垣れにたわむ萩はちりつゝ

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　兵庫　三宅久美子
奥さほきみ山のいほのかたほとり枝たわに咲く秋萩の花

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　千葉　盆子操子
御なみだ情にもろき母上に似たり朝の露をける萩

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　磐城　木幡きよ子
君かさぞみし影消えて音もなく萩の花ちるあめのたそがれ

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　伯耆　錦織さち子
秋十とせ長きかたみの萩か花散りてみだれて思出おほき

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　東京　石田柳子
大寺のあか井のほとりきよらにて露おもげなる萩もにほへり

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　神戸　紫子
秋風は涼しく吹けどいとど萩の花さかりを半ば散らしぬ

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　須磨　有村紫子
露しげき萩の細道ゆくかさになり〳〵かゝる村しぐれかな

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　須磨　有村さくら子
ひとりゐてめづるはをしきはぎのはな露ことなりてきみにみせなん

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　須磨　有村紫芳子
さしおひし母をいたはり萩のやどけふもたのしくくらしつる哉

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　須磨　有村基子
風ふけば萩の花原なみたちてわが行く袖につゆぞこぼるゝ

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　須磨　有村さみ子
白きひげかた手になでゝながめつるつゆしく萩に月はさえたり

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　神戸　藤幸子
秋風の吹くも淋しき春日野に露おび咲ける萩の一村

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　神戸　今西操子
あるじなき野路の白萩手折り行きて今宵宿りの友となさばや

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　兵庫　盆子
亡母の植にし庭の白萩は今を盛りと咲き出でにけり

○　　　　　　　　　　　　　　　　　　神戸　海野千鳥子
朝毎におく露しげき秋萩のうつろひ初めし昨日今日かな

○
秋風の吹きそめにける籬垣に早咲きにける秋萩の花　神戸 かれ子

○
秋されば時なゑがほに咲にけり庭のまがきの糸萩の花　遠州 疋田仲子

○
葉の匂ひこぼるゝ萩原の玉をにしきにかされてぞしく　神戸 鵜木ゑい子

○
年をへてかへりてみれば故郷の庭の野守さ萩咲にけり　茨城 脇坂須磨子

○
法の師の文よむ聲もにほふなり咲こぼれたる萩寺の萩　埼玉 横田秋子

○
虫のねもすみゆく夜半の月影をつゆ毎やさす庭のしら萩　下野 井上尚子

○
すみすてしふせやの主や今いづこやれしまがきを萩にまかせて　東京 石田龍子

○
物すごく松ふく風のそのなかに今を我世と匂ふ山はぎ　熊本 矢野なつ子

◎前號入選歌の正誤　雜題和歌天賞「猫」の歌の第二句、時は膝の誤植につき正誤す

猫　原 三幸子

をとめ子の膝にかはれし唐猫の
　妻こふことはいつ習ひけむ

（右注意を辱ふせられたる選者入江先生の厚意を謝す）

投書家諸嬢に

◎投書用紙　半紙に限る（巻紙などは平に御免）
但し一人一題にてすべて用紙をかへること

◎同字體　歌と、云はず、すべて漢字は階書に限る

◎同作者　其作物の傍に住所姓名を記載すること
短文、新體詩はもとより、兼題も二つとも別々の用紙にしたゝめて姓名を其傍に記すること

右規定に違反するものは、入選するも賞品を呈せず、又其投稿を沒書にすることあるべし、

◎同〆切　前月十日までに着するものを採る

本誌和歌兼題

佐々木信綱先生選
◎十一月　古寺霜　◎十二月　冬月

入江爲守先生選
◎十一月　雨中落葉　◎十二月　遠山雪
（次號に來年一ヶ年の兼題を披露すべし）

前號新體詩『人賞』の作者
『農女の謡』の作者　は大阪府中河内郡大戸村大字植付田口良寛方岡田つる子氏なる旨通知ありたり
以後投書紙に宿所姓名を脱したるものは沒書にすべし



日本女子大學教授 文學士鹽井雨江先生選

天

秋の夕

東京府龜戸五の橋 奈良八重子

裏木戸から出て、あてどもなく畦道を南へとたどつた。廣い野原を吹いてくる夕風が、絶えずひやりと横顔を撫でて、恰も滿身秋の氣を浴びせかけられるやうに感ぜられる、兩側の畑には、芋も肥えてゐる。柿の實も眞赤に熟してゐる。黍は早や苅られて、時々畦に白い茶の花が、可愛らしく咲いてをるのも見られる。

今しも夕日は名殘の光を斜に投げて、野も山も一面に赤く彩つた、戸室が岡の紅葉はパッと燃え出たやうに、美しい美しい黄や、樺や、紅やらに光るので、丁度錦の帷帳を張つたやうである。遥かの野路には、ほゝけ薄が風になびいて、ピカ〱と白い光を放つ。麥まく人であらう、遥かに小さくちらりほらりと見えて、鍬のみが日にキラキラと光つてゐる。

來るとはなしに、何時か勝樂寺の山門の前まで來た。十餘級の石段を上ると、御堂の軒の傾いた下で、六十位の婆さんが雞に餌をやつてゐる。秋風に吹き裂かれた芭蕉の葉が、ざわ〱と淋しい聲を立てゝゐるあなた、鐘樓にてりかへす夕陽の光は、いやが上にも淒慘の色を刷いて居る。

干柿がつるされてる物置小屋の前を通つて、寺の裏に出ると、入日はいよ〱雨降山にかかつて、見る〱寸一寸と、別れ行く世をば顧み勝ちに、悠々として落ちて行くに、あたりの山々は紫から紺青に變じた。富嶽も桃色から紫にと夕の晴衣をかへて行つたが、それも暫し、日は全く落ち、富士も程なく蒼ざめて、四邊は幽然として暗くなつた。元來た道へ歩をかへすと、寺の晩鐘が鳴り出した。ふと仰ぐと、西の空に、日の遺孽といふやうな明星。

が、巨人のやうにつき立つた大銀杏の梢にかゝつて、恰も明日の出日を約するかのやうに輝いてゐる。

（雨評）めづらしい景ではないが、筆は立派な文である。

地

寂寥

岩代國信夫郡鎌田村　木内しのぶ子

私の耳には、蜩の聲が殘つてる、綠蔭が殘つてる。が、目を開くと、荒涼な景が目に逼る。山奥であれば、桔梗の葉さへしをれ、尾花が綿のやうに開いて、フーンと散つて行く。何處に行くのであらうと見て居ると、栗の葉をスーとかすつて、豆に落ちたと見ると、またフーと飛んでゆく。城堀であつた篠原に、清い清い——身がふるふやうな、善い聲で、鈴虫がないて居る。秋の雲が靜々と流れてる。蓮華の臺のやうなのが、群を離れて飛ぶ。只平凡な雲とは見えない。中には、美はしい盞の甘水が湛へられ、もしもそれがこぼれたならば、雨の樣に靈泉が降つて、凡ての人は清淨になるであらうと思つた。この雲に乘つて、流れるまゝに從つたならば、かの山陰の黄金の谷に運ばるゝであらう。そこには、盡きせぬ泉もあらうし、不老の園もあらう。鳥が鳴き立つて、森に飛ぶ。ヒヨツと見ると、避病院の壁が、夕日に當つて反射して居る。路傍に色褪せた野菊が捨てゝある。おゝ、自分の薄幸に似て居ることよ。怨恨を與へし花、悲しみの花、私はこの花に小さき怨みを抱いて居つた。それも、もう昔の夢で、幽かな死の國から呼ばれる樣な心地のする今には、何の感じもない。氣のぬけた酒のやうなものである。心なく踏みにじつた。何だか人を嘲ける樣な小鳥の鳴音が聞こえる。蒼色の石の多い山道を、トボ〱たどつて、あてもなしに歩いてみた。悲しい風が絶えず薄い衣を吹く。鬼芒が招く樣になびく。川の底には、深く〱赤い雲が流れて、夕雲の空は黄昏れて來た。そして、シンョリと秋の寂寞を味うことが出來てくる。

（雨評）景も見え情も動いて居るのみならず。新しい氣の何處となくこもつて居るところがうれしい。

人

夏の朝

東京牛込區左内坂町三七　平塚いと子

朝ぎりがしッとりと、上野の山は繪畫のやうに薄くぼかされて、池の端の町家では、まだ夢のなごりか。瓦斯燈がボンヤリとともつてゐる。ボツリ／＼白い衣の人が、朝がほ見物であろう、山の方へと向つてゆく。まだ池の面はハッキリとみわけがつかぬ位。上野の鐘が一つ二つ、餘韻ながく池の面をすべる毎に、きりはうすらんで、小さい音と共に、紅白の蓮の花は、水をぬきいでゝ、クッキリと百輪千輪。花の中から吹き起るのであろう、朝かせは上葉そよがせて、かろく袂をなぶつてゐる。

（雨評）優美愛すべし。

秀逸

◎◎虫　　東京　倉重千惠子

學生の最も樂しみな暑中休暇を、私はつひ都に近い故郷に歸つて、五十日余りの日を暮した。そして、今日又寄宿舍の人となつたのである。今年の三月に歸つてから、一寸の間の様であるが、矢張故郷は懷しい戀しい、しかし、永い間田園生活に日を送つて、又花の都に歸つて親友に逢ふのも、樂しい嬉しい。

「都に歸れば、虫の涼しい聲を聽く事も稀らしかろう、どうせ永くは保つまいが」と、姉様が御情で下さつた虫は、今丁度いゝ聲で鳴いて居る。

日暮に同室の方々と一緒にテニスコートに一面のびて居る草の上へ遣水をした。其草深い露の風情を偲んで夜の風が冷やりと肌にしむと清い聲で歌を唄う、涼しいと云ふよりは寧ろ淋しい様な氣がする、「好い聲ねー」「どうしてあんな好い聲が出るのでしよう」「あれが若私だッたらねー大島様貴女のピヤノと合奏して日本一の音樂家の名譽を擔つて見せるに」と、例の田中様がまじめな御笑談、一同どつと大笑した、虫は何と思つたか、一きは朗かな聲で鳴いた、「誰れが御持ちになつたの重山様風流人ですねー」と思ひかけない舍監の御聲、一同は急に眞面目になつた。程なく就床の鉦が鳴つたので思ひ／＼に床を延べて寢た。自分も同じく床の中には入つたが、虫の事が氣になつて寢られない。うつら／＼とすると、又虫が鳴く、急に目が冴えて寢られない。寢むられないと、色々な事を考へる。今頃御両親はどんなにして御出だろう、姉様は弟はと思はず故里

の方へ想がはしる時、又虫がないた、さう〳〵自分は今都の人である。如何に戀しく共、懐しく共、歸りたいなどゝ思はず、専心に勉强しなければ、この暑い日中汗水出して働きになる御兩親や姊様に對して、申譯がない。もう思ふまい。あの虫とてもさうではないか、自分の天職を完うする爲め、たゞ二匹せまい籠の内に入れられて、塵深い都に持てこられても、別に恨む樣もない。のみか、元氣よく惜しげもなく好い聲を出して、人を樂しましむべく、天職を盡して居るではないか。昔小野道風は蛙に敎へられて大學者となつた。今自分は此虫の爲めに敎へられて、天職を完うせう。さうすれば、虫は自分にとつての善智識である敎師である。であるから、どの樣に苦んでも、毎朝新しい茄子の一片を入れて、この二匹の健康を祈り、そして天職を完うさすべく助けなければならない義務がある、しかし、あの虫の命は極つて居る、人間の力では何うしても冬まで置く事は出來ない。思へば、氣の毒である。自分等の心を樂しまする爲めに、此の短命な虫の生活を、僅かこの小さな籠の裡に束縛するのは、ほんとに慘酷である、いつそ野へ持つて行つて放してやろうか、いや〳〵、若しも他の强い虫の爲めに害を被つて、みじめな終りを示すかもしれむ。どうしようかしらむ。さうすると、一岁不便である、人間さへ定命五十としてある。朝に生れて夕に死する蜉蝣に較べれば、秋だけで死んでも長命である。人が花の都で一生を終るのも、草深い田舍で土と化すのも、皆運命と云へば、この虫も小さな籠の內で生涯を暮すのも、運命であると絕念した。まだ虫は鳴いて居る。音樂的に鳴いて居る。自分と同じ樣にもと居た野原が戀しくて鳴くのではないだろうか？親や同胞に逢いたいので鳴くのでないかしらむとこんな事を考へながらいつ寢込んだのやら……ふと耳に入つたのは起床のベルであつた。

虫は鳴いて居る。しかも自分が昨夜更けてから實に哀れに聽いた其聲とは、まるで別物の樣、はつきりした聲凉しい聲。すれば昨夜のは夢？現？

（雨評）工夫せられたる虫の聲に候かな。殊に、夜と朝との變はりたる聞き方が面白く候。筆も整うて候。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

○◎落花

美濃　加藤愛子

自分は今椽に腰掛けて、朧夜の大空を仰いだ。今宵は春も行くのであらう、何とはなく夜の色が悲しい、無量の寂しさは、ひしと四邊を罩めた。ほの／＼と白い庭池の水が、ゆらりと動いて、而かも音なう。靜かな浪は、だん／＼と大きく岸に寄せくると思へば、櫻の花が二ひら三ひら、ハラ／＼と水に落ちて、夢の樣な水輪を描いたが、直ぐに消えて終つて、また靜閑は一人増すのみであつた。あゝ何で今宵は斯んなに悲しいのだらう。自分は知らずの中嘆息を洩らした。そして、眼を瞑つて、深い想に沈んだが、まだあの落花が描いた夢の樣な水の輪が、ちらついて、自分は何を考へて居るのやら、何を考へて好いのやら、胸は絲のやうに千條にも亂れて、今宵のこの悲しい情思と、何ともつかず悶え苦しむ自分とは、幻ではないのかと思ふ。ホンに幻の樣であつた。ともすると、またあの落花が、ふと眼をひらくと、二片の花が水に落ちて、輪を描いた所であつたが、俄かにこの水輪を見るのが辛いやうで、自分は母にも他の人にも自然にも捨てられた孤し兒ででもあるかのやうに思はれて、身體が震うたので、はたと瞑つたが、如何してもその影か去らない。否いつ迄も自分が此の世に存らふ限り、永久に去らない。靈魂を死神の手に握られた時でなければ、去らない。或はそれでも去らないかも知れぬ。その影が自分にこよなき寂しさと悲しさとを胸の底深う印象せしめたのであつた。自分も人の子情の子である。戀も知つて居る。けれども、戀の浮草の香に醉うた事はない。愛も知つて居る。けれども、愛の花の蜜を手に受けた事はない。情も知つて居るが、情の泉の水は一滴だにも人より味うた事はない。悉く僞りであつた、浮草には毒があつた、花には刺があつた、泉の水は濁つて居つた、かくて、自分は此の世を悲觀した。此の世を寂しいものと思つた。そして、自分は此の世から捨られた否自分が捨たのであるが、自然は自分を捨てずに、野には百花七彩の色を競うて咲き亂れ。自分の爲の樂園として、森には泉湧き自分の渇を醫し樹木に果實成つて自分の飢を凌がしめた。自分はさう確心して居るのである。自分に一人の母はあつた。この母は、愛の光と情の影を充分に授けた。

されど、母も人とある以上、儚い運命は廻つて來て、昨夕涼しい路を辿つて、天へ昇つて終つたのではないか。あゝ、思ふまい、語るまい、自分の願ひは自然の膝に抱かれて、母の御傍へ行きたいのである。存らうて居れば、この痩せたる胸に、何んなに擲うたれるか。打たれて〳〵、苦しい悶死に終らなければならぬ。寧ろ花に生れた方が幸福である。安心であつた。生るゝより、落ちて枯れるまで、美くしいではないか、心はいやが上にも亂れて、瞑想にもえ堪へず、つと起ち上つて、歩まうとすれば、ちらとあの靜かな水面が、眼に寫つて、又花がひら〳〵と水輪を抽いたやうに思はれたので、瞳を花の梢にそらした、いづこの鐘が、ゴーンと長う響いて、微かな風か梢を渡ると見れば、花は吹雪かとばかりに散り亂れて、庭も池も埋めたので、もう好からうと水面を瞶ると、花の上にまた水の輪が見えて、何か囁くやうに、あゝ今宵は何でこんなに悲しいのだらう。

（雨評）　未だしきところはあるが、苦心せられたる文と見えて、うれしい。

＊　＊　＊　＊　＊

◎雁來紅　　岩代　樋口雪子

雁來紅が咲いた。

眞の花ではないけれども、私は花だと云ひたい。燃えさうな葉面に、萠黄と海老色とが入り混つて、目が覺めさうである。けれども、その色がシンメリと人の身に逼るやうに深い〳〵感情を與へるのは、何うしてだらう。あまりに強い色で有るまいか。私は此花を見ると、限り無い悲哀を想ひ出して、胸が破りさけさうになる。せめてもの思出に、書いて見やうか。もう今年で五年になる。丁度その日は空が晴れて、籬の野菊がしほらしう咲いて居つた。白い秋花が、蝶の亡骸の様に撒き散らされてあつた。たしかに敏夫のいたづらでしたらう。敏夫は正服にしドーランを下げて、甲斐々々しい旅行姿で、私の書齋まで寄つてくれた。

『姉さん、お土產は栗と山葡萄をとつて來るからね』つて、出て行かうとして、私の花瓶の雁來紅を見付けた。

『アラ、雁來紅欲しいな、帽子に挿むから。』

眞紅なのを一房とつてやつた。

『氣をつけて、山を登りなさいよ』つて、言ふうちに、最う飛び出して、威勢よく行つてしまつた。何だか淋しい日でした。空は晴れても、日は暖かでも……。

一体敏夫は、スラ〲と育てられて、非凡な才能と秀麗な容貌とをもつてゐる有望な少年であつた。彼は假面を被つたものゝ多い社會を嘆いて、將來は國務大臣になつて、美しい國として見せると、小さき心に誇つて居つた。彼はまた人の爲めに涙を惜しまぬ美しい心情を以つて居つた。熱情の漲る胸の愁も悲も、詩となり歌となり得たであらう。

夕日が落ちかゝつて、秋の雨が淋しく降る夕であつた。しつぽりぬれた筆跡のにぢんだ長い手紙がとゞいた。年に似合はぬ書振りに、感嘆の眉をあげたが、ハラ巻き返す文の間から、雁來紅の押されたのが、〲落ちた。二三日に下山すると云ふ事であつたが、歸宅すべき日に歸宅しない。虫が知らしたのか、虫の鳴聲が妙に氣に懸りて、安からぬ思もして居たが、あゝ、果して敏夫は再び歸らぬ永久の旅に出たのであつた。夢でなからうか。姉さん今つて歸つて來はしまいか。ほんとに夢の樣であるが、その晩は母と一處に身も世もあらず泣いた。聞けば、敏夫は濃霧に襲はれて、千仭の溪底に落ちて終つたのである。土地の物共に探させて、かつぎ込んだ夕べ、「あゝ、こんなになつて歸つて。歸つてもだめだは。敏ちやん」て私は泣いた。ドーランには栗が一つぱいある、私のお土産に……。

パツと開いた瞳の長い、つぶらな眼、紅深い海棠の蕾のやうな口元から、一の字の眉まで、非凡な才を表してゐた。美しい麗しい敏夫は、十六の若き生命を、吾妻の谷に葬つてしまつたのである。

あゝ、山の溪が目に見える。雲凍り、雨痛き溪底に、曲げた足をなげだして斃れて居る人の、その瞼は抑も誰が閉ぢたのであらう。凍つて行き冷いて行つて、敏夫は、終に永く眠つて終つたらう。人呼ぶ聲が聞えたなら、火を焚いて血を温む術もあつたらうに、母にも縋りついたであらうに、靈があると、雷鳥が飛んでも、岩隱れた人は、永遠に山を下ることは出來ない。雲をつんざく吾妻の峯は、威容嚴然として聳ゆる限り、悼むべき人の亡靈を守るであらう。

夜通をしたランプの火が、蒼白く疲れた色にしばたい

いてゐる。未明の空の光は地を射らない、隙も白らまない、室はまだ〳〵夜の領である。こんな時には必ず雁來紅と吾妻の溪とが目に見える。思出の花……私の胸に示して、今年も色づいた。今年ばかりでない、永劫に咲いてほしい、色があせる事のなく、これからの秋毎に………。（終）

（兩評）情は深くきこえたり。

○◎お洗濯　　長野　千村ちゑ子

暑中休暇も僅になりました。もう私は二三日で、また街へゆくのです。今日は姉さんに手傳つて戴いて、お洗濯をはじめたのです。宜い天氣で、暑い日がちか〳〵と照りつけます。

梅や櫻の靑葉の下で、大きな盥に湯を汲んで、姉さんは最う始めていらつしやる。「妾も、洗ふの母ちやん」と、美ちやんは、姉さんの前に屈んで、小さい手でぴちや〳〵と水をませはじめます、私も姉さんの傍に盥を並べて洗い始めたのです。

葉かげを洩れる日光が、姉さんの白い手を射て、洗濯物の赤い切れが、美しい色に輝きます、草むらの中から最う、虫が滋々と鳴いて、さら〳〵と吹く風は、寂しい秋の韻を含んでゐるのです。私は、なんとなく寂しい思が、胸に一ぱいになつて、「姉さん寂しかないの」。ときゝますと、「いゝえ」と姉さんは莞爾りして、「まあ、美ちやんは衣類をぬらしていやですよ」と美ちやんに云ひ云ひ、洗つていらつしやいます。

「でも私、なんだか寂しくて」。と云ひますと、「秋風が吹くと寂しいものね」。と姉さんも泌みりして、「街へゆきたくないの」。「いゝえ、でも家ほど宜いとこは無いもの」。と私は思はず泪ぐまれるのです。

「ちゑ姉さん泣いたの」。と美ちやんが笑つて、罪なく云ひますと、「どうしたの此の妹は泣いて」。と姉さんが云ひますから、「いゝえ」。と私は泪をふいて、「美ちやんは嘘よ」。

洗つたものを、裏の小川へ洗いにゆきますと、水は美しい砂の上を流れて、目高が幾つか柳の下をちら〳〵泳いでゐます。私は、裾を少し捲くつて、流れの中で濯ひでゐますと、ふと美しい秋花の花束が流れて來ました。拾つて見てゐますと、直ぐ川上の橋の上に、白い浴衣の人が莞爾りして、私の方を見て

いらつしやいます。夫れは私の義兄さんですの。川岸の細い路をだん〱と近づいて「お洗濯かな」。と莞爾りして「ちゑさん美しいでせう」。と仰しやいます「え丶、流したもの義兄さん」。「僕です、戀人かと思つたですか」。「まあ」。と姉さんが美しい眼で眺めますと、は丶丶と笑ひ乍らつと美ちやんを抱いて家の門へ入つていらつしやいました。

「義兄はお氣樂ね」。と私が云ひますと、姉さんは赧くなつて「子供の樣ですの」。

おひる近くなつたので、畑へ出た人達が、幾組も皈つて來ます、みな氣樂な高咄しで、夏草を蹈み蹈み、自がじ丶家路へ向ひます。

物干竿へ洗濯物をかけて家に來ますと、もう十一時でした。

（雨評）可憐。

◉病　薬

大阪　木村春江子

廿六日、小さき人、赤き人、見る〱環をなして、くる〱と空中に舞ふと、驚きて、目さむ。五時が鳴つた、何んだか頭が痛む。ともすれば、よろめきさうなのを、氣をはげまして、掃除をすまし縫ひかけの衣を取り上げたが、針の運は進まぬ。午後床につく。しなければならぬ、お仕事が澤山あるのに、惜しい氣がしたけれども、仕方がない。女鑑をそつともつて來て、ねながら見る………「赤い夕日に照らされて友は野末の」…可愛い聲に目がさめた。いつのまにやら電燈がついてゐる。身体を斜に両手を正しくのばして、女鑑はすぐ横に正しく置かれてある。枕元にはきれいな、はり器に、すいみつ桃とりんごとが十ばかりと、すゞしそふな器に、波々とつがれた水の中には芭蕉の實が。…まだ其横に青々とした梨と小さな赤い、いなだもとが………あら花樣（友の名）からの御手紙もある…今にはじめぬ事ながら、繼母樣の厚い御情、ひし〱と胸に染みこんで感謝の涙が頬に傳ふ。人のけはひに見られてはと、夜着の襟に面隠したが、入らつしやつたのは、繼母樣と醫師とであつた。全く風邪なんでせう？と繼母樣のお尋ね、

「さようで」と醫師の答はそれつきり。

廿九日、あの夜より發熱して、漸々昨夜より正氣に復した。看護婦の言によれば、樣々のうは言に、さ

ん〳〵繼母樣をお泣せ申ししたとの事、あゝほんとにすまない。たとへどんなに切ない事情があつたにしても、一たび他人となられた母樣、どうして今の繼母樣の御恩とくらべられやう。夢にも慕うては繼母樣にすまない。あゝもう思ふまい、決して〳〵……正氣なきうは言に、たとへ母の名を口にしても、この愛が。胸には繼母樣の堅い御慈愛が滿ち〳〵て居りますもの。繼母樣の御情こそ、死んでも忘れませぬ、繼母樣、おゆるし下さいませと夜着の下に思はず手を合した。お藥をめすんですよと看護婦の聲、血の色したまつかなのを一口にのんで、盃を返した。看護婦は卅四五、横顔がどつか母樣に似てると思つた。あらもう母樣の事は思はない筈だつたに、あふむきになつた私、じつと目を閉ぢた記憶に殘る懷しい詩を思ひうかべやうと………

あくらの濱の埋み人しきりに人の見まほしきと瞳に浮ぶ文字は次第に消ゆる。服藥後廿分、私はまた睡眠の人となつた。

（雨評）　情はよくきこえたり。筆は今一層。

◎みのもの瀧　　河内　竹内久子

いみじかりける人の子が汲みし酒のなごりの瀧つ瀬を掬ひ、せめては此の暑をしのがんとて、豐子の君節子の君と語らひ、水無月の末つ方朝早く學窓を出て、そよ吹く風に袂をなびかして、梅田停車場にかけつけぬ。まつま程なく、くろ煙をあげて滊車はきたりぬ。いそぎ乘車して、はや池田につきぬ。こゝにて馬車に乘り、みのもにむかひぬ。車中のきたなき事言はん方なし、しばし忍びて行くほどに、ほどなく靑葉しげき山のふもとにてとまりぬ。下車してあたりを見れば、日ははや東の空に上り、靑葉若葉のつゆを色どり、吹く風に日の影のこぼるゝ心地して、時鳥の聲をり〳〵きこゆ。

　時鳥なく音かすかにきこえきて、
　　ひるしづかなる夏の山みち。

などゝくちずさみ行くうちに、長き川原道に出ぬ。川風いと心地よく、涼しさ覺えて、心さへ足さへよみがへりぬ。やがて又、鳴神の立出んと思るばかりにおどろ〳〵しき響のすなるに、折から山風颯と吹き颪して、まだきに秋や立ぬらむと打かこたるまで涼しうなりぬ。天つ女神がまだ裁ち、縫ぬ白絹いく

疋とも知らずかけ流したらむごと、うち見やるに、近づけばうちはかるべくもあらぬ高巖より、幾筋ともわかぬ白がねの水の天地をどよまして落ちたぎりたる、いかづちもともに落つらむばかり思る、立ちのぼる水煙り雲となりて、みな上に立迷ひ、霧となりて瀧つぼのあたりうちこめ、木立さやかに見えわかず、藤袴の巖かどに匂ひ出たるを、鳥のかすかに聲もらしたる、たゝならずおかし。

ぬれぬとも猶近よりて見てゆかむ
しぶきにくもる瀧のしら糸

そのかみの物語思ひ出て、もしや病の藥にもやなどゝ味ひみるもおかし。今しも夕日なゝめに木の間をもれて、かゞやけば、雨にぬれたる山の木の葉、ことくにきらぬきあひて、をかしきに、瀧のしぶきのあやどられて、くれなゐ紫にうち匂ひたる、げに〳〵つきぬ眺めになむ。また來らん年にもと約して歸りぬ。

おちたぎつ瀧のしぶきを吹風に
小笹とび散り夕日色とる

（雨評）先づ紀行文として整うて居る。

◎えぞの初夏　北海道　清水きよ子

さすがにこゝは、蟬もなかねば、夏としも思はれず、涼しきあけ暮れを遠き學びやよりかへりこし從妹達と、笑ひ興じて一月あまり夢と過しぬ。風の音におごろかされて、從妹たちは、如何に暮らしゝ月日ならんなど、口すざみつゝ、あわたゞしう行李とゝのへて、南にかへり去りぬ、かへりみがちの姿を、たけなす雜草の彼方に、見送りては、獨りさびしさに、早生の色美しき林檎ばやしにわけいれば、四十雀なきて、やはらかき日かげには、まはぎの花ざかりなり。短き哉、えぞの夏。

（雨評）簡潔にして、趣きあり。

◎月夜の感　富山　萩中夏子

きのふは東、けふは西と花にあくがるゝ人々の、入相の鐘の音に立ち去りし頃、霞の衣の裾をとほして、匂ひ出でたる春のおぼろ月。……雲の峯忽ちに崩れて、沛然として來る夕立の、又忽ち去りたる夏の夕ぐれ、軒端の水未だ引きらぬ間に、はや中天にあらわれたる清涼の月。……又、古枯らしの音寒う吹き荒るゝ冬の夕、寂しう立てる松が枝に懸れる、氷の如

き片割れ月。……等さま〴〵の月ありて、何れの月」を觀ても感いと深けれど、とりわけ、秋も半ばとなりて野山の景色何となう寂しく、萩のうら風身にしむ今日此頃、小窓を押し開けて仰げば、蒼茫として果てしなきみ空に、獨皎々と冴え渡る明月、そが前を弊もたえ〴〵に啼きわたる雁が音を聞きては、一しほ昔の事ども忍ばれて、悲哀やるかたなく、いかで腹を斷ざるを得べき。

いつみても觀る月には變りなけねども、此の秋の月ばかりはなどて、余計に物哀れに思はするならん。かの古歌人が「月見れば千々に物こそ悲しけれ」と咏みしは此の月。又英雄が「霜滿軍營秋氣淸」と吟せしも亦此月なり。李太白の「把酒問月」の詩、又仲麿が「天の原」と咏みたるも皆是れ此の月にあらずや。

妾が今眺めつゝある月は、昔の人の眺めたる同じ月なりと思へば、過去世を追想し、月が何となう親はしく戀しく感せられ、古人の情を感得するの想ひあり、あゝ美はしき、なつかしき天上の明月、滿ちてはかけ、缺けてはみちつゝ長へに渝らず、悠久に人を慰籍す、此の宏大なる自然の絶景を妾等が拙き繪筆にうつし能はざるこそ實に口惜しけれ。

（評）筆はよく整ひたれど、平凡なるををしむ。

ゝゝゝ○病床より獨りの妹に

和歌山　谷田峰子

宵よりの秋雨、せう〳〵として、庭の梧葉にさびしき音を立て、草根にすざく蟲の音は、切々喞々として、さながら訴ふるごとく、啼くがごとく、悲しむがごとく、愁ふるがごとく、聽くものをして覺えず暗涙双袖をうるをさしむる今宵、妾は藥の香高き、病室の中白きベットに横はり、淋しき思ひにかきくれ居り候。

妾が錦をかざりて、歸るを今か今かと、待たるゝいとしき獨りの妹に今日此樣な手紙を送らなければならんとは、お前はさぞなげくだらうあゝまゝならぬは浮世にて候。

追想すれば妾は中秋旣望、草深き山村に、呱々の聲をあげてより、十有九年、其間實に浮世の荒波と戰つたよ、妹の生れし年、母樣はあの世に行かれ妾は十一才の時、杖とも柱とも賴みし、父上も一つの卒塔婆と、一杓の水とを以て、合掌せらるゝ、一壤墓の主となり了り、あとは妹とたゞ二人のみとなりはて候、されど親の殘しし、可なりの財産と妾が胸の火は、遂にもえ立ちて、いとしき妹と、花さき出せし故山とを、あとに見て、此所帝都に來りて、早や三年の春秋を送り、まああと一とせと云ふ今日までこぎつけしに、天は無情よ、二人しかなきおとゝいの、遠く西東に別れて、成功の彼岸をめざす妾を、病魔

の爲とならすとは、幼な心にも「私はきつとゑらい女となつて、お父さんや、お母さんの名をあらはします、どうか草葉のかげでゝも、見てゝ下さい」と旅立つ父の枕元にて、云ひし言の葉のまだ忘れざるに、甘くもなき藥と親しまなければならんとは、何たる薄運の姿だらう、もしか此病の永久に、癒ゆることがなかつたなら、父母の膝元に行く姿はさもあれ、叔母の家で、つらき思ひなして、指折り數へて待たれて居る、お前ばかしが氣になつて〳〵、涙は止めどもなく流れ出でゝ候。

あゝ齒がゆくも如何せう、もう思ふまい、嘆くまい、泣くまい、又しても胸のいたみ初めて……筆をなげやりし折しも、看護婦の入り來りて候。さらばいとしき妹よ！

ゝゝゝ〇「樂しき秋の小村」

相摸　服部八重子

龍田姫の返せる袖裏に、金色淡き秋風起りて、さら〳〵と稻穗のそれと〳〵が觸れぬ、黄金の如き響はやがて村一面に溢れて、平和な黄昏れ村を唄ふ、はた千代を奏でる小雀の二羽三羽、ひらひらと舞ひ上り、舞ひ上り、又宿りぬ。

あゝ樂しきは秋よ。

この十餘戸の小村の秋を獨りで畫きしかなんぞの如く、立たせ給へる案山子の君。

（秋を悲しむ詩人は來れ、失意に泣く佳人は來よ、共に戯れ遊ばんものを、語らんものを。）

あゝ優しき案山子の君よ、さても美しの言葉よ。

「秋の喜多村繪の様景色――
稻の音まで金の様――」

微に、土橋が水に落ちて聞え來る乙女子が可愛い唄ひ聲、秋の譜、面白く、風に一段調子を張り上げぬ……

牛は背戸に、夕鷺は佐久良川上に浮んで、日は山村の一角に落ち入る。

この十餘戸の小村も、やがて其が中に沈みぬ。

靄のほろ〳〵と散つて、もう二十日の月は鎌を磨いだかの光りを水に映して、揺ふ延びては縮む、夕鳥今歸る。節面白の鄙歌、宮居の森を破つて太皷の響、笛の音、小さく、大きく、交々明日の祭りを踊る。

かくしてこの樂しき小村は平和の中に暮れつる。

あゝ、面白しの秋よ。

ゝゝゝ〇村の半日

神戸　操子

「情ないぞへ、他人と暗は、ア親と月夜はいつもよいイ――」

餘韻長く木魂に響いて、身に沁み渡る様な美しい聲がする。思はず針運ぶ手をやめて、顔を上げたが、生憎聲の主は日覆ひに蔽はれて、影も見えぬ。で、立ッて、椽先から、茄子や胡瓜の今も落ちさうに熟ッた畑越しに、街道を見ると、少し西の方に行ッては居るが。後姿はハッキリ分る。丈ケは高いが、未だ二九と迄は行かぬらしく、燃れ〳〵に成ッた帷子に、剥げた赤入の帶を締めて、頭に白手拭をかむッて、甲斐〳〵しく牛の手綱を取ッて居る。今一人は彼女が弟でもあろう、十餘りの男の子で、俗に云ふ甚平やうの物を着て、これも頭に手拭を手に莖の長い山百合の花を大切さうに持ッて居る。二人の影の寂し

い事。日盛り過ぎの暑さも一しほ酷しい今頃、街道とは名許りで、行き交ふ人も稀な此の道を、彼の姿と云ひ歌と云ひ、配合が妙に、名畫伯の筆をかりて來た様な感じがする。今彼女は什麼な氣で、悲哀極まる歌を唄ふたであろう、併も淸い涼しい聲で、知らず其境遇に依るか、將た無意味か、否斷じて無意味とは思はれないのである。あゝ彼女も免れぬ浮世の運命に甘んじて泣く人の人の子か……　唯見ると、三ツの影は漸々遠く小さく成ツて、思ひなしか、いよ〳〵淋しい畫である。やがて、曲折して鎭守の杜の大杉の陰に隱れてしまつた。私はホツと吐息をついて、云ひ知らぬ想ひに耽ツて居たら、奥の間でがり〳〵齒ぎしりの音がする。叔父様が晝寢の夢を貪ツて居らツしやるのである。驚いて元の座に復り。八ツ口を裄けにかゝツたら、早や臺所では、性急ちなお祖母様が夕餉の支度をなさる音が忙しさうである。

○日記の一節

對馬　畑島郁子

蟬の聲かしましき午後三時頃、我家の高殿に、涼しき風を浴びながらの合奏。曲は青柳……母上と姉君とは箏を、叔母上と吾とは三弦を。「梓に數ある靴の音」と、昔ゆかしみつつ餘念なかりし折ふし、軒近き蜜柑の木の繁みに思はぬ小鳥の悲鳴!!　こはいかにと心もとなくて、聲する方に眼をうつせば、今年十一なる弟の、いと、にこやかに、さも嬉しげに。見れば、手には小鳥の獲物、聲高らかに「小鳥を捕へたり。」と實に、無邪氣なるほこり顔。其愛らしさと、はた、薄命なりし小鳥のあはれさとは、いたく吾が心にひゞきて、彈く手思はず亂れぬ。

●漢詩和譯

小森松風

胡笳曲　王昌齡

城南虜已合
一夜幾重圍
自有二金笳引一
能冷二出塞飛一
聽臨二關月一苦
淸入二海風一微
三奏高樓曉
胡人掩レ涙歸

幾重かこめる城南の
敵もあはれに聞きつらむ
調べ妙なる出塞の
曲のみならで吹く風の
淸きにあひて海原の
月に澄みゆく悲しさに
え堪えず抽をしぼりつ
圍みを解きて歸りしか
三たび奏(かな)でゝあかつきに
たかきに見れば影もなし

新體詩

日本女子大學教授　文學士鹽井雨江先生選

天

秋夜感懷

越後國中頸城郡高城村　水野やす子

春よ、虚榮にあこがれて、　さすらひ出し都路の、
秋風立ちて病得て、　こゝに故郷の古き部屋。
燈火淡く、月細く、　垣根に虫の聲低く、
あたり靜に人なくて、　孤寂にたへぬこのゆふべ、
父は止まれと咋日いひ、　師は來よとか今日も文、
呪はれたるか吾か宿世、　明日の運命誰しらん、
誤りたりな、いたづらに、　成効の影追はんとて、
はかなき望大にして、　たゞ奮闘の息荒く、
夢に偉人の面描き、　現に驕奢の生思ふ。
才媛古來いくたりぞ、　影を捕へん術ありや、
かくして我は煩悶し、　かくして我は悲觀せり、
厭世徑近くして、　墮落の淵は深かりき。
危かりける半生よ、　故山悲秋の風きけば、
痛恨深く身にしみて、　青春の血今冷えぬ。
神の寵のあつかりし、　我か運命を、今知りぬ。
足るを知らば、何の望。　分に安んず、何のもだえ。
詩に捧ぐる我か身ぞと、　思ひ定めて見上ぐれば、
空には清き月の影、　地には白し露の玉。

（雨評）感懷強くひゞきたり。

地

少女怨

河內國北河內郡山田村　竹內敬子

錦の小袖、綾の帶、　玉のかざしもとりそへて、
今宵嫁入る少女子の、　胸のなやみを、人知るや。
門につどひし里の子は、　昔し昭君胡の國に、
行きし思ひを知らずして、　少女幸よとさゝやけり。
運命のせてかけり行く、　車幾輛音たてゝ、
野川の橋を渡るとき、　人こそ立てれ柳蔭。
森の下道しばらくは、　少女の車かくろひて、
再び森を出づる時、　御空の新星またゝきぬ。

あゝこの夕べ、少女子が、　運命とはに定りぬ。
唇紅のあせたるを、　人は幸よとさゝやけり。

（前評）感情は動きたり。

人

秋の夜

美濃國關町 新道松田方　松田菊子

紫のとばりはたれて、　降りたゝす夜の姫神、
平和げる秋のみ空は、　小羊の夢にも似たり。
東のかすめる月は、　たとふればたをやめの如く、
乳色の絹なすおもは、　ゑむところ萬象光あり。
また更に蒼冥の空、　紫の星坐しづかに、
集ひよる聖きひとみの、　またゝくは何の啓示ぞ。
高樓は露にうもれて、　風しづか、枝に通へば、
さゆらげる其のつど、　みそでの玉のこぼれくる。
七草を縫ふ水のせゝらぎ、　似たらずやか細き指に、
濕きいのちをこめて、　かきならす妻琴の聲、
いひ知らぬ希望の叫、　かぎりなき慰安のかげ、
歌秘める唇ときて、　秋の夜の光に酔はむ。

（前評）痴の新体詩、詩才は毎時見ゆれど、情や〻足らず。心の底から我が情を動かして、さて作るやうにせられよ。さらば、長足の進歩をせらる〻ならむ。

秀逸

失題

東京　平塚白百合

あしの穂わけてさやくと、　夕もやせまる大刀根の、
秋は淋しき渡船場に、　みえぬみふねにみゑぬ歌、
おせよ五丁ろとまりはみなと、
みなとよいとこ、あへるとこ。
一鳥ひくゝ蘆花かすめ、　水まん〳〵とくれゆけば、
月は東にしらみそめ、　秋冷骨にせまるかな。

（前評）詩韻ふかき渡船場の秋色に候かな。

○◎小琴

下野　井上尙子

月の影もるくさの屋に、　塵うち拂ひ、小椽さき、
ふりし小琴に柱を配り、　月に向ひて想夫憐、
しらべをそれと垣の外に、　立ちきく人もあらなくを、
吾れにもあらで面はてり、　何にはぢらふたゆたひぞ。
夢とすぎにし春のよの、　つきはかすめる欄に、
横笛とりて立ちましゝ、　面影そゞろしのばれて、
その夜の曲をかなづれば、　胸に奇しき思ひ湧き、
調べのみだれ烈しくて、　ひくにたへゑぬ琴の緒や、

たちなば胸のやすからん、庭の小萩になく虫に、
うたをまかせて、松風に、曲をまかせて、寂莫を、
十三絃に秘めおきて、小琴をとはにすてん哉。

（雨評） 小琴の恨み、今一層心の底よりの情を待つ。

◎盲者　　埼玉　高橋豊子

世の人々は、春來れば、霞と匂ふ花を見て、
錦の雲と愛づれども、あはれ盲者の吾身には、
いかで眺めん咲く花も、世は永久の暗にして。」
卯の花垣は雪をつみ、螢は星と飛ぶ夏の、
この明け暮を世の人は、趣味や深しと囃せども、
あはれ盲者の吾身には、世は永久の暗にして。」
世の人々は、秋來れば、み空に清き月を見て、
ますみの鏡と愛づれども、あはれ盲者の吾身には、
いかで眺めん照る月も、世は永久の暗にして。」
見渡す限り白妙の、冬の野山を、世の人は、
寒さも知らず興がれて、銀の世界と囃せども、
あはれ盲者の吾身には、世は永久の暗にして。」

（雨評） よく整ひて出來たれど、感なほ淺きをおしむ。

◎わずらひ　　美濃　松田文子

花の小琴をかき抱き、佐保姫春を逝にしより、
心の病ひつのりきて、立ずなりけりわれつひに。
六月藤も散りはてゝ、庭の牡丹の花さけば、
癒るめ知らに狂ほしや、青葉に入りぬわが病ひ。
朝とも知らず夢のごと、夕べ覺えずまぼろしの、
只眠り只さむれども、われや此世の去り難き。
元より消る露なれば、惜まじものをなまじひに、
わを弄ぶ死の神の、罪のみ心知りがたや。
あゝさりながら故郷に、學の休みのわをまてる、
弟やいかに妹やいかに、思へばそゞろ恨めしき。
夏もいつしか暮れはてゝ、秋風立てば昨日今日、
世は蕭條の色みちて、枯骨に似たり病める身は。
香はあらぬわが魂を、誘へとこそは祈れども、
それさへ神のさだめとや、嗟まどはじのわが世哉。

（雨評） 情は一さこほりきこえたり。

◎落人の歌　　岩代　木内しのぶ子

いかばかり分け迷ふらむ、名にたてる
春の霞のうらを漕ぐ舟。
それは釣する海士人の。霞に迷ふ海の上、
われは木芽に道失せて、荒野さ迷ふ落人や。

桔梗か原は秋草の、花の冠りの紫を、
深き緣しと立寄れば、こゝにも露は繁きかな。
見よ日は西に影落ちて、夕べを渡る雁が音も、
天雲に道や迷ふらむ、と渡る聲の亂るれば。
されば野末の月見草、花の雫にぬるゝとも、
霜おく石に枕して、寢るも一夜の夢なれや。
淺間の煙立つ見えて、信濃は遠き群山の、
そかひに落つる秋の日や、落人われに光なき。』

（雨評） 面白き題なり、調も詩趣あり。されど、なほ感情の足らざるををしむ。また言ひまはしの少しく練熟を欠くところあるををしむ。

◎秋のいろ　　下總　秋月廣江子

只かりそめの旅とのみ、思はぬ空にさすらひて、
流轉名もなき寒村に、驚かれぬる秋の色。
野きえ山きえ夜のかげに、村の歴史は掩はれて、
椎の大木に雨のみや、秋のいたみを告ぐらし。
宿の行燈の暗ければ、うつるも淡き我が姿、
世のつめたきはなれし身も、そゞろに寒う覺えたり。
されば、夕暮道づれの、國は何處ととひましし、
京のなまりをなつかしみ、そとゝり出でし歌袋、

うたの姿の亂れしを、現ともなく誦すれば、
夢多かりし思ひ出に、悲しき胸をいだきつゝ。
寂寥せまる雨の音に、今宵の秋を痛みては、
幾日かさねし旅衣、そゞろに寒う覺えたり。

（雨評） 着想は面白し。

◎花櫛　　下總　眞行寺　百合子

軒に蟲なく信濃の國は、風に寒いが木の實がうまい、
芒がくれの富士見ながらに、ぬくい温泉に肩まで浸たす。
餅の十五夜、月見の宵は、雁が鳴くさえ諏訪湖の空に、
木曾の櫛賣檜笠をかむり、雪の面輪で櫛めしませと。
妹にやらうかこの花櫛を。

（雨評） 一種の詩趣ありといふべきか。

◎『鈴虫塚』　　岩代　樋口雪子

秋は月よきよき里の、早き雲ゆく秋の夜を、
かなで出てつる鈴虫の、萩の下床灯を入れて。
『捕りぬ』と聲も嬉しげに、籠にふせてほこりしが、
恐れを知らぬ虫のまた、同じ高音に啼き出でぬ。
さはれ敢なく捕はれて、せめては籠に入ましを、
狹きひとやすみ餓ゆるとて、食むとも茄子に味あらや。

今宵は更けて、荒庭の、細りゆく音を、肩寒き、
臥床の中に聞にしが、眠りを誘ふ樂聲と。
現、きゝつゝ、又暫し、夢に入しが目ざめきて、
ねくたれ髪を梳りつゝ、何心なく今朝見れば。
早や我愛兒はみまかれり、やりし茄子を枕にて、
覺めぬ眠の夢深く、魂や何處に迷ふらむ。
已か手掌にうちのせて、息暖かに吹きやれど、
覺めぬ眠を如何にせん。幾重も反古に包ませて。
鈴虫塚と墨滑う、書きて葬る秋の日や、
やさしの魂よ、秋風の、寒きにさむる事勿れ。
小さき骸よ、惡形の、むくらの餌食となる勿れ、
觸れば寒き風の香も、土をかつぎて靜かなれ。
好めばながら摘みとりて、花はあひなく萎れつゝ、
愛づればこそも捕へては、虫は果敢なく死にてけり、
美人美貌に災を招く、よき音は汝にあだりき、

…………庭の片隅に鈴虫を葬りて…………

（両評）末段の一節は却つて言はざるがよろしからずや。

ゝゝゝ○亡き友　　神戸　節子

露おく霜をふみわけて、互にさそひさそはれつ、
學びの窓にいそしみし、したしき友や、今いづこ。
更け渡る秋の夜や、千草にすだく虫の音も、
思へば三年の其昔、匂へる野邊の花のもと、
すみきる月をながめつゝ、手に手を取りて語りしに、
あゝそも夢か幻か、友ははかなき身となりぬ。
我なのこしし淋しさよ、昔語りし萩の庵、
今は盛りと咲き香ふ、一枝手折り、墓前にと、
さしてなくさめまゐらさん、思へば短かきさだめかな。

ゝゝゝ○秋日和　　横須賀　渡邊比佐子

秋まだ淺し柿の實の、ふくれてやう〱二分三分、
次郎太郎が月の夜を、上つて遊ぶ村外れ、
今日は日曜風もよし、平和な唄ひやさしげに、
玉屋の翁を圍みつゝ、笛吹きくれと迫り居る。
天高うして秋淸く、次郎が吹く〱石鹼玉、
風にゆら〱立ちのぼる、紅く黄色く紫に。
やがてのぼりし太郎坊の、玉と當つて、パツと散る。
男の子女の子は一聲に、ドツと手を打ち笑ふなり。
翁もろとも踊りたち、皺の顏なくづしつゝ、
喧なかへて興ずるは、でも、繪の樣な日和哉。

ゝゝ○折にふれて　　美濃　各務照子

多くの人は秋の夜の、長き眠りに飽き足らで、

讀者文藝

夢國かなる朝まだき、
破れたる草履うかちつゝ、
牛乳配はる少女子は、
病みたる母にみくすりを、
あはれ、少女子、汝が父は、
去年の霜月中旬頃、
此世を隔て賜ひけり、
常より弱き母人は、
父を逝りたる悲哀にや、
今尚床におはすなり、
みよりの人のあらざれば、
浮世の涙にたゞよひて、
行衛も知れぬ身さ答ふ、
破れたる衣身に纏ひ、
西に東に走せ廻り、
其日の米の代のみか、
まゐらせんさの心なり。
父は如何にさ尋ぬれば、
不圖せし風か原因にて、
殘るは母さ妾のみ。
父の看護の勞れにや、
又も持病の起り來て、
楽より赤貧洗ふ如、
寄る邊渚の捨小舟、
からき思ひに沈みつゝ、
行衛も知れぬ身さ答ふ。

四ヶ原　秋田登志子

〽〇蟻地獄

親子楽しく空洞に、
熱火に燻ゆる大地はふ、
餌えて歸る道すがら、
眞轉倒に蟻地獄、
生血に飽きて今日の日を、
搦鉢虫のうごめくや、
あはれや蟻は生爪に、
地には虫の聲もなく、
冬なば凌ぐ餌えんさ、
蟻には恥ぢよ人の子等。
小さき塵につまづきて、
蟻にも同じ運命かや。
腹ふくらしつゝねむりし、
蟻には強き大鋸。
裂かれて遂に倒れけり、
軒には蜘蛛の綱をはる。

〽〇離れ小島より

東京　倉重千恵子

北風送る濱百里、
夕の星の殘るさき、
轉た思ひに打僵れ、
日毎に忍ぶ故郷の、
父上樣よ母君よ、
涙は露か五月雨か、
在家は彼方さ思へ共、
今は我身の果敢なさ、
朧月夜の花園に、
何をか云ひしはたきゝし、
思ひ〳〵の胸の内、
暫しか程は此の島に、
露な嘆きそ我友よ、
又逢ふ事も笑ふこさ、
不圖見上ぐれば中空を、
寄せては返す白涙に、
霙吹を浴ふる此小島、
床を離れて身を清め。
振斷々々の雲間より、
空を遙かに伏し拜み。
永久に眞幸く在座さ、
昔し戀しき其友の。
思ひ叫はぬ波の上、
共に泣きつる秋の月。
別れの秋重きさき、
變らぬ昔今更に。
只大潮のそれの如、
巳が務を盡してん。
互に心し清ければ、
心靜かに待ちまさん。
洩れ來る星の影淡く、
離れ小島の秋靜か。

〽〇月

美濃　加藤愛子

むらがるほしの南に。
朧の衣のすそ寒う。
通ふ白帆にもつれつゝ。
花に七日の夢さめて。
山川湖の夜の賦に。
眉引細きみかづきや。
玉藻刈る子をつゝみては。
瑠璃の潮にながれ行く。
化粧もうすき月姫や。
闇なる衆生てらさんさ。

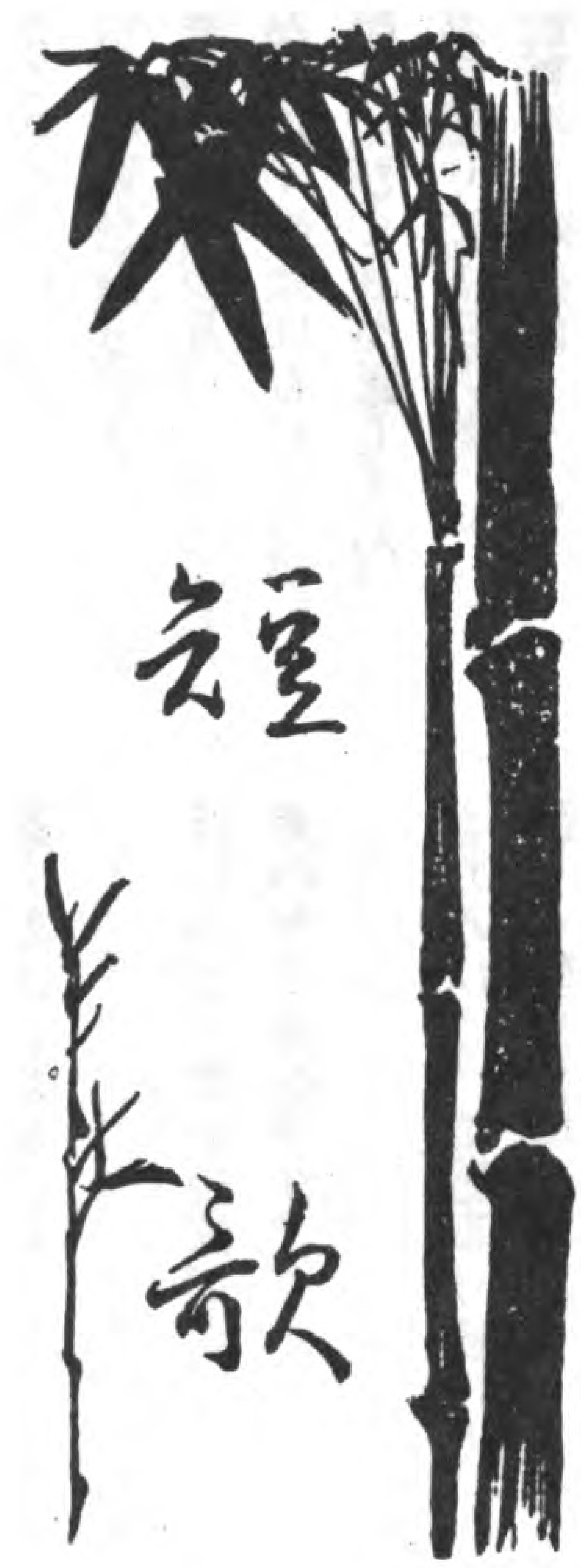
從者なる星を右左。　金砂の天道を行き給ふ。
清しき星の天の賦や。　露おく天の草の原。
花白蓮の香はおちて。　夢の十年涙かな。
淡き光明は幻の。　千春月は戀なりき。

○亡き友

群馬　小野田靜子

萩の葉末にそよぐ風、　千草にすだく虫の音に、
思ひたえせぬ秋なるを、　いとゞあはれに身にしむは、
去りにし年の秋のくれ、　妾か無二の親友は、
二八の秋を一期とし、　夜半の嵐にさそはれて、
はかなく世をぞ去りにける。　あゝ戀しきや悼ましや、
花散るよりもはかなきは、　人の運命と云ひながら、
逝りたまひたる我か友と、　ふり分けがみの其の頃より、
水魚と契る交りに、　ふとたはむれに行く末は、
女同志のふうふよと、　たらちね君を笑はせし、
こともありけり、年長けて、　學ひの道をふみそめて、
ゆくもかへりもともにして、　かたみにおしへつおそはりつ、
學ひの業をはけみつゝ、　互にまけじ劣らじと、
前途の希望語らひき。
春の初花秋の月、　夏のみどり葉冬の雪、
四季折々のたはむれは、　多の友と集ひ合ひ、
樂しくひと日を過してん。
君の逝りぬる三月前、　かたみにうつし繪取り換はし、
幾百年も永久に、　親しき契りかはらじと、

約せしことの仇なれや、　今咲き出でんつぼみ花、
あはれ惜れなき秋風に、　春もまたずに散らされぬ、
ひねもすうつし繪なかめつゝ、　そゞろに昔をしのびては、
胸の思のたへかたく、　あはれこひしさ口惜さ、
よべごさけべご應へなし。　なけかんためと思ひつゝ、
交換せしにはあらざるに、　涙のたれにならんとは、
あはれすく世のえにし糸、　いかにつれなくつくりけん。
ふさ／＼したる前髪の、　上に結へるホワイトリボン、
花の顔月の眉、　いと美はしき高髷も、
今はなか／＼永久の、　形見とこそはなりにけれ。
あはれこひしき我友と、　はかなき夢にあらざれば、
語らふことはかなはじな。
今日もみ墓に詣でんや、　いざや弟よ妹よ、
手に手にもてる香とはな、　妾はなにを、なゝそれよ、
野邊に咲きそふ八千草よ、　君が好みし白菊も、
中にまじりて咲くぞかし。　君よ永久とこしへに、
さゝぐる花を枕とし、　いとやすらかにねむられよ。
折しも吹きくる夕風に、　手向けし野菊はら／＼と、
二ひら三ひら散りそめて、　あはれ尙ます奧津城、
いざさらば君やすらかに、
　らせたまへ我か友よ。



東京帝國大學講師　佐々木信綱先生選

天

秋風　越後國中頸城郡高城村字尾張　水野やすゑ子

湯かへりのふもと三里の裾野原馬の脊にわたる秋のはつ風

評　馬の上より見ゆる廣野、千草八千草咲匂ふらむ景色、よこさに畵のやうなるべし、

地

紅芙蓉　美濃國關町　平岡かん子

夕映は露ふくみたる紅芙蓉やさしき花のうへにうすれぬ

評　紅芙蓉のうつくしき如、歌も亦うつくし、

人

秋の夕　岩代國信夫郡鎌田村　樹口雪子

豆殼をたく夕煙白く見えて鵙の音寂したそがれの村

評　秋の夕ぐれの田園のさま、あはれいかに深からむさ思ひやられて、

秀逸

秋の雨　福島　伊藤よし子

乘り捨てし筏のはしにかはせみの一つとまりて秋の雨降る

初袷　美濃　傍島みゆき子

朝ほらけしたておろしの初袷着心地よろし君とゆくみち

月前雁　美濃　杉山敬子

磯月夜海を渡りて行く君の船見て居れば雁なきわたる

寄露懷舊　美濃　杉山藤枝子

清らなる朝露ふみて妹と鳴子ひきよし鄕居戀しも

題しらず　東京　平塚白百合

紫に富士はあけたり江の島の

白帆にせまるあけぼのゝ色　　横須賀　柏原美奈子

○

白き鳥湖上に飛びて暁の霧
立ちのぼる森中の家　　岐阜　翠芳敏子

○

秋萩の露の玉ちるあかつきの
風こゝちよし鶏のこゑ　　美濃　傍島敏子

○

柿の實のしぶきを口にえりわけて
小猿にわかつ女さるひき　　美濃　傍島小枝子

夕鐘

今日も又なき母こひてたゝずめば
そゞろかなしきいり合の鐘　　相模　藤原下枝子

○

椎の露竹むらの露こぼし來て
窓にすゞしき初秋の風　　岩代　岸野なか子

聞虫

暁のねざめの友となりにけり
宵のまゝなるすゞ虫のこゑ　　對馬　畑島郁子

○

何となく物のあはれのせまりきて
袖に露ちる秋の夕ぐれ　　東京　原　三幸子

閑居燈

ともし火のまたゝく見ればかくれ家も
うきよの風はのがれさるらむ　　下野　井上倚子

○

波し場の杭に干したるみの笠に
とんぼとまりて夕日冷めたき　　下野　井上倚子

○

雨ほそき旅の宿りにつく〴〵と
桔梗のちるを獨り眺めぬ　　埼玉　横田秋子

秋田豊年

此ごろは千島のえぞのおくまでも
御代のたりほの波やたつらむ　　埼玉　高橋豐子

月前擣衣

衣うつ聲は流れてみなかみの
伏屋にのこる有明の月　　神戸　かれ子

月

さやかなるみ空の月をながめては
そゞろに戀し古里の空　　飛騨　南・みれ子

秋夕

流れゆく雲の行方を眺めては
亡き母しのぶ秋の夕ぐれ　　東京　田代糸子

月下薄

ふるさとの尾花か袖に月さえて
まねけど人のとふよしもなし

讀者文壇

甲

折にふれて　磐城　木幡きよ子
行く秋や尾花が末に影見えて夕月匂ふはぎの下みち

雜　美濃　各務順子
露をほすむしろの數のたらぬまでことしのあきのゆたかなるかな

○　岐阜　遠山よしの子
なにとなくかなしくなりて父君のひつぎ送りし日に似たるかな

秋の旅　神戸　今西操子
只一人辿る麓の一つ家のともし火消えて秋雨の降る

秋雲　陸前　前田河千年子
かなしさのきはみ成けり白雲のたな引わたる秋の夕暮

秋眺望　美濃　呉みせ子
ながめやる君すむ山は夕ばえてかもめとぶなり秋の海原

○　神奈川　飯田榮子
虫なく夜笛の音とほくきこゆなり誰が家の子のすさびなるらん

月前雁　美濃　杉山靜子
水清きみぎはの船に人もなくかたふく月に雁なき渡る

海上月　美濃　杉山芳子
更けても播磨の海のあら波に顔そうつせる秋の夜の月

秋の夜　河内　竹内久子
川を下る船のともし火かすかにて風そよくくさ葉の花さく

高尾の山づと　東京　白井春子
家づとに一枝折らんとおもへども色まだ淺しみねのこずゑは

海邊月　東京　白井文江子
沖遠く海士のいさり火影きえて月になりゆく竹しばの浦

○　東京　神谷てる子
君います方のそらより雲わきて白帆さびしき秋の夕暮

白萩　河内　竹内敬子
老松に夕日淋しき古寺のうら道辿ひ白萩のさく

思出　東京　中村千代子
亡き妹とそゞろあるきの偲ばれて日記くり出す秋の夕暮

○　横濱　高橋つれ子
栗焼てかち〳〵山の話なば聞きし昔ぞ今は戀しき

星しらず　東京　平塚いと子
大淺間宿場にいそぐ嶺見えて星かけくらし野分する宵

折にふれて　東京　莊　芳子
農夫かみ草ならしする野にも優しく咲けり糸はきの花

○　横須賀　渡邊比佐子
電車行く俥行く人送り行く街路靜けく秋の雨降る

晝顔　神戸　宇野とも子
暑き日もすゞしかりける我庭のまがきにさけるひる顔の花

秋雲　陸前　前田河みさを子
白雲のたな引渡る空見ても秋はさびしきものにぞありける

○　神奈川　渡邊八重子
くれてなほ書窓に殘る夏の日の松にてりつく日ぐらしの聲

尾花　常陸　岡田萬子
白帆行く大川堤秋更けて痩尾花の亂れあふ哉

夏夕　高崎　石井美代子
おもふどち打ちつれ立ちてたきの川遊ふ夕への風の涼しさ

○　岐阜　傍島眞沙子
高樓に銀燭かざりうたひます鼓置けの夏やせの人

木の葉蝶　北海道　清水きよ子
山風の青葉にやみししばらくを楢のわくらはてふとまひきぬ

夢　美濃　傍島曉子
あたらしきやかたをたてゝ君まちしおごりの夢のさめてさびしも

○　美濃　文野さかへ子
ゆきずりに似ますと思ひかへり見れば君にしあらぬ月の夜のみち

萩寺にありし夜の歌　大阪　木村春江子
ま萩ばらわけ來し袖の露けさをしらでや鹿の夜すがらを鳴く

風告秋　石川　安原外子
打たえてさふ人もなきわびすまゐ松ふく風そ秋を告げける

○　美濃　松田露子
歌にだに詠まざゐ庭の白萩をかざしにせむさ小女子の乞ふ

○　美濃　松田浪子
常にこぬ人もさひきてめづる我庭の朝顔花咲きてより

○　群馬　小野星鶴子
窓の戸をおしあけ見れば曉の空にたなびく一筋の雲

月前雁　富山　萩中夏子
久方の月のひかりをしるべにて雲井はるかに渡る雁がね

夏蝶　岩代　岸野常子
あきつおふ子らだにたゆむ日盛を羽袖かろげにさぶこてふかな

夏月　岩代　岸野せい子
夕立の露もかわかぬ木の間よりぬれていてたる夏の夜の月

秋風　大阪　磯村さだ子
昨日まで嬉しさ聞きし松風も身にしむまでになれる今朝かな

○　美濃　松田直子
荒れ果てし十萬石の城跡に小萩ちりつゝ秋の雨降る

○　美濃　松田重子
崖がまのこはれしあたり土赤く雨に伏したる白萩の花

○　美濃　松田豐子
朝めよき道の野萩にあくがれてつさむる方をしらずおくれぬ

秋人事　埼玉　横田稲子
つみてほす秩父山根のたはこ畑かしらもみゆる世の手わざかな

○　美濃　松田君子
いさゝ川雲月白う浮びつゝ小萩散るなり水清き里

○　須磨　有村業芳子

岩しみつきよき流れをせきさめてみつくるまして遊ふ男の子ら

○　岐阜　中村華子
萩桔梗花の御堂に忘れたる笛よ今よひは誰ふきまさむ

○　岐阜　露木さち子
明星のかけうすれゆく明方をほこりかほにも朝かほの咲く

夜旅　東京　竹山いつ子
ささ遠き山路のたひに夜は更けぬ如何なるかたに宿やからまし

秋雜題　神戸　足立ゑい子
けふもまた釣や遊なむ綾瀬川あや織る波に心うかれて

折にふれて　横濱　鈴木まつ子
わが袖にかゝるなみたを秋のよの月はさやけくてらしけるかな

乙

○　美濃　各務照子
關取も雨ふる宿のつれ／＼に枕引してけふはすまひき

偶感　下總　秋月廣江子
夢の世のうつゝはあらんうつし世も夢ありてこそたのしかりけれ

夏期休業に歸らざりし人に　伯耆　錦織千代子
まち詫ひし人はかへらす萩はちりぬおきあまるつゆ誰にやさらん

鈴虫　兵庫　古東靜子
虫賣や籠にさらはれし鈴虫のこゑふりたてゝ町を行く哉

鈴虫　兵庫　湖東澄子
住家なく人さへさはぬさみし野に何をたのみてなくか鈴虫

○　相模　服部八重子
柴折戸を明けたるまゝに尼去りて萩咲にけり萩散りにけり

刈萱　神戸　節子
もゝ草の匂ふまがきに賤の男が刈つてつかぬる野邊のかるかや

秋眺望　美濃　目島まさ子

讀者文壇

いれかりの歌もきこゆるまでにしてことしのみのり見るぞうれしき

豐年　美濃　長濱ゆきみ子
見わたせばこゝしたてたるにひくらもせましと思ふみのりうれしも

月映波　美濃　渡邊ひろし子
海岸の萩の花ちる波の輪に別れてよする月の影かな

月映波　美濃　藤引くわ子
かりかれの渡るも見えてうきみごりさゝ波きよき月のかげかな

朝顏　福井　廣部小雛子
此處かしこきそふの如く蔓を卷きておのがしゝ咲く朝顏の花

月前雁　美濃　杉山芳翠子
月清き磯の月夜を君住める島ときこゆる初雁の聲

背の君のいたつきを守りて　美濃　杉山たつ子
窓をもる月影白し背の君のおもわさひしき虫の聲かな

夏夜夢　美濃　各務不美子
みぢか夜の夢の中なるうきはしもわたれはなかき心地こそすれ

秋風　伊勢　[illegible]來子
たちそめし初秋風にばせを葉のやぶれて月のかげおもしろき

朝顏　美作　鈴木綾子
露ながらよべ挿し置きし朝顏の甕の花はけささかりなり

○　東京　平塚つゆ子
五月やみ今宵螢にあめつちのひかりをまかせしづけさにゐぬ

秋の夜　河内　竹内久子
針の手をしばしとゞめて秋の夜の思ひは遠き故郷のそら

橋　山根しげ子
たよりよき此大橋は村おさがこゝろづくしにかゝるなりけり

山路紅葉　東京　倉重千嘉子
小倉山峰の紅葉にこと問はむありし行幸の道やいづこと

[illegible]　河内　竹内敬子
秋[illegible]の[illegible]の[illegible]そさふれはすゝきの千里秋の風ふく

落雁　東京　紫子
いさり舟家路をいそぐ櫓の音にこゑをあはせて雁なきわたる

初秋夕　神戸　宇野夏嘉子
なく蟬の聲も思はて昨日今日木陰みぢかくなりにけるかな

草花　陸前　前田河みるを子
あまたある千草の中にさきいでゝ世にもめでたき白菊の花

隣家虫　名古屋　土屋たま子
庭つゞきうかゞふ窓の火は消えてとなりは虫の聲のみぞする

折にふれて　茨城　金澤すゑ子
こゝはこゝ故郷遠しさはされど菖の葉の花さかんはま邊そ

折にふれて　高崎　石井さく子
つま琴のしらべゆかしき夏の夜に人まつ虫の聲の涼しさ

晴夜月　岐阜　菊野そい子
古びたの二王の門の太柱いたづらかきも見する月かな

○　神戸　登與子
月蟲に興深からん此頃のわが故郷のなつかしき哉

鈴虫　兵庫　三宅久美子
おこたりのいさめとそなるまなびやのねむりさまし、鈴虫の聲

初雁　千葉　吉松龜子
貝摺の文箱かたけ小舍人か行方はるかに初雁の聲

○　美濃　松田秋子
ものふりしやどの垣根のひまもれて朝日に匂ふ露の朝顏

夏月　岩代　岸野さよ子
夕立のはれゆく庭のまきむらを涼しくもるゝ宵月の影

鵜　岩代　岸野菊子
あれはてゝなづなおひたる故郷のついちの上になくからすかな

○　美濃　松田文子
鷹狩は短かく嵯峨に日は落ちて[illegible]村は十六夜の月

○　美濃　松田春子

あづまやに書な讀む妹が聲のして夕日の窓に虫の聲きく　美濃　松田時子

○

吹くとしも覺えぬ野邊の朝風に露のあさがほゆるがぬばなし　美濃　松田花子

○

咲は散る花にもまして果かなきはことの葉草の末に置く露　美濃　松田星子

○

高殿の琴の音たえて奥にはの露の白萩月おぼろなり　美濃　松田・月子

○

野亭秋遊

野の寺雨にそぼ〳〵くれそめて佛さび立ち虫の聲あり　埼玉　横田やな子

松千年緑

秋ちかし野守の庵やつくろはん千草いろめき虫も聲する　茨城　脇坂須磨子

海人見月

常に見し操木高き松林千代のためしはいふまでもなし　北京　辻野音羽子

○

沖つ瀬に影を殘してあま人のかへれる磯にかへる月かな　神戸　野上よれ子

○

天の戸の明るほどなも待かれて堅田にいそぐはつ雁のこゑ　美濃　松田萩子

○

山雁のいでて鳴きける小山田は稲穂おもくも鳴子たかなる　美濃　松田晶子

○

稲葉山松に昔のことゝへば風に露ちる武士のそで　美濃　松田菊子

○

露宿り銃を枕にわが背子は何夢むらむ荒野らの月　美濃　松田信子

○

富人の車は去りて秋風は江南十里波の音に入る　須磨　有村紫子

○

今日よりは琴ち松と名けしなこゝろして吹け須磨の浦風　飛騨　中西芳エ

○

野司の花野の床なたち出てゝ夕くれ寒く鶉なくなり

○

故郷萩

草陰にすたく虫の音こぼるらん月さえ渡る秋の夜半かな　岐阜　鷲木さし子

月

さな鹿の聲聞しよりふるさとの萩の花妻月ころひぬらむ　東京　小栗捨子

秋

いつしかも心つくしの秋は來てさやかに照らす月を見るかな　東京　田代貞子

山家鹿

一人夜の淋しきまゝにたゝずめば聲もあはれに聞ゆ蟲の音　神戸　藤幸子

満月

木立吹く賤が伏屋の庭にきてまよひやすらんさな鹿の聲　神戸　竹野節子

秋雜題

天津空こよひ名高く見えにけり月にたなびく浮雲もなし　神戸　節子

○

立出し今朝にたがひて歸さは夕日さひしき秋の深山邊　神戸　足立あさ子

○

深々と虫さへ眠るうしみつにいかなればこそ我は眠らじ　熊本　矢野夏子

○

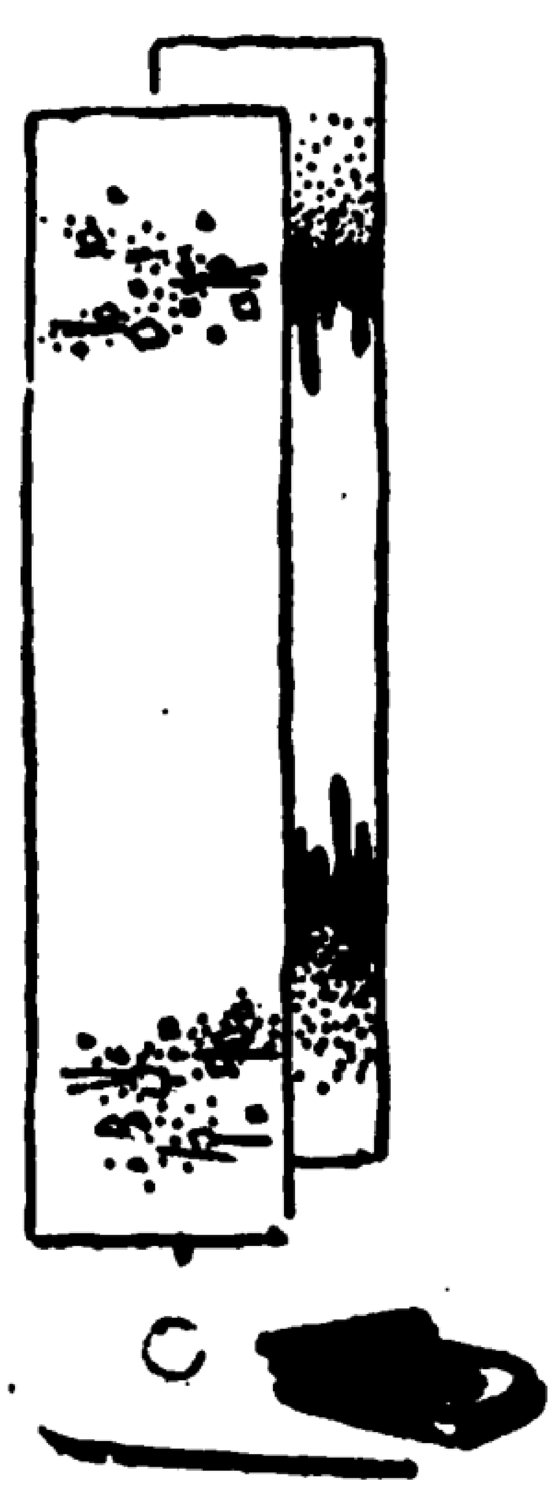
秋の夜はいたくふけたり大寺の森に下弦の月ぞさびしき　東京　石田りつ子

○

日さかりに笑みてにほへるひるかほもさすがにうれし夕立の雨　東京　石田柳子

○

海神の怒りて荒るゝ水の面を物ともなさず泳ぐ兒の勇まし　横須賀　大澤まさ子





内藤鳴雪宗匠選

天

闇の夜の川一筋や秋の風　福島市本町　伊藤よし子

地

そゝかしの使去りけり秋の暮　美濃國關本町　加藤愛子

人

秋の鮎一かたまりに落ちにけり　横須賀　小野ゆき子

日は西に秋風寒し捨小舟
虫籠をつらぬ小窓もなかりけり　東京　倉重千惠子
名月に古塔の下を歩みけり
鳴啼くや大學林の夜提灯　横須賀　柏原美奈子
色褪せし小袖吹きけり秋の風　西ヶ原　秋田登志子
名月や一騎むち打つ嵯峨の奥　備後　小林つれ子
糸萩を起して庭の掃除かな　東京　三輪蝶子

名月や寝た子の顔に花すゝき
川岸に船はつきけり夕月夜
北面の武士の角力や院の庭
豊年や天地もゆるぐ村相撲
名月や昔ながらの淡路島
夜寒や人踊る門の闇
明月や鬼あそびする村の子等
月の茶屋爐は秋を賞しけり
柿の木に次郎太郎の月見哉
月今宵歌詠む法師召されけり
城落ちて三百年のすゝき哉
赤蜻蛉張板に日の斜なり
涼しさの竹の柱も山家かな

上野　小野里佐久良子
上野　小野里鶴子
美濃　松田花子
美濃　松田昌子
品川　岡本八洲子
岩代　岸野常子
美濃　傍島みゆき子
横須賀　渡邊比佐子
相模　服部八重子
横須賀　齋藤松代子
岩代　樋口ゆき子
常陸　岡田萬子
美濃　加藤愛子

野分して猫は啼きけり窓の月
殘月やさもし灯白き伊勢が家
夜寒さや物問ひにくる人の妻
湖へ向く佛の顔に秋立ちぬ
雁渡る泊り〱や旅日記
ほろ〱と風の中なる落葉かな
秋晴れて千里の駒の嘶きぬ
米賣りて酒を買ひけり秋の雨
吾戀に似て朝顔のしをれけり
山寨の月に何焚く煙かな
神苑や草冷かに鹿の夢
秋風や島を離るゝ夕鴉
秋の水ものうき蝶の映りけり
手習の弟子も來ぬ夜やきり〱す
秋雨に烏おり居る畑かな
里の子の牛追ふ聲や霧の中

神戸　綿本ゑい子
横須賀　高橋つれ子
美濃　藤引くわ子
東京　中川ゑい子
横須賀　小野千代子
神戸　足立あさ子
飛驒　中西よし子
飛驒　南みれ子

鎌倉や訪づるものは秋の風　　岐阜　中村はな子
朝寒を摘つ花咲く作蓮かな　　植木さよ子
佛龕の灯火ゆらぐ夜寒かな　　弘前　西村くれか子
美しき尼に過ひけり路の萩　　神奈川　渡邉八重子
竹林に一星飛んで秋に入る　　同　同
鬼灯や四十女の薄化粧　　京橋　中内綱子

餘吊　（太祇と嘯山の兩吟）

次句せん此夜硯の氷る迄　　太祇
師走朔日短檠の月　　嘯山
じや〳〵馬のいななき遠く繋して　　ヽ
二つに裂し今も大國　　ヤ
汐のさす細江の眞菰生茂り　　ヽ
胃きつ立て鵜のぬき脚　　山
お屋敷にかうした山があらうとは　　山
算へられ居る日傭百人　　ヤ
西瓜皆大半切に切込んで　　山
押合にけり開帳の秋　　ヤ
あはれ景月に來はやな思ふごち　　山
階子の時宜に袖を引かれた　　ヤ
肺棚へ三寸參らせて祝ふらん　　山
腐見せうか勝示おしやりそ　　ヤ
花遇き都留郡内の山陰に　　山

讀者文藝

短き獨活を十ばかり得つ　　ヤ
かしけたる放し囚人かしつきて　　山
風のあしたの中島の船　　ヤ
ナ生飯まけは烏來馴るゝ軒の端　　ヽ
法華の註は五年ふりなる　　山
瀧の音するさく拆てあら涼し　　ヤ
主孫まふけ狐古にき　　山
棕櫚箒千疊しきへ持て出て　　ヤ
誓へる中をつゝむ苦しさ　　山
君が爲誠は惜しき此命　　ヤ
むり〳〵と罫こかす也　　山
饅食へと云へは邉りにかしこまり　　ヤ
いつ歩くにも馳性急　　山
用意ある短冊温める月の露　　ヤ
菊の籬を漪う結ふたり　　山
灯す程紅葉は見えぬ如意岳　　ヤ
長吏の飛脚大事なるらん　　山
狗の子のいかゞしつるぞ聲を立て　　ヤ
合奏すみし練塀の内　　山
うす霞かゝるをやいふ花曇り　　ヤ
柳の菜のまける洋　　山

新刊紹介

世々のあと

佐々木弘綱著
博文館發行

千載集の一行を埋めん爲には、軍なかばに選者の門を叩き、選者のうなづかるゝを見て、今生に思ひ置くことなしとし、之を無上の名譽としたものである、而も讀人しらずとして撰はれたるにも拘らず名を殘したる忠度の歌を見れば、一首の歌もなかく貴い、この集は故佐々木大人が、神代以來の言葉の花を撰びたるものにて、即ち世々の文學のあとを之によつて見るを得べし、附錄として作者一覽、和歌傳統圖、近世國學者歌人年表を添へられたるは寶貴なり、令息信綱大人校訂せらる(定價二十八錢)

化粧のをしへ

東京化粧研究會編纂
同　會發行

皮膚の構造より皮膚の生理的機能といふむつかしい事から、肌膚の洗滌用品、美顏術、艷瑯化粧法、毛髮の注意等と、事細かに化粧の必要と化粧の方法を說いたものである、卷首に「潮流にしたがふて航海をさげよ、化粧のをしへをよみて容儀をとゝのへよ」とある、容貌の美しからんことを希ふものゝ本書を繙き玉へ、書架を飾るにも足るべき美本である(定價六十錢)

中等唱歌集

天谷秀著
十字屋樂器店發行

唱歌集としてふさはしき美しき袖册である、なかく面白き樂譜もある、もし此集中旗野某の最劣なる唱歌をのぞかば中等教科書として遺憾なかるべし(定價五十五錢)

定價

冊數		定價
一冊	前金	貳拾錢
三冊	前金	五拾七錢
六冊	前金	壹圓拾錢
拾二冊	前金	貳圓拾錢

全國郵送無料

廣告料

五號活字一行廿三字詰

	四半頁(十六行)	半頁(三十二行)	一頁(六十四行)
特等		二十圓	三十五圓
一等	六圓五十錢	十一圓	二十圓
二等	五圓	九圓	十六圓
並等	四圓	七圓	十二圓

御注文規定

一切前金の事(但郵券代用一割增の事)●前金領收證は差出不申本誌の到着を以て金員領收と御承知ありたし●領收證を要せらるゝ方は別に參錢切手御送附ありたし●爲替は四谷區霞ヶ岳町卅九番地中川愛氷宛に願ひたし●御照會の件は返信料御送附あるべし

明治四十一年九月廿八日印刷
明治四十一年十月一日發行

東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
編輯兼發行人　中川良平

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷人　佐藤保太郎

東京市四谷區四谷霞ヶ岳町三十九番地
發行所　女子新聞社

東京市京橋區木挽町二丁目十三番地
印刷所　中屋商店活版部

新刊

貴族院議員 御歌所參候 子爵 入江爲守君題詠
共立女子職業學校編物主任教授豐原繁尾子先生著

女子手藝 編物教科書

全 和裝美本
一冊 定價金五拾五錢
郵稅金六錢

目次概要 編物の必要○編物用器並に使用法○編物用糸の事○編方の種類○大人用靴下の編方○涎掛○垂帽子○花瓶敷○菊花形巾着○手袋○半手袋○五本指附女子用手袋○夏手袋○女子用半手袋○花靴○指附靴下○風車帽子○二重帽子○夏肩掛○肩掛飾○肩掛○シャツ○ズボン下○女子持銀貨入○男子持銀貨入

本書は斯の道に於て最も古くより經驗を積まれ、最老煉にして都下に有名なる豐原先生が、初學者の爲め最初編方の種類方法より、進んで平素實用の編物に就き、最新形の編み方を一々圖解によりてくはしく說き示されたるものなれば、女學校の手藝敎科書に最適當せるのみならず、家庭に於て、獨習せんとする人此の書によりて練習せば、親しく先生の膝下に侍して、其の敎授を受くるが如く、坐ながら其道を了得し、其の技に通ずるを得べし今回豐原先生が文部省より編物檢定試驗委員を命せられたるを見ても本書の價値は自ら明ならん、

發行所 東京市京橋區築地二丁目廿一番地
電話新橋特八八番、二六九三番
振替貯金口座 一一七八番
株式會社 國光社

大賣捌所 東京市 東京堂、東海堂、良明堂、文魁堂、至誠堂、須原屋、
北隆館、泰祥堂、上田屋、[illegible]館、大阪市 北區久太郎町 積文社

日曜日は赤紙刷 ★ 土曜日は青紙刷

日刊新聞

女子新聞

世界唯一

◎發行延期

女鑑擴張の爲、明治四十二年四月五日に延期、同日必ず第壹號發行

女子新聞は、通俗にして穩雅なる文字を以て、大方女子諸君の耳にすべき社會の出來事を報道し、其問題ともなるべきものは、擧げて諸大家の高見となり、事に後れずして毎號の紙上に現はるべく、尚連號家庭敎育の一助ともなるべき小說講談を揭載し、且雅麗なる木版寫眞版を挿入すべし、

女子新聞は、文字繪畫の排列に多くの意匠を費やし、紙質の良好と印刷の美麗なるは他に比較なかるべく、廣告の末に至るまで、一點だも不快文字なし、

女子新聞は女子諸君の和歌小品文の寄稿を歡迎す、尚每號一技一藝に秀でたる諸孃の小照、及び團欒の家庭を紙上に映出すべし

更に其內容を頁にて分くれば

第一面 社說及諸大家の論說、詞苑、小說、講談等を揭ぐ

第二面 政治及社會の出來事を何人にも讀み易く解し易きやう平易に記述す

第三面 婦人界の出來事、家庭訪問記、諸般の女藝、すべて家庭に有益なる諸記事を載す

第四面 紹介して不都合なき廣告

女子新聞發行に就て

日刊新聞は、社會萬般の事情を知る上に於て、男女共通の讀物たらざるべからず、然るに廣きを求むるの結果雜駁に過ぎ、時流に投ぜんとして自然主義に陷るの弊あり、もし善良なる家庭に於て、聲を大にして全紙を通讀し得らるゝ新聞はと問はゞ如何に、たゞ首を傾けて指を折るに苦しむのみならん、故に新聞を讀む人の多くは、時勢に後れざらんことを期して、却づて望ましからぬ傾向を進むるの恐れなきにあらず、予素より不敏の一寒生、到底潤澤の資本と、多數の名士によつて成れる、新聞社の多き中に介立して、花々しき藝當は演じ能はざるも、風俗改善の旗幟の下に、婦人の常識を養ひ、延いて家庭を和樂に導かんことを期す、幸に社會の或一部分の空氣をだに淸うするを得ば、本紙發行の目的を遂行し得たるものと信ず、

中川愛氷

東京四谷霞ヶ岡 女子新聞社 本社にて女鑑發行

女鑑

明治四十一年十月一日發行　每月一回一日發行　明治廿五年三月十二日
第拾八年第拾號
第三種郵便物認可

